
善人伝説

風雅 梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

善人伝説

【Nコード】

N4587U

【作者名】

風雅 梟

【あらすじ】

世紀末善人伝説の改訂版です。

249X年 某惑星にて

世界は突然光に包まれ、多くの生命が死に絶えた。

そんな中、世界を救うために

偉大なる善人が光臨する！

これは後に伝説となった、
一人の少女による戦いの物語である。

この小説が題材となっているゲームを作成中です。

<http://gasutorageta.web.fc2.co.jp/index.html>のHPにて公開中。

第一幕 伝説の幕開け（前書き）

世紀末善人伝説の改正版です。

この小説が題材となっているゲームを作成中です。

<http://gasutorageta.web.fc2.co.jp/top.html>のHPにて公開中。

第一幕 伝説の幕開け

249X年 某惑星にて

行き過ぎた文明は、自らを傷つける刃となり、やがては自分の身をも切り裂いてしまう……。。

世界は突然光に包まれ、多くの生命が死に絶えた。

ある人は、核だといい、ある人は、神の裁きだという。真相は分からない。

それはこの物語を追っていくうちに、もしかしたらわかることもあるのかもしれない。

人が居る限りは、善と悪は絶えず存在する。

自らの善を絶対視することが、狂人と言われるのなら、善人とは狂人なのか？

自らの狂を受け入れた時、人はどんな苦難をも乗り越え、神をも超えることが出来るのかもしれない。

英雄か受難者か。

・・・しかし、その狂人こそ、もしかしたらこの世を救う救世主となりうる可能性がある。

例え、傍から見てどんなに馬鹿らしく不恰好であるとしても、貫けばそれは真実となる。

善人伝説

「ここが魔王城か・・・。」

少女がつぶやく。

年の頃15位だろう。白いコットンハットに、白いコートを着ている。何かを表しているのだろうか？

髪はセミロングで、瞳孔は青い。存在感が無く今にも消え去りそう
だ。

まるでお化けが死人だ。考えてみれば彼女の格好はまるで、お化け
の変装のようにも見える。

少女が魔王城と呼んだビルは、ガタがきている八階建てのビルで、
がたがきてる八階建てのビルだ。

長年整備されていないのだがそんなビルはこの時代これだけではな

く数多くある。

少女にはこのビルが魔王城に思えるようだ。

この日がちょうど雨が激しく降っており、ビルにバックには雷が浮かび確かに魔王城という感じではあった。

実は、このビルには、いわゆる悪人と呼ばれる人間が、籠っており、大変危険なビルなのだが、そんなこと少女は意にも返さず、まるで自分の家に入るが如く、しげしげと近づいていった。

「なんだてめえは。」

野太い声が少女を呼び止める。

如何にも悪人という面のおっさんが、少女を警戒気味に見ていたが、少女はそっちの方を見もせずに、中に入ろうとするので、おっさんは大慌てで、門の前に立ちふさが

「お、おい！待て！待つんだあ！ぐわあ！」

善い人の尋常ではない気配におびえたおっさんであったが、おっさんが待つんだあといった瞬間には、もう横に吹き飛び、声を発しなくなっていた。

「うるさい！この善人の邪魔をするか！」

善人？と称した少女は、伸びて動けなくなっている、

おっさんの方をようやく注視した。

「なんだなんだ!?!」

表が騒がしいので、がやがやとビルの中から、外へ出てくる悪人達。

「うお!悪人Aがやられてやがる!どいつの仕業だ!」

悪人達は、当りを警戒気味に見渡している。

ビルが空いたので、少女はどかどか出てきた悪人達を避けて、中に入っていく。

少女がビルの中に入ると、人はほとんどいなく、真ん中に上に上がる螺旋階段が設置されていた。

「どうやらこの上に悪人達のボスが居るみたいだね。」

その思い上がりにもこの善人たる善い人が罰を与えないといけない。」

別に、ひそひそ声でつぶやいたわけではない、

少女にとって、自分の成すことは、公明正大であるのだから、何故こそこそとやらなければならないのだろうか?

そんなことは断じてないので、

その声は表に出て、がやがや、やっていた悪人達にも丸聞こえになり、

ぎょっとした様子で、またどかどかと入り込んできた。

「ん?なんだあいつは?おい!あいつは誰だ?」

悪人の中でリーダー格と思われる男が、周りの悪人達に問うが、悪人達の誰も知らないらしく、首を横に振っている。

そんなこといつてる間に、
善い人は階段をドンドンと登っていつてしまっている。

「ちっ！まあいい。とにかくあいつを捕まえる。」

リーダー格の男は、

そういつていらいらしたようにタバコを取り出し、火をつける。

周りの悪人達は肩をすくめ、

階段を登っていた善い人においつき、声をかけた。

「おいおい、お譲ちゃん。ここは危ないんだぜ？お家に帰んな。」

そういつて、手を触れようとした刹那、

悪人は少女の回し蹴りを食らい、階段の下に叩きつけられた。

一瞬あたりは何か起こったかわからず、静寂が支配した。

ようやく悪人達が事態を把握し、罵声を発しようとしたその前に、
少女が悪人達に向かい、大喝した。

「この善人たる善い人に、そんな策謀が通用しないということが、
まだ分からないのか！」

わけが分からない。

しかし、尋常じゃない雰囲気を感じ取り、悪人の一人が、少女を指
差し叫んだ。

「おい！こいつは、狂人だ！いつもへたくそな漫画を描いていて、

魔人に媚を売って暮らしている、悪党だ！」

「そういえば、俺も噂には聞いた。
白服、白帽子、まさしくあいつだ。

確か、自分は善人だとか言って、自分を正当化して、
悪逆の限りを尽くしてるとかいう……。」

そう聞いても、リーダー格の悪人は慌てず、にやりとした。
悪人なら、自分達と同じわけなのだから、うまく交渉すれば、こち
らの仲間になるかもしれない。

ちなみに魔人というのは、この自治区の実質上の領主のことで、
昔そういわれていた通り名が、そのまま使われているといった感じ
だ。

しかしながら、この悪人達の罵詈雑言は、自分は善人だとか自称する
少女を激怒させるに充分すぎる言葉だった。

「この善い人を馬鹿にするのか！おのれ！もう許さん！」

少女は、階段に立てかけてあった、
槍を取って、頭の上でくるくると回した後、後ろに構えポーズをと
った。

『唸れ！旋槍！』

そういつて、槍を回転させつつ、階段を下りてくる、
それに巻き込まれた、悪人達は次々に吹き飛ばされていく。

リーダー格の悪人はぎょっとし、慌てふためき、地下へと逃げてい

った。

しかし、なぜか自称善人は、リーダー格の悪人めがけて、一直線に向かってくる。

「うわあ！やめてくれー！」

「食らえ！善の鉄槌！」

そういつて、槍を一閃し、槍の腹に当たった、リーダー格の悪人は、地下へと転がっていった。

残った悪人達は、おびえた表情で逃げていった。

「この善人から逃げられるとも思ったのか！悪は逃さん！」

自称善人はそういつて、悪人達を一人残らず駆逐した後、ゆっくりと階段を登っていった。

転がり落ちていったリーダー格の男は、しかし闘志はまだ失っていなかった。いやそれどころか、自称善人に逆襲を誓った。

「白服め！俺たちをなめやがって。今に見ている……。」

階段を登っていき、最上階に登った自称善人は、空を眺めた。

どうやら雨はまだ降っている。近くに雷も落ちているようだ。

なにやら不穏な気配を感じる。

自称善人は、その正体が何か、見極めようとしていた。

自称善人の後をこっそりとつけていった、リーダー格の悪人とその他大勢の悪人は、

自称善人が、空を眺めている間にゆっくりと展開した。

リーダー格の男は気取ったポーズをとって、左手を額にあて、右手を、伸ばし、手のひらを上にして、自称善人のほうを指しかつ叫んだ。

「はっはー！きさまー・・・ぶあー！」

リーダー格の男は、セリフの途中で異様な力で、吹き飛ばされ、ビルの外へと落ちていった。

その後炸裂音と共に、謎のエネルギー体が、自称善人を悪人達を襲う。

悪人達はみな、奇声を発し、ビルの外へと落ちていったが、自称善人はその攻撃を全て避け、再び空を見上げた。

「けっ。」

漆黒の闇からうつすらとシルエットが浮かび上がる。

男は、禍々しいオーラを纏っている。善人は直感した。

この男が、先ほどの攻撃を放ったに違いないと。

善人は、背から大剣を取り出し、ゆっくりと、横に歩きつつ、男との間合いを取り、慎重に対峙する。

男は、寝そべっていたが、

善人が、先ほどの攻撃に当たらなかったのだと、ようやく分かり、むくりと起き上がって、善人に尋ねた。

「おいてめえ、ここは俺の寝床だぜ。」

雨に打たれてずぶ濡れになっている男が、ここを寝床だという。ならば男は、このボスなのだろうか。

善人にはそうは思えなかった。ただ思うのは、男は自分の「敵」だということ。

それだけは強く感じた。

男も同様だったのかもしれない。

善人は答えた。

「私は、善い人だよ。悪人をやつつけるのが私の使命だ。」

男は、頭を指でくるくるさして、呆れた表情で善い人を見る。

「何だその顔は？この善人たる善い人を馬鹿にしているのか？」

男は答えた。

「どうやら、てめえは俺にぶっ潰されてえみたいだな。」

「なんだと！もう我慢ならん！」

なんだかよく分からないタイミングでぶち切れた善い人は、姿を消し、穀潰しに向かって剣を振り落とす。

いや姿を消したのではなく、あまりの速さにそう見えただけだ。

当然男は哀れにも真っ二つになっているはずなのだが、そうはならなかった。

善い人の背後で声が聞こえる。

「なんだそりゃ？素振りの練習か？」

男はそういつて、ナイフを抜いて、善い人に向かってきらりと光らせた。

その後ナイフをしまっているところを、善い人に再襲撃されたが、またもや、善い人の背後に現れる。

「ひゃっは！潰れちまえ！」

そういつて、手を構えた先から、目に見えない何か、発せられ、善い人に襲い掛かった。

それらの攻撃をことごとく善い人は避け、男を驚かせる。

「な、なに？」

一方善い人は、心なしか笑いながら、攻撃を加える。

善い人ほどの力を持つと、それを振るう対象が限られる。

全力を持って、力を受け止める相手は、彼女にとっても、

快い存在だった。例えそれが直感的に「敵」だと認識したとしても。

男はそれどころではない。

攻撃が避けられたということが信じられず、

やたら滅多ら不可思議な攻撃を繰り返し、それら全てを善い人に避けられる。

ということを繰り返した。

「なんで当たらねえ！当たれ！」

心理的なあせりは隙を生み出す、男とて戦闘の素人ではないが、心情的な余裕が、力の差を生んだ。

『見えた！突き刺さる脚！』

針の穴ほどしかない、男の心の隙をつき、

善い人は必勝の攻撃を繰り返す。

男は、片手で蹴りを受け止めるが、吹き飛び、ビルの外に転落しそうになるが

かろうじて、それを阻止する。

ぶら下がっているところがもろく今にも崩れそうなため、

長くは持たない。

すぐに、這い上がるうと思ったが、そこへ善い人がやってきた。

「へへっ。なんだてめえか。おいっ！てめえ善人なら俺を助けやがれ！」

善い人は腕を組み考え、男に尋ねた。

「そういえば、君の名前は？」

「ああ……。穀潰しっていうんだ。なあ助けてくれよ。」

善い人は、哀れな穀潰しの命乞いに、助けようかと思ったが、なぜか穀潰しがにやにやしているのが、癪に障った。

「残念だよ。穀潰し君。私は善い事をする使命に忙しい。」

「おい、てめえ。俺を今ここで助けねえと後でどえらい目にあつても、

知らねえぞ！」

善い人は、その言葉を無視し、去っていき、それをほぼ同時に、瓦礫が崩れ、穀潰しは下に落ちていった。

落ちた先には、先ほど穀潰しが落とした先客達がうずくまっていた。

「ちくしょう！えらい目にあつたぜ！ん？なんだこの偉そうな野郎は！」

穀潰しが落とした悪人達をせっせと運んでいる、ハエのような生き物。

ハエのような生き物だが、大きさは牛ほどにあるハエが、穀潰しに対する、あてつけのように、悪人達を介護していたので、穀潰しは腹が立った。

このハエは、太古から眠っていた古代生物の一種で、核？だか何だかの光に世界が包まれた、俗にいう崩壊後の世界から、急に目覚めて出現したらしい。

「ひゃっは！潰れる！」

「ピギー！」

そういつて、ハエを蹴っ飛ばすと、上に載っていた悪人がごろりと落ち、

穀潰しも少し悪いことをしたかなと思ったが、いや痛い思いをしたのは自分も同じだ。

こいつらだけじゃねえんだ。と思い直して、気を取り直し、

「善い人とかいったな。暇つぶしくらいにはなりそうだな。」

と呟き、穀潰しは、またビルの中へと入っていった。

その背後を、怪しく光る眼が見詰めていた。

善い人は、屋上にはボスがいなかったと判断し、
そういえば地下があったことを思い出したので、下へと降りていっ
た。

この際、ボスがいるかどうかは、問題ではない。

このような建物にボスがいないなどということはないのだから、
いないのなら無理やりでも見つけるべきだ。

あるいは、あのリーダー格の男がボスだったのかも分からず、
善い人もその可能性もあったが、風格が足りないから現場の
指揮官レベルだと判断したのだ。

まあ善い人の場合、なんとなくで全て片付けられる。

直感のみで動いている人間だ。

ビルの中は誰も居らず静かだ。

地下への入り口は開いている。

「おそらくここに、ボスがいます・・・この善人の目は欺けない
ということを思い知らせてやらないといけない。」

そういつて、善い人は地下へ下りていった。

洞窟のような地下をある程度進むと、鉄の扉があり、それ以上進め
ない。

「突き刺さる脚！」

ドカーン。

突き抜け、体を回転させ、部屋の真ん中に着地する。

着地した瞬間、何者かにぶつかり、よろける善い人。

「おう！善い人か！どうやらこの奥にボスがいるみたいだぜ！」

ぶつかった人物は穀潰しらしい。穀潰しは巨大なハ工と交戦していた。

「ひゃっは！あいつもなかなか手ごわいみたいだぜ！善い人さんよお！

さあ行こうぜ！気にいらねえやつをぶっ潰してやろうぜ！」

この男は何か勘違いをしているらしい。

この善人たる善い人と自分が同格だとも？善い人は不満を感じた。

「この善人たる善い人が、君ごときと同格とでも？」

その言葉を聴き、にやりとした穀潰しだったが、

腕がハ工の真空波によって切り裂かれ、顔色が青くなる。

すぐに、腕を回収した後、くっつけなおす。

「気合で腕もくっつくのか。」

善い人のトンチンカンのような台詞に、いちいち受け答えしている

状況ではない。

たかが八工と馬鹿にしていたが、どうやらシビアな展開になってきた。

穀潰しは、腕から衝撃波を発し、八工に応戦するが、殺傷能力、速度、

共に、八工の真空波のが上を行く。

穀潰しは、焦り善い人の後ろに逃げる。

善い人は向かってきた真空波を、大剣でなぎ払う。

「やるじゃねえか。」

穀潰しは、善い人に話しかけた。

「まあね。こんなの簡単だよ。」

その言葉を聴き、穀潰しは、お気楽な頭だ。騙すのは簡単だと思っ

た。

「おい。さっき俺はボスは奥にいたよな。」

あいつはそれをこぼれている。つまりあいつは、悪人ということだ。俺に協力しろ。それとも善人というのは口だけか？」

善い人は無然として答えた。

「この私は、善い事をしなければならぬ。」

「分かった。時間を稼げ。けりはつけるぜ。」

善い人はしかし、腑に落ちなかった。目の前にいるハエは悪人ではない。

善い人の善人魂はそう告げていた。

しかし今は、先に進むしかない。

善い人は、穀潰しに降り注ぐ、真空波を全て切り裂き、接近する。

まるで小枝を振り回すように大剣を振るい、ハエに攻撃するが、その攻撃をことごとく避けられる。

「私より早い？」

ハエは善い人を振り払い、穀潰しに向かって突撃した。

「ちっ！」

穀潰しは、横っ飛びし、ハエは突撃が外れるが、目からビームを繰り出し、

穀潰しを攻撃する。

穀潰しが、展開していたバリアーをつきぬけ、床に穴を開ける。

「なに？バリアーごと？切り裂け！サイコカッター！」

カッター状の衝撃波をハエに放つ。ハエはそれを旋廻してかわす。

「おいおい善い人さんよお！これじゃ大技が使えねえぜ！ひゃっは！」

そついつつ穀潰しは、内心肝が縮む思いで、冷や汗をたらしていた。

「当てる！ダブルボーガン！」

どこからかボーガンを取り出し、雨あられのように矢を八工に降り注がせる。

時間差で、槍に持ち替え、八工に向かって突進する。

「捻じ込む！トルネードチャージ！」

自分の放った矢の嵐をつきぬけはじき、八工の羽を捕らえる。

「決める！突貫脚！」

空中で、方向転換し、速度の速いとび蹴りを放つがそれも外れる。

その時……。

『潰れる！ランダムスフィア！』

穀潰しは、球状の爆裂する衝撃波の玉をいくつも、善い人と八工に向かって放つ。

ちょうど体制を崩していた八工はその攻撃に巻き込まれ、

善い人も余波を受け吹き飛ばさせる。

幸いダメージは軽症だ。しかし八工はもろに当たってしまった。

「ひゃっはっはっは。ざまあみる！」

穀潰しは勝ち誇り、八工に近づいていく。

ゴゴゴゴゴ。

「ん？」

洞窟全体が揺れている。

「おい。善い人さん。どうやら洞窟が崩れるらしい。」

善い人は、腕をかばいつつ穀潰しのほうに歩いてきた。

「そうみたいだね。」

穀潰しは善い人の怪我に気づき、声をかけた。

「てめえは間抜けだな。俺の攻撃に当たっちゃったか。」

「なんだと？どうしてもこの善い人を馬鹿にしたいなら、

私にも考えがある。」

「ああいいぜ。ひゃっは！」

穀潰しが、右手を善い人に向けて、左手でナイフを構える。

善い人も、大剣を片手で構える。

ゴゴゴゴゴ。

しかし、さらに洞窟が崩れ始め、それどころではなくなってきた。

穀潰しは、心配になった。穀潰しは狂人の善い人と違って、こんなところで

埋まって死ぬ気は毛頭ない。

「おいおい。こりゃやべえぜ。こんなことしてる場合じゃ……げほっ」

穀潰しは善い人の回し蹴りを食らい、吹き飛び壁に叩きつけられる。

「ん？間抜けな穀潰し君は私の攻撃に当たってしまったようだね。」

「て、てめえ……。だがそれどころじゃねえ。そこをどけ。」

穀潰しがハエに近づいていく。

「なにするの？」

善い人が尋ねた。

「ここをでる前に止めをささねえと、
こんな化け物に命を狙われちゃたまらねえからな。」

それを善い人が制止する。

「いや、善人は動物には優しいものだよ。君も善人になりたいなら、知っておいたほうが善いね。」

善い人が得意げに穀潰しを諭す。

穀潰しとしては、どっちにしろ、

洞窟が崩れている状況の方が気が気でなかった。

「はっ！勝手にしろ。」

ドカーン。彼らが話し合っている間に、出入り口が穴でふさがってしまった。

「やべえぞ。ドンドン崩れてやがる……。」

俺はまだ死にたくねえ……。」

早く脱出しておけばよかったと穀潰しは後悔した。

こんな八工野郎や、善人だとか抜かす狂人と関わったばかりに、自分の人生はめちやくちやになったと穀潰しは思った。

しかしわめいても仕方ないので、何とかする策を考える。

「どうするか……。おい、善い人さん。てめえは……?」

見ると、善い人は悠長に八工の手当てをしている。

「とんだ物好きだな。」

とはいえ、直接攻撃をしたのは自分だし、少し気兼ねもしたので、手当てを手伝おうと善い人達によっていった。

「どうやら、乗せてくれるらしい。これでここから出れるよ。」

そう善い人がいい。それを聞いた穀潰しの表情は明るくなった。

「おう！じゃあさっさとこんなところからおさらばしようぜ！ひゃっはー！いや善いことはしておくものだぜ！」

善い事をしたのは善い人で、穀潰しは何の役にも立たぬ、考え事をしていただけであった。

とはいえ善い人にとって、穀潰しなどどうでもよかった。

そのため、穀潰しの勘違い発言に対しても、寛大な心でスルーした。

「そうだね。さすがにそろそろここは限界だよ。さあ行こうか。頼むよ。」

八工。」

「ひゃっはー！あっ？」

穀潰しは、八工に飛び乗ったが、八工に避けれる。

「おいおい、そりゃどういうことだ？命の恩人だぜ？この俺は。」

善人たる善い人は、八工に賛同した。確かに穀潰しは悪人であるのだから、
ここで反省して貰うのは悪い案ではなかった。

善い人は哀れみの表情で穀潰しを見た。

「残念だけどここでお別れだね。君のことは忘れないよ。3時間ほどね。」

穀潰しは慌てた。

さすがの穀潰しでもこんなところにおいていかれたらただではすまない。

穀潰しは必死になって弁解した。

「そりゃあねえんじゃないのか？俺は善人だぜ？
善人が善人を見捨てていいのかよ！？」

善い人は、穀潰しの戯言を無視した。

というより、八工にすでに、飛んでいたので、これ以上穀潰しに付き合おう

時間は無かったのだ。

善い人にとっても、ここに長居するのは、善い状況とはいえない。

穀潰しは呆然とした。

自分は善人だと言ってるのに、なんであのバカ野郎は聞き耳を持たないのだろう。

穀潰しは、こんなところで生き埋めになりたくなかったので、必死になって、レポートしながら、
善い人達に追いついた。

「助けてくれー！俺は死にたくない！俺は役に立つ男だぜ！
ここで俺に恩を売っておけばお前は、一生俺に感謝することになる
だろうよ！どうだ？」

善い人も八工も無言だ。善い人は何事か考え事をしているし、
八工は、穀潰しには恨みがある。

穀潰しは、なおも食いついた。

「くそっ！恨んでやる！この偽善者め！頼むよ！助けてくれ！」

穀潰しの声は徐々に遠ざかってくる。善い人達は洞窟を抜け、地下
を抜け出し、
ビルの外へと脱出する。

そして、ビルは、ガラガラと音を立てて崩壊していった。

善い人はつぶやいた。

「なるほど。世界は広い。ああいう人もいるならこの私も考え直さ
ないといけないね。
とにかく進もう。私の善行をみんなが待っている。」

善い人はまっすぐ前を見る。その澄んだ目は、とても狂人には見え
なかった。

第二幕 悪人救出作戦

あらすじ

善人だとかいう少女が、ビルにこもっている悪人を駆逐し、そこにいたハエを保護して、次なる善行へと旅立った。

登場人物

善い人

物語の主人公。おそらく15才くらいだろうと思われる少女。白いコットンハットに、白いコートを着ている。善人。

穀潰し

青いつば付帽子に、青いジャケットを着ている。ごろつきだがサイキッカーでもある。

「善い人さん。いい天気ですね。」

ものすごくどうでもいい。善い人は心底そう思った。

ものすごくどうでもいい話題を善い人に吹っかけてくる人物。彼女の名は害児。

害児は善い人の世話をしている謎の人物で、義足をつけ車椅子で生活している。

善い人は、不機嫌になり、そっぽを向いて、その場から去ろうとしたところ、

害児が後ろから声を掛けた。

「おや？善い人さん。この私は耳寄りな情報を持っているんですよ。いいんですか？善行を出来る絶好のチャンスなのに！善い人さんがいないなら、

このネタは別の人に提供することにしよう！」

そういつて、わざとらしく、ゴホンとせき込みつつ、善い人の方をチラミする害児。

はつきりいつてそんなどうでもいい情報は、善い人以外に欲しがる人などいないが、

逆に言えば、善い人にとっては、何よりも優先するべく最高の情報と言えた。

もったいぶる害児に対し、善い人は害児にしては、役に立つ話題を振って来たなと思った。

寛大な善人は、このような小物のしょうのない振る舞いに対して、怒ったりはしないものだ。

善い人は、立ち去るのをやめて、害児に話しかけた。

「害児さん。その話っていうのは何かな？」

「ええ……。実はですね……。」

善い人に構って貰えた害児は、意気揚々と説明を始めた。

「私が以前善い人さんに話した悪人が集まっていたビルが、どうやら崩壊したようです。」

噂では、善人がやってきて悪を退治したのだと。」

善い人は感心した。世の中まだ捨てたものではないと思った。

「なかなかの善行だね。なら私もさらに善行を積まないといけない。」

「

善い人は自分がしたことを忘れてしまったらしい。とんだ善人だった。

一方害児は、善い人が自分のしたことを本気で忘れている様子なので、

若干驚きつつも話をすすめた。

「その事に関連して、どうやらよろず屋さんが困っているようです。ここまで言えば・・・後は分かるでしょう?」

害児はにやりと善い人に笑いかける。

通常こういう場合、なるほど・・・つまる　ってことね。などといった、にやりと笑い返すのが

セオリーだが、善い人にはそんなあほな演技に付き合える遊び心がないので、

内心害児が何がおかしいのだろう。頭がおかしいのだろうかと思っていた。

しかし、考えてみればどっちでも同じだなと思いついた。

なぜ、どっちでも同じなのかと言えば、結局善い人にとってみれば、善いことが出来さえすれば、

後のことなどどうでもいいからだ。

「害児さん。言いたいことがさっぱりわからないよ。つまりどういうことなの?」

害児は、またもや驚いた。よもや善い人がこんなに馬鹿だとは思わ

なかったのだ。

しかし、思い返せば、これは馬鹿の振りに違いないと思った。

害児は、善い人を人物と見込んでいるので、過度に評価するきらいがある。

だが、虚像と実物は常にずれるものだ。

後は個人個人でそのずれがどの程度であるかだけの違いにすぎない。

どちらにしる、人は実物より虚像の方を真実だと認識する。

「ふっ……。これは手厳しい。この私も何もお試しにならなくてもいいでしょうに。」

害児の大げさな演出に、善い人はいらいらしてきた。

その様子を見て害児は、大慌てで、その次の言葉を放った。

「ええ……。つまりよろず屋さん困ってるようなので、相談に乗ってあげたらどうなんでしょう？
ということですよ。」

善い人はここで初めて、微笑んだ。

「そうだね。善い考えだと思うよ。私の考えと同じだね。」

「そうですね。何しろ我々は王者なのですから。」

王者というのは、また意味不明だが善い人はそんな言葉など気にも留めない。

「じゃあいつてくるよ。害児さん。今日も善いことができそうだ。」

害児は善い人がその視界から消えるまで、見送り、呟いた。

「さてと、・・・次は。」

害児には何か目論見があるらしい。

善い人が、よろず屋に到着してみると、どうやら店主は留守をしているようだった。

善い人は善の直観を駆使して、店主が隠れている場所を探し当てようと思ったが、

ちょうど、道の向こう側からこちらへ向かって、店主がやってきた。

「やあ、善い人君。ちょうどよかった。」

やたら馴れ馴れしく話しかけてくる店主。

いかにも何か企んでいそうな顔で、やたらごつい装備をしている。

「ガスさん。私は善いことをしなければならぬ。

妙な隠し立てをしてもこの私には全てお見通しだという事がまだわからないの?」

恐らく善い人は待たされて、苛立っているのだろう。

善い人のいきなりの馬鹿野郎発言にも、店主は慌てない。

彼は度胸があつて出来た人物だったからだ。

ただ彼の場合度胸もいいのだが、少し頭のねじが外れいてるところがあり、

結局善い人と同類かもしれなかった。

「実は、吾輩の友人が行方不明になってしまったのだ。

全くこの忙しい時期に、吾輩の身にもなつてほしいものなのだが・
・。」

そういつつ、店主は懐から写真を取り出し、善い人に渡す。

「それが、吾輩の友人だ。

出来れば善い人君にも探すのを手伝つて貰おうと思つていたところだったのだ。」

写真に写つた人物は穀潰しだったが、善い人はしばらく思い出せなかった。

なぜなら、既に3時間以上たつているし、善い人はそもそも物事にあまりこだわらない性格だった。

「ああ・・・。そういえばこの人なら廃墟外で最近崩壊したビルの下に埋まっているよ。」

善い人はこともなげにそういった。

「なるほど・・・。それではいくら穀潰しでも、絶望的であるな。」

店主は早くも諦め顔だ。

「ともかく行ってみよう。これは考えてみれば、善いことをするチャンスだよ。」

ガスさんにもそのチャンスを与えてあげよう。」

店主は、何故一文の得にもならぬことを、

しかも善い人如きから許可を取って行わないとならないのかと内心憤慨したが、

こんなところで善い人なんかと争っても仕方ないと思いなおした。

「まあいい。ともかくまず現場を見てからであるな。」

そういつて、店主は愛車であるプレオに乗る。善い人もそれに続いて乗り込む。

「ぶおんぶおん！」

店主は口でエンジン音を口ずさむ。

こういうところが店主の間抜けで変態チックなところでもあった。

しかし上機嫌だ。善い人はというと、ノロい車にいらいらして、怒声を発するのに時間はさほどかからなかった。

善人がせっかく善いことをしようというのに。のろのろとしか走らない。

その事実は善い人を激怒させるには、充分すぎる事実だった。

「もう我慢ならん！」

怒髪天を突き奇声を発すると共に、善い人はプレオから後方に飛び降りた。

「この善人の邪魔をすることは誰にもできない！善い人は善人の邪魔をする悪人に罰を与える！」

『吹き飛ばへ！突貫脚！』

善気を込め、裁きの一撃を足に込める。

その蹴りは、当然プレオにくれてやるものだろうと、誰もが思うだろうが、善人たる善い人は、罪もない車に罰は与えない。

物の道理の分からぬ連中とは違うのだ。

善い人の、善なる脚は正確によろず屋の店主の背後をとらえた。

「ぎゃー！」

短い悲鳴を上げ、気絶する店主。

その後、善い人は素早くプレオに乗り込む。空中を走るプレオは爽快だ。

高速ですんずん、あらぬ方向に進んでいく。

「びびー！」

黒い影が、プレオの下に張り付く。

善い人達を載せたプレオは正確に、善行を成す現場へと向かって行った。

善い人達が現場についてみると、ものの見事に埋もれてしまっている。

善い人は、力仕事は得意ではないのだ。

この瓦礫を掘り起こすのは土台無理というもの。

しかし善人たる善い人はこのくらいの使命でへこたれない鋼の精神力があつた。

ともかく、眠っている店主を、店主が持っていたハンマーでぶっ叩いて起こした。

哀れ、店主の兜はひしゃげてしまった。

ハンマーで殴られた衝撃で、目から星が出る思いで、飛び起きた店主は、ひしゃげた兜を見て、

怒り狂ったが、プルプル震える手で冷静に替えの兜と交換した。

「善い人君。吾輩の頭を叩くのはあんまりではないのか？吾輩に何の罪がある？

それにこの兜は最高級品の一つであるぞ？」

店主は一応抗議した。

「ガスさん。でもほらみてよ。例の人が埋まっているところについてたよ。」

善い人は、気にも留めない。ガン無視もいいところだった。

店主は、舌打ちしたが、もう過ぎたことは仕方ない。
店主は改めて現場を確認したが、これはもうだめだなどと諦めてしま
った。

「善い人君。これじゃあ話にならないよ。穀潰しはもう駄目だ。さ
あもう帰ろう。」

「ガスさんは帰っていいよ。私は何としても善いことをしなければ
ならないからね。」

「しかし、策はあるのかね？ここでただじっと待っていても仕方な
いと思うが。」

「びぎー！」

その時、ハエの音が響き、店主はなんだろうと思ひ、身構えた。

善い人は、つかつかと声の方へ向かってく。

店主は安全を取って車で待機したが、なかなか善い人が戻って来な
いので、

仕方なく声かした方に向かってみた。

「ん？ガスさんまだいたのか。」

「善い人君。なんだね？このハエのような化け物は。どうやら善い
人君になつているようであるが。」

どうやら、土の柔らかいところを、ハエが掘っていったらしい。

ハエは羽を外すと、地上モードとなり、地上での作業効率があがる
のだ。

店主は遠巻きにその様子を見ていたが、
八工が無害だと知ると、寄ってきて、善い人に質問をしてきたので、
善い人はそれに答えた。

「ガスさん。この下に地下があるの。この中に例の人が居るんだよ。
もうすぐ出てくると思うよ。」

「なに？そうか。」

店主は、車に戻って、装備を充実させ、水分補給を取った後、戻っ
て来たころには、
既に善い人の姿は無く、地下への扉は開いていた。

恐らく善い人は先に行ったのだろう。

店主はおいていかれると非常に困るので、慌てて善い人の後を追っ
かけた。

「待ってくれー！」

がしゃがしゃ鎧の音を立てつつ、善い人に追いつく。

「善い人君。どうも異様だぞ。見てみる。松明だ。しかもまだ新し
い。」

なるほど。言われ見れば、地下洞窟の中は、妙に生活感があった。

「ガスさん。どうやら人が居るのは确实だよ。」

ここで、一つ衝撃の事実があった。人が居るといふ事はつまり悪人

がいるということ、

そんなところに好き好んでいこうとする人間など居る筈が無かった。善い人みたいな狂人ならばともかく、店主は真つ当な商人なのだ。

「善い人君。吾輩達に出来ることはここまでではないか？」

後は救助隊なりなんなりを待った方が良い。

吾輩達はよくやった。なにしろこの入口を見付けたのだ。さあもう帰ろう。」

店主が踵を返して、帰ろうとすると、突然出口が岩雪崩で塞がれ、当りに灯っていた松明が消えていく。

「はっはっは！はーっはっはっは！はーっは！はーっは！はーっは！はーっは！」

何かの音がする。どうやら奥に居る人が居るようだ。店主は怯え喚いた。

奥の方に灯りが灯る。

悪人が銃を構えずらりと並び、その中心にはリーダー格の男、通称リダがタバコを吸いながら立っていた。

「チエツクメイト！」

気取ったポーズで、決め台詞を発するリダ。

しかし、善い人は既に、灯りが灯った時にはリダの前に立っていた。

『決める！薙ぎ払い！』

リダが得意げな台詞を吐き、善い人がそこにいると認識し、真つ青な顔になったころには、

リダは既に、他悪人達と一緒に善い人の槍によって薙ぎ払われていた。

そこへ、店主が喚きながら突っ込んでくる。

「うわああああー！」

ずべべべと、すっころび、悪人達にダイブする店主。店主の体から妙なガス臭さが漂う。

かろうじて意識があったリダは、みんなに向かって号令した。

「逃げる！爆発するぞ！」

ドカーン！善い人達は、かろうじて鉄の扉の向こう側に滑り込む。

「潰れる！ランダムスフィア！」

中には、既に穀潰しがあり、爆裂する球状の衝撃波を複数個善い人達に向けて放ってきた。

悪人達は、それで全員一網打尽にされ、さしもの善い人でさえも、よけきれず、

片足にそれが命中する。

「っー」

ちらりと焦りの色を顔に浮かべる善い人。

穀潰しは既に次のモーションに入っていた。

「切り裂け！サイコカッター！」

機動力の下がった善い人は哀れ真つ二つになるところだったが、ころうじてそれを避ける。

その後衝撃波の弾幕が切れ幕やってきたので、防戦一方になる善い人。

障害物などに隠れることで何とかやり過ごし、だましだまし防戦していく。

穀潰しは、容赦がない。不意打ちもいいところの外道だが、油断する方が悪い。

善い人にしても穀潰しにしても、この程度の不意打ちは不意打ちに内に入らなかつた。

なのでお互い、気にもしない。戦う理由すらいらぬ。

彼らが戦う事にそもそも理由などいらぬのだ。

彼らは呼吸するかのようには戦い合う。

「穀潰しー！生きていたのかっ！」

大声がする方を見ると、店主がいた。爆発したのに大丈夫だったのだろうか。

「おいおいてめえ、このガス野郎。どえらいことしてくれたじゃねえか。」

この俺の寝床を爆破させやがって、ひゃっは！この馬鹿野郎めえ。」

穀潰しはそういつつも、善い人への攻撃を止めない。

穀潰しの暴言を聞いた店主は、激怒した。

「吾輩をガストラゲタを知っての事くわあ！」

店主はライターに火をつけつつ、穀潰しに向かって突進しそれを投げつける。

穀潰しは、そのライターを衝撃波で打ち返し、ライターに当たった店主は、自分の武器であるガスに引火し、爆発する。

「ぐおおお！ガスフェニックス！」

爆発し、燃えたまま、穀潰しに突っ込む店主。もはや意味不明だ。

極悪非道の容赦ない穀潰しは、衝撃波の弾幕を店主に浴びせ、

店主は穀潰しの元に到達する前に、力尽きて倒れる。

「へ……へぶう……。」

店主は、最早何のために存在するのかわからないくらいの馬鹿さ加減、茶番であったが、

それは善い人が攻撃の起点を作りだすのには、充分すぎる出来事だった。

とはいえ、そんなことで油断する穀潰しではない。再度善い人に衝撃波の雨を降らせる。

『当たれ！ダブルボーガン！』

衝撃波の雨を、空中で回転しながら回避しかつ、ボーガンを放ちつつ接近する善い人。

「ちっ！」

ボーガンに当り右手が吹き飛ぶ穀潰し。

これが潮時と判断し、落ちた右手を拾い、テレポートで逃げた先に、何故か善い人が構えて待っていた。

「この善人たる善い人を出し抜き、悪事を働けることなど、不可能だという事がまだ分からないのか！喰らえ！善の鉄槌！」

『無連斬！』

只思いつきり、持っている大剣でぶった切る。何度も何度も、やがて穀潰しは消滅する。

「悪はほろんだ！」

善い人は勝ち誇る。

「この善い人が居る限り、この世に悪は栄えない！その事がまだお分かりいただけなのか！」

大得意の大演説をかます善い人。だがその演説を聞く者は最早だれも居ない。

こうして、善人たる善い人によって一つの悪がまた滅んだ。

次なる悪を滅ぼすために、今日も善い人は戦うのだ。

「もう我慢ならん！」

善い人は叫んだ。

しかし、善い人は残っていた店主を悪人達を、きちんと外に出した。何も理不尽な暴力をふるうだけではなく、ちゃんとした善行もするのだ。

ただ、理不尽な暴力が大きいので、結果としてマイナスなことが多いのだが、本人からしてみても真剣な善行だ。

さて次なる善い人の善行は何か・・・？

第三幕 悪人の改心

あらすじ

救世主たる善人、善い人が、極悪非道の穀潰しに天誅を下し、捕われていた善良な人質を解放した。また、その善行にガストラゲタというよろず屋も関わり、善人の善行に関われたということ、非常な名誉なことであった。

登場人物

善い人

15才程度のセミロングの少女、白いコットンハットに、白いコートを着ている。

この世の悪を許さぬ高潔な善人

穀潰し

青いつば付帽子、青いジャケットを着こんでいる悪人。

リダ

ビルにいた悪人の現場統率者

ガストラゲタ

よろず屋の店主、重装備にヘルメットをかぶり、体を固めている。

害兇

義足で車いすに座っている。サングラスをかけている。

八工

古代生物の巨大な八工。羽が取れることがあるが、またはえてくる。巨大と言っても、人くらいの大きさ。

第三幕

「この俺は不死身だー！」

ドカーン。地面が爆発する。そこから青いシルエットが浮かんで来る。

「あの野郎め。馬鹿野郎は俺が死んだと思っているのだろうか・・・俺が生きていると知ったらビックリ仰天するだろうぜ！」

何と穀潰しは生きていた！彼はあの時、自分の分身を身代りにおき、わざと善い人の目の前にそれを設置して、自分はうまうまと先に脱出したのだ。

しかしその後、まんまと脱出しようとしたところ、土砂崩れが起き、それに巻き込まれて今迄うまうまっていたのだ。

しかし穀潰しは、不死身なのだから、そんなことは関係が無かった。

つまり、善い人は一杯喰わされたという形となったのだった。

その足で穀潰しは、ガスの家に向かった。

ガスというのは気体のことではない。

よろず屋の店主の名前がガストラゲタなので、最初の二文字でガス

と呼んでいるだけの事だ。

ガスの店は相変わらず繁昌していたが、浮浪者のような穀潰しが近づいて来ると、

皆しかめっ面をして去っていった。

その様子を見て、穀潰しは傷つき、彼らに向かって叫んだ。

「そうさ！俺は嫌われ者だ！ひゃっは！潰れちまえ！」

ガスは店のカウンターから出て来て、腕を組みつつ仏頂面を構えながら、穀潰しを睨んだ。

ガスが何か言うより早く、穀潰しはガスに向かって文句を言った。

「おいおい。てめえ。このガス野郎。随分なご挨拶じゃねえか。この俺を生き埋めにしやがって。

ひゃっは！さっさと穀をもってきやがれ！」

ガスは黙って、店の奥に進み、穀潰しも続いた。

店の地下への扉を開け、二人して地下へ向かっていく。

悪人達のアジトビルの地下と違い、整備されており、シエルターに近い形だ。

二人は、梯子を無視して、飛び降り、随分下の方まで到達した後、貯蔵庫に向かった。

廻りと見渡すと、様々な機械や実験道具、商売道具などが並んでい

る。

穀潰しは、絨毯がある適当な場所で腰を卸し、ガスは米袋を穀潰しに渡した。

「うめえうめえ！」

穀潰しはむしゃむしゃと穀を潰す。だから穀潰しという名前なのだが、そんな彼にも悩みがあった。

「ああうまくつたぜ！」

そう彼は小食なので、沢山、穀を潰せないのだ。

一方ガスは、その間、刀を打っていた。

その刀を穀潰しに見せびらかせつつ、こういった。

「どうだ。穀潰し。なかなかの出来である。」

「そうか。ところで、俺はあんな悪党には初めて会ったぜ！何しろ自分は善人だとかぬかして、

この俺を生き埋めにしやがったんだからな。

あの野郎。今度あつたらぎったぎたにしてやるぜ！」

ガスは不思議そうに穀潰しを見た。

「穀潰しは常にないやる気であるが・・・？」

穀潰しは基本自堕落でやる気がなく、喰っちゃ寝の生活をしていた

ため、
ガスには意外な感があった。

「俺はコケにされて我慢ならねえんだ。この俺をコケにしたことを後悔させないと駄目だ。」

「ああそうであるか。」

「お前は奴の居場所を知ってるだろう？教えてくれ。」

ガスは、地図を書いて穀潰しに渡した。

ガスとしては善い人がどうなるうと知ったこっちゃんかつたし、
商売の邪魔な穀潰しの相手をしてくれるならむしろありがたかつた。

ガスは別に穀潰しを邪険にしてるわけではないが、彼は義理も人情もあるが、

商売が趣味であるので、趣味を優先するのだ。

この世界は、別にお金など儲ける必要はないが、
向上心を持ち様々な事を追及しているとやはりお金はあつた方が
いいのだ。

向上心とは無縁な穀潰しも、今回は常でない張り切りなので、その
点でもガスは良いと思つた。

善い人は、漫画を描くのが趣味だ。技を放つ時一々技名を叫ぶのも、漫画の影響だ。

善い人が描いている漫画には、善い人みたいなキャラが、悪人のようなものをぶっ飛ばしているところが描写されている。

「こうかな？いやこうかな？」

善い人は、剣や槍を振り回し、技の研究して、満足のいく結果が出たら

それを漫画に反映させているのだった。

一通り終えた後は、八エの散歩だ。散歩というよりは競争といったほうがいいが。

「よし、八エ。散歩にいかがか。」

「びぎー！」

八エの目が怪しく光る。どうやら喜んでるようだ。

始めのうちこそ八エの方が早かったが、競争をしているうちに、善い人も段々と八エに追いつくようになっていた。

ついでに善い人はよろず屋により、武器を調達する。

「ああ善い人君か。いらっしやい。」

「やあ。ガスさん。」

善い人は適当に武器を分捕り、去っていく。その後ろ姿を見ても、ガスは何も言わない。

お互い暗黙の了解であって、別に善い人が横暴なわけではない。

困ったときはお互い様というわけだ。

少なくとも、善い人は善人の役に立っているのだから、ガスは喜んでいるだろうと思っっている。

ちなみに善い人が、どこにあんな多量の武具を仕込んでいるのかは、解きえない永遠の謎だ。

ガスはそういえば、穀潰しには会ったのだろうかと思っただが、表に出て善い人に声を掛けようとする頃には、もうすでに、善い人は何処へかと消えていた。

穀潰しはその頃、善い人の家には到達していたのだが、ノックしても誰も出て来ないので、体育座りをして、律儀に待っていた。

待っているうちに、段々とテンションが低くなってきた穀潰しであったが、

やってきた八工を見て、身構えた。

八工も穀潰しの方をちらりと見たが、鼻で笑って自分の小屋に戻っていった。

侮辱された穀潰しは激怒し、八工を思い知らせてやるうと、いきり立ったが、そこへ善い人も少し遅れてやってきたのだった。

「邪魔だよ。」

ドカツ！穀潰しを突き飛ばし、自分の家に入っていく善い人。

突き飛ばされた穀潰しはよろめき、その様子を八工に冷笑される。

「グエツエツエツエ・・・！」

「野郎！」

穀潰しが飛びかかろうと身構える寸前、再び善い人の家の扉が開く。

「うるさいな。」

善い人の姿を見て、穀潰しはテンションを高め、高らかと笑った。

「ひゃっはっはっはっは・・・はっー！てめえは俺が死んだと思っ
ていただろうが、
俺は生きていた！なぜなら俺は不死身だからだ。」

善い人は、その穀潰しの台詞を無視して、迂回し、どこかへ行こうとする。

「おっおい！俺は生きていたんだぞ？」

その言葉も無視して、つかつかと何処へ向かっていく善い人。
それを追いかけつつ、後ろから叫ぶ穀潰し。

「そりゃあねえんじゃないのかい？ええっ！？それが人がとる態度

かい！

善い人さんよお！一体どこに行こうっていうんだ？」

穀潰し如きが生きてようが、死んでようが、善人にとっては些細なことだ。

そんな程度の事が分からない、頓珍漢な穀潰しは、物の道理が分かっているのだろうか。

善い人は無然として答えた。

「勿論、善い事をしに行くに決まっているじゃないか。君はそんなことも分からないのか。」

善い人は、穀潰しが生きていてもまるで驚かず、騒がず、普通に会話をしたので、

穀潰しのほうが驚いた。

「てめえみたいなの、ろくでなしは初めてだぜ！人一人消しておいてそこまですませるとはな！」

善い人は足を止めて、穀潰しに向き合う。

「この善人たる善い人は、悪人を許せない。」

穀潰しはにやりとして答えた。

「だが現実はどうだ？俺は生きている。つまりてめえの善は偽善ということだ。」

善い人は早くもキレ気味で対応する。

「なんだと？まだ思い知らされが足りないのか？またぼこぼこにされないとわからないのか？」

穀潰しはせせら笑って答えた。

「できたらなあ！」

「もう我慢ならん！」

遂に善い人はぶち切れ、穀潰しに飛び蹴りを浴びせるが、穀潰しはレポートでそれを回避する。

回避したその先に、善い人がさらに構えていた。

『吹き飛べ！突貫脚！』

「うおっ！はえーっ！」

善い人は八工との修行の成果により、各段にスピードが増していたのだ。

それに比べ、怠け者の穀潰しは、只地面に埋まっていただけであった。

両者の覚悟の差が実力となって明確に表れたのだ。

哀れ、雑魚潰しは、星となって天空へと吹き飛んで行った。

彼の最後の遺言は、「うおっ！はえーっ！」だったと、後世にもわたって語り継がれていくことであろう。

ともかく悪は去った。善い人は廃墟外に赴いた。

自分が前回善行を施した悪人達の視察にいくためだ。

善人に掛れば彼らを真人間に戻すことなどたやすい。

善い人は上機嫌で廃墟外に入っていた。

廃墟外の悪人達は、先ほどの事件以来、狂人善い人に極力関わらないようにしていた。

何しろ気に入らないと突然殴ってくる狂人である。

ごろつき二流サイキッカー穀潰しもここらでは、ちょっとした顔であつたが、

善い人にコテンパンにやられたという噂は、もう広がっていた。

リダは、新しいビルの一室から、隠れつつ、下に歩いている善い人の姿を伺っていた。

「よし……。」

執拗で恩知らずなリダは、今度こそ善い人をぎゃふんといわせよう

と、

スナイパーを配置していたのだ。

善い人が、徘徊するルートは分かっている。

がしかし、善い人は善の直観で誰かに見られていると感じ、上から見下ろしていたリダと目が合い、善い人はリダが居るビルに入っていく。

見張りをしていた悪人達は、善い人がこちらに向かってくるのが分かるかと、

蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

リダもすでに逃げ出した。こんなこともあろうかと屋上にヘリコプターを用意してあったのだ。

彼はまんまとヘリコプターに乗り、ビルから脱出した。

善い人がリダが居た部屋に入ってみると、そこは既に蛻の殻だった。

「ふむ……。」

善い人は去っていく。改心した善人が居るかと思ったのに、誰も居なかったので残念だが、

この程度でへこたれる善い人ではなかった。

さらにしつこく、廃墟外をくまなく探そうと決意した。

リダ達からしたらいい迷惑、いい面の皮だった。

しかし、チャンスが来た、善い人が狙撃ポイントに入ったのだ。

スナイパーは、にやりと笑い、善い人に標準を合わせ撃った。

善い人はそれを避ける。慌てずにスナイパーは第二弾を放つがそれも避ける。

ヘリコプターからその様子を見ていたリダは驚愕した。

「ば、化け物め……！」

スナイパーは、これ以上は無意味と諦め、去ろうとしたところ、屋上の扉の前に善い人が立っていた。

善い人は無言で大剣を構え、一直線にスナイパーに向かっていく。

スナイパーは、ダイナマイトを投げ、バズーカーを放ち、空中でそれを爆発させ、

善い人が迂回して突っ込む頃には、その姿は無かった。

「あの人は……。」

善い人は思うところがあつた。スナイパーは顔を布で覆っていて、隠していたが、おそらくは……。

しかし善い人の善の直観は、そのことよりも、この事件の黒幕の存在を感じていた。

黒幕は今頃善い人を見てせせら笑っているだろう。その事実は善い人を激怒させるには、充分すぎる事実だった。

「おのれ！ゆるさん！」

善い人は、ハエを呼び出すと、すぐにハエがやって来る。

善い人はハエに飛び乗り、リダが居るヘリコプターに向かって一直線に向かっていく。

それを見たリダは青ざめる。

「あわわわ。もう駄目だ！逃げろ！」

リダは、ヘリコプターを見捨て、飛び降りパラシュートで飛び降りる。

ヘリは善い人の大剣で真っ二つにされていた。

リダはぞーっとした。

リダが地面に着地すると、そこには部下の悪人達がたまっていた。

「おいどうする？」

部下の一人が話しかけてくる。

「・・・逃げるんだ。ともかく逃げろ。」

「どこに逃げるのかな？」

リダの背後に善い人が現れる。リダは突然の善い人の出現に発狂しそうであったが、

部下の手前ぐつところえ、とんちんかな対応をした。

「逃げはしねえ……。逃げはしねえが……。」

部下の一人はリダに話しかける。

「逃げねえのか？」

「いやそうじゃねえ。」

悪人達は顔を見合わせた。とにかく逃げないのなら、戦うべきではないのか。

敵うか敵わないかは別としても。

「おい。相手は一人だけ？俺たちを見る。20はいる。」

悪人達は銃を構えた。

リダはどうしていいかわからずおろおろした。

善い人は近くに転がっていた何かの機材の上に立ち、演説を始めた。

「みんな良く聞いて！私たちは善人だ。あなたたちは私の偉大な善行によって善人になれた。

これからは町のみんなに良く尽くすんだよ！

さあまずは掃除だね。この町を綺麗にすればこの町にはきつと悪人が居なくなるに違いないよ。」

悪人達は、どうせ正面から戦っても勝てないのだし、わざわざ痛い

目にあつ趣味もなかつた。

とはいえ、ここで引き下がるのも癪に障ることは確かだ。

その場の空気はリダの一存に委任する空気になっていた。

その空気を察知し、リダは口を開く。

「今は耐えろ。いずれ反撃のチャンスはある。」

悪人達は頷き合う。

その様子を見て善い人は、自分の演説に感動しているのだらうと思つた。

「さあいこう！私に続け！」

意気揚々と歩き出す善い人に、悪人達は仏頂面でしゅしゅとついでいく。

これで町は綺麗になり、廃墟街は平和になるだらう。

善い人の善人伝説は、こうして順調に作られていくのであった。

第四幕 悪人の謀略

あらすじ

思い上がりも甚だしい悪人共は、善い人の善光にひれ伏し、改心した。

彼らは今後、善人として歴史に名を遺していくであろう……。

登場人物

善い人

この世を正すためにやってきた救世主善人。白い帽子に白いコートを付けている。

穀潰し

善人によって討伐された雑魚潰し

リダ

元悪人で今は善人

ガストラゲタ

よろず屋の店主、重装備にヘルメットをかぶり、体を固めている。

害児

義足で車いすに座っている。サングラスをかけている。

ハエ

古代生物の巨大なハエ。羽が取れることがあるが、またはえてくる。巨大と言っても、人くらいの大きさ。

スナイパー 覆面を付けている凄腕の傭兵

第四幕

害児はいびつな城に住んでいる。西洋風の城であるのだが、上へ上へと不自然に積み重なっていて不安定であり、今にも崩れ落ちそうでぐらついている。

害児は、その最上階の部屋にいるのだ。

彼女は、車いす生活であるが、黒髪長髪で、端正な顔つきをしており、黙っていたればなかなか美人だった。年は大体22、3くらいであるうので、まだ若かった。

そのため、いま彼女が優雅にワインを飲む姿は、或る程度、様になっていた。

その害児の平穏な時間を乱す出来事が今日もまた起ってしまった。

こう見えて害児も忙しいのだ。

「首領。」

部屋の闇からうつすらとシルエットが浮かび上がり、害児に話しかける。

害児は自分の部下に何故か首領と呼ばせている変わり者だった。

「なんですか？」

害児は、ワインを眺めつつ、尋ねた。

「またしてやられました。例の盗人です。」

「またしても……。それで、あなた方はその時何をやっていましたですか？」

問われた部下はしどろもどろになった。

「は……。ははっ！」

害児は無能な部下に飽きたが、腹を立てても仕方ない。

「まあよい。ではこの私が直々に出向くでしょう。」

「はっ……！」

「いや……。待てよ。」

害児は、部屋の中で車いすを転がし始めた。何か思案している様子だ。

10分ほどたって、思案がまとまったらしく、部下に話しかけた。

「ふふ……。」

「何か思いついたのですか？」

「ええ……。妙案です。こういう時こそ善い人さんを差し向ける

のです。」

害児は、得意げに部下を見た。部下は何と優れた考えだろう、さすが首領は常人ではないと思い、声を弾ませて応答した。

「御意！」

その返事に満足した害児は、やはり自分は天才だと思いつつも、その考えを実際に実行してみようと思った。

「ふふ……。あなたは下がっていいですよ。ここから先は私一人で充分です。」

なに、善い人さんなど動かすのは、王者たるこの私にとっては、実にたやすいことだ。」

本当にそうなのだろうかとは部下は微塵も思わない。心から害児を崇拜しきっている風だ。

実際に実にたやすいかどうかは、やってみなければわからないのだが、

彼女の根拠なき自信たっぷりな具合を見ると、

見事に善い人を動かしてくれるに違いないと期待できることは確かだった。

害児は、テラスから、車いすに乗りつつ、下に飛び降りる。別に自殺したわけではない。

彼女の乗る車いすは、高性能なため、ジェットが付いているのだ。それで浮けるから、なんとということもない。

配置的に、害児の城から、城下町全体が見渡せるようになっていたが、城下町から城までは、

或る程度の距離がある。

善い人の家は、城のはずれの小高い丘の上にあった。

害児は、善い人の他にも、身寄りのない子供などを集めて、養育しており、

それらの家もあちこちにある。

善い人はその善行を認め、害児を人物と判断し、

害児もまた善い人を人物であると判断したということだ。

害児が車椅子で歩いていると、向う側から人相の悪いツバ付帽子をかぶった男がやってくる。

穀潰しだった。

害児は、自分の自治区の民と親しむという気持ちで、穀潰しに声を掛けた。

「やあ！いい天気ですね。」

しかし、穀潰しは、害児を一瞥し、薄ら笑った。

「いい天気……か。確かにてめえの頭はノー天気みてえだがな。」

害児は、その言葉を聞くと一瞬で激怒した。

「なに？私は害児だが？」

この男は自分を知らないのかと、害児はあきれ果てた。

自分が害児と知ってこの男がどう慌てふためくのか見物だった。

穀潰しは、相手が自分の自治区の実質的な領主である人物だと気付
き、
多少態度を変えて対応した。

「それで、その害児さんが、俺に何か用なのか？」

害児は、ぷいっとそっぽを向き、穀潰しのわきを通り過ぎて行った。
どうやら癪に障ったので、これ以上話したくなかったらしい。

「なんだありゃ？」

穀潰しは去っていく害児を眺めていたが、やがて興味なさげに
前を向いて、先に進むところ、何かにぶつかり尻餅をつい
た。

穀潰しはすぐに立ち上がり、ぶつかった相手に殴り掛かった。

どうやら、わざわざ穀潰しに当るために、黒服の男が通せんぼして
いたようだった。

そんな世の中をなめきった輩は、思い知られるに一番なので、有無
を言わせず殴った。

穀潰しは黒服の頬を殴ったが、
黒服は、よろめきもせず、顔色も変えず、あえてその攻撃を受け、
こついった。

「終りか？」

穀潰しは、どうやら並の人間ではないと判断し、本気で行くことに決めた。

「ひゃっは！潰れる！」

衝撃波を放つが、黒服が片手を振ると、衝撃波が消える。

穀潰しは、バックステップしさらに大技を使おうとしたところ、背中に何かが当たったため、

後ろを振り返ると、5、6人の先ほどの男を似たような黒服が、腕を組みながら、イラついた顔で穀潰しを睨んでいた。

その様子を見て、穀潰しはこれはいかんと思ったので、見苦しく命乞いを始めた。

「おいおい、そりゃ暴力じゃねえか？俺たち親友だろ？仲間だろ？」

それを聞いた殴られた男は、無言で仲間の黒服に目配せし、黒服らは、穀潰しをタコ殴りにする。

「ぎゃー！」

その後、縄で縛られ、穀潰しは害児の城へと消えていった。

害児は、物陰に隠れてその様子を見守っていたが、

穀潰しがぼこぼこにされたので、胸がすっとした気分になった。

「ふん。王者に逆らうからだ。」

これで気分よく善い人の家に行けると、害児は思った。

先ほどの黒服たちは当然害児の指示で動いていただけだった。

善い人の家に着くと、見慣れぬ物体が目に入った。

「古代生物ですか……。話には聞いていましたが。」

それは、善い人のペットである巨大なハエだった。害児は多少の興味があつたが、

今はそれよりも、大事な用がある。

害児は大慌ての風を作つて、ノックをした。

「善い人さん！大変です！悪人が現れました！」

それを聞くと、善い人もまた慌てて、家の外へと飛び出てきた。

「おのれ、まだ私が言う事が分からないとみえる。悪人はこっちに違いない！」

善い人が独断で、どこかに向かおうとするので、害児は全力で、それを阻止して、

まずは、話を聞いてもらうことにした。

「善い人さん。ここは私に任せて下さい。悪人が居る場所まで連れて行きます。」

この私を信じて下さい。」

害児の必死の弁舌で、善い人は心を動かされ、害児と一緒に悪人のところに向かうところにした。

「害児さんは、名譽なことだね。この私と一緒に善いことが出来るなんて。」

害児は大きくうなずいた。

「誠に！その通りでございます！」

なぜか、善い人の前だけ、随分と卑屈な害児だった。

演技でやってるのか素でやってるのかわからないが、恐らく半分演技で半分素なのだろう。

善い人と害児は、急を要するため、全速力で現場へと向かった。

害児は車いすジェット機で、善い人は普通に走っても高速なため問題なかった。

現場である害児の城の農家を見てみると、

板前風の男が、大勢の黒服にタコ殴りにされているところだった。

黒服の一人は害児を見付けると、喜び勇んで報告した。

「首領！やりました！我ら総出で盗人を捕獲したのです！」

害児は、満足げに微笑んだ。

「そうです。それでいいのです。」

しかし、収まりがつかないのが善い人であった。

善良な善人が大勢の悪人にふるぼっこにされている。

その事實は、善い人を激怒させるには充分すぎる事實だった。

「もう我慢ならん！」

善い人は、驚き慌てる黒服達を蹴散らした。

「ひい！善い人様！やめてください！」

「うわー！助けてくれー。しゅ、しゅりよおー！」

害兇をそれを見ていたがどうすることもできなかった。

「これも作戦のうちです。無駄死にはない。」

そんなことをいって策士風を気取り、場をごまかすのが今の害兇にとって精一杯の策だった。

そもそも善い人なんぞに頼った結果がこの有様だったが、そんなことを言ってももう後の祭りだ。

害兇の貴重な精鋭は、善い人に蹴散らされ、無抵抗で逃げ回るが、やがて善い人に追いつかれ、駆逐されていった。

「思い知ったかー！」

善い人は吠えた。板前は立ち上がり、そんな善い人をしげしげと見つめた。

「悪は去ったよ。もう安心だね。」

板前は、呆然と黒服達の残骸を見つめたが、やがて興味なさげに、自分が持っていた大根を見つめた。

板前の妙な様子に、善い人は怪訝な顔をした。この男は自分の善意が分からなかったのか。

もしや、悪人なのでは？もし悪人だとしたらただではおかぬ。善い人の善の直観は冴えわたり、彼が悪人であると断定した。

善い人が、善の行動を起そうと思いついた直前に、板前は叫びながら、持っている大根を善い人に振り落とした。

「こんな大根が食えるか！」

大根は善い人に命中し粉々になった。

その様子を見ていた害児はあまりの出来事に腰を抜かし、車いすから転げ落ちた。

その事実を害児が知った時、見苦しくは喚き、助けを求めた。

「早く車いすに乗せろお！」

駄々をこねて体をゆすつたが、誰も応じるものが居ないと感じると、何事も無かったように、立ち上がり、自分で車いすに座りなおした。

そして、ともかく事の成り行きを見守るべく、彼らの行動を待った。

善い人は、にっこり笑って板前に答えた。

「君は悪人だね。ぼこぼこだよ。」

そういつて、善い人が槍を繰り出すが、板前を大根を盾にして、その攻撃を受け流す。

「この俺の大根に傷が？」

板前は驚愕する。善い人もまた並みの悪人ではないと気を引き締めた。

「くくっ！いいのか？俺につかわせちまってよ！この俺の殺人大根をよお！」

そういつて、大根を次々と投げってくる板前。

善い人は、それらを剣で薙ぎ払いつつ、前進する。

大根の海をかき分け、板前の姿をとらえ剣を一閃したが、切れたのは大根だけだった。

板前は善い人の背後にいつの間にか移動し、善い人に攻撃を仕掛けた。

『ダイコソード！』

巨大な大根のインパクトを、剣で受け止める善い人。その衝撃で後方に大きく吹き飛ばす。

大根は、真つ二つに割れ、自分の手に残った大根を食べる板前に食べつつも、善い人の方を見てにやりと得意げに笑う。

小癪な板前に、善い人は怒りを爆発させた。

「思い知れ！善の力！」

『潰れる！ランダムスファイア！』

あたり一面に炸裂する衝撃波、それ等衝撃波は、板前にも善い人も害児にも無差別に降り注ぐ、善い人や害児はそれ等の攻撃を避け問題なかったが、得意げに油断をしていた板前は、

衝撃波の集中砲火を浴び、あえなくダウンしていた。

「ひゃっはっは！ひゃーっはっはっは！はっー！」

善い人と害児が声をする方を見ると、言わずと知れた穀潰しがそこにいたのだが、

特に害児は、穀潰しの後ろに見える自分の城を見て、愕然とした。

城が8割方壊れているのだ。

「この俺をあんなところに閉じ込めようなんて、虫が良すぎたんじやねえのか？ええ？」

害児さんよお！ひゃっは！ついでに間抜けな善い人も居やがるぜ！ひゃっは！

善い人は今日も馬鹿か？」

あまりの罵詈雑言に、害児は言葉を失ったが、どんな時でも冷静な善い人は、穀潰しに尋ねた。

「穀潰し。この善人を馬鹿扱いするのは許しがたい愚行だけど、そのこの悪人さんをやっつけたということは、改心したということなのかな？」

穀潰しは、残念な善い人の頭を思いつきこけにし、とことん馬鹿にしきった口調で、言い返した。

「この俺が善人になっただって？ひゃっは！笑わせてくれるぜ！
善い人はいかにも俺が善人のように見えるんだろぅが……。
馬鹿め！俺が善人なわけねえだろぅが！」

呆然としていた害児は、善い人が阿呆なことを言い出し、
穀潰しの味方をしそぅだったので、慌てて叫んだ。

「善い人さん！あいつは悪人です！何故それがお分かりにならない
のですか！」

さあ、今こそ我々王者の力をあの無礼な男に思い知らせてやる時
です！

躊躇する必要はありません！」

善い人は、穀潰しの言葉にもむつとしたが、害児の言葉にもむつと
した。

先ず善い人は、溢れる怒りを抑え、害児の方から対応した。

「この善人に指図するのか？」

害児は顔面蒼白になり、しどろみどろになった。

「そ、そんなわけでは……。」

善い人は物の道理の分からぬ害児を一喝して黙らせ、改めて穀潰し
の方に向き直った。

「穀潰し。先ほどからこの善人に対する数々の暴言。この私にも我
慢の限度というものがある。」

穀潰しは、そんな善い人の発言を腹を抱えて笑った。

「ひゃっははは・・・！潰れちまえ！」

そういつて、穀潰しはランダムスフィアを放つ。炸裂する球状の衝撃波をかわしていく善い人。

「くっ・・・。ここで善い人さんに倒れてもらっても困る。かくなるうえは、この私自らが動くしかない！」

害児は何処かへと消えていった。

衝撃波をかわした善い人だったが、さらに、自分の周囲に力を感じたので、回避行動をとる。

穀潰しが善い人の周りに展開したワイドカッターで、切れ味のいい衝撃波を複数善い人の周りに設置したのだった。

カッターは善い人に襲いかかり、善い人は勘でそれを避けていく。

避けるその動作の際を狙って、穀潰しの連続衝撃波が善い人に直撃した。

穀潰しは油断せず、遠巻きからその様子を見る。

穀潰しは、空気の振動を感じ取り、自分にバリアーを展開した、展開したバリアーには、弾丸の雨が降り注ぐ。

顔を布で覆った、傭兵風の人物が穀潰しに狙いを付けていた。

「善い人の仲間か。潰れちまえ！」

傭兵風の人物は、刀を抜き、穀潰しの背後に一瞬で迫る。

「げっ！」

穀潰しは絶望の声をあげた。

しかし、さっきまで寝ていた善い人が、傭兵の脇腹に飛び蹴りを浴びせ、

傭兵は攻撃を避け、距離を空ける。

「君は、こないだ私を狙っていたスナイパーだね！」

スナイパーは、何故か慌てた。

「なんだ？善い人の仲間じゃねえのか。なんだこいつは？戦闘狂か？」

穀潰しは首をかしげた。

「おい。善い人。そういやてめえは俺に潰されたんじゃないのか？」

善い人は答えた。

「私が君程度にやられると本気で思ってるの？」

善い人は、衝撃の瞬間、大剣を構えてダメージを最小限に減らしたのだった。

穀潰しが油断して、後ろを見せたところを蹴り飛ばそうとしたが、穀潰しがなかなか油断しなかったので、その機会がずっとなかったということだ。

スナイパーは、善い人達が問答している最中に布を取った。

でてきた顔は二人の顔なじみの人物だった。

「善い人さん！私です！」

善い人は出てきた顔を見てがっかりした。

「なんだ。害児さんか。紛らわしいな。」

しかし、穀潰しはにやりと笑って善い人に助言した。

「あいつは実は悪人だったんじゃないかねえのか？つまりてめえはまんまと騙されていたわけだ。」

「なに？」

善い人は、とりあえずニヤケ面の穀潰しを蹴飛ばして地面にめり込ませて黙らせたあと、害児に尋ねた。

「害児さん。これはどういうことかな？」

害児は冷や汗を垂らした。

「善い人さん。これは全て私の策なのです。信じて下さい。今まで貴方には随分尽くしましたこの私を疑うのですか？」

善い人は少し考えた後言った。

「私も心苦しいよ。しかし、善人は時に天から試練を与えられるものなの。」

害児は、雲行きが悪さに喚き散らした。

「えーい！こんな時に黒服は何をしておるか！」

善い人はそれを見て、本性が出たと思った。

「害児さん、残念だよ。」

害児は、この窮地を回避すべく、無い脳みそをフル回転させて、善い人の説得を試みた。

「この私が悪人だったとしたら、何故善い人さんに情報を与えていたのですか？」

これこそ私が善人であるという証拠ではないですか！」

善い人はそれもそうだと思った。しかしもやもやした行き場のない怒りを解消させるには、

誰かを悪人に仕立て上げなくてはいけなかったのだ。

「なんてことだ！害児さんは悪人に操られている！」

この善人たる善い人を騙すことが出来ないと、まだ分からないのか！」

善い人が強引に自分をぼこぼこにする口実を作っていると敏感に察

知した、
害児は、もう駄目だと思い、ダイナマイトを善い人に投げて、銃でそれを撃ち空中爆破させた後、姿を消していた。

善い人はあえて追わなかった。

そもそも、なぜ害児はスナイパーに変身して善い人を付け狙っていたのだらう。

謎が深まるばかりである。

おそらく、善い人の腕試しをしようとかそんなところだらうが、そんなことより善い人にとって害児のような小物などはなから眼中になく
ともかく、自分を騙した悪人をやっつけることに、頭がいっぱいだ
った

第五幕 黒幕は誰だ？

あらすじ

善い人の活躍により悪は去った……。が、黒幕はそんな善い人を見てほくそ笑むのであった。

義憤に駆られた善い人は、黒幕を突き止めるべく善行を成す。

登場人物

善い人

善の使者。この世を巨悪を正すために現世へ光臨した。

穀潰し

二流サイキッカー。善い人を敵視している。

害児

悪人に操られていたが、善い人によって救われた。

ハエ

古代生物の巨大なハエ。羽が取れることがあるが、またはえてくる。巨大と言っても、人くらいの大きさ。

第四幕

リダは、廃墟街のちよつとした顔だ。穀潰しより有名な悪人だが、彼は別に彼の団体のボスではなく、あくまでも現場のリーダーだ。

ボスは、他にいる。

善い人が討伐した、板前もまた、凄腕の悪人として知られていたが、今回善い人に討伐されたことで、その脅威は前に増してますます増し、

廃墟街の住人は善い人に対し、一種の共闘同盟を結ぼうとすら考えた。

というよりは、暗黙のうちにそういう雰囲気になってきつつある。

この世界は平穏だ。

衣食住は整っているし、自分がやりたいことは、なんでもできる。

争いもなく人々の大半は、助け合うのを当たり前として生きている。

が、そういう世界に耐えれない少数派の人間は、ここヒノキ村自治区を訪ねてくる。

こんな世界でさえ、一種スポーツと化してしまったが、戦争をしている地域もある。

彼らは、そういう世界にもなじめず、中途半端な反骨精神で、ヒノキ村自治区、廃墟街に住んでいるのだ。

そんな彼らにとって、善い人は一つのイベントでもあったが、同時にはた迷惑な人物であることにも違いなかった。

薬も過ぎれば毒になるというように、善い人は彼らが生活を楽しむには、

だんだんと邪魔になってきたのだ。

が、善い人として馬鹿ではない。敏感に不穏な雰囲気を感じ取り、今回の騒動には黒幕がいるに違いないと勘付いたのだった。

所詮、彼らのような小物では、善い人に遠く及ばず、彼女をだますことは不可能だということを悟らなければならない。

とにかく、板前、通称大根斬り蔵がこてんぱんにされ、あまつさえ彼の宝である大根が善い人によって強奪されたということで、リダを中心とする悪人グループは義憤を発していた。

「ぐずぐずしていたら、今度こそ俺たちの番だぜ……。」

悪人の一人はリダの顔を見た。その集会には包帯を巻いた大根斬り増もいる。

「あの大盗人め！この俺の大根を盗んでいきやがった！とんでもない悪人だ！」

斬り増は、善い人ととことん痛罵した。しかしそんなことしたところで、大根は帰ってこない。

とられたら取り返すしかないのだ。斬り増はリダに懇願した。

「リダさん！俺の大根の味は知ってるだろう？俺は大根を研究し追求したいだけなんだ。

それをあの大盗人の野郎めが……。」

憎憎しげに言い放つ斬り増。しかしリダとしてもどうすることもで

きなかった。

「そいつは分かっちゃいる。が・・・しかし・・・。」

悪人達も暗い顔だ。善い人に勝てるわけないと最初から決めかかっている風だ。

彼らは愚痴を言い合っていたが、結局良い案はせず、解散した。こんなことなら会議などする必要なかっただろう。

善い人は、廃墟街を威圧しつつぐるりと一回りする。

リダたち悪人グループは、その善い人の様子を遠巻きに腕組しつつにらんでいた。

そうしたら、善い人がこちらに向かってくるので、みな蜘蛛の巣を散らしたように逃げ出した。

「ふう・・・。ここまでくれば大丈夫だな。」

リダは胸をなでおろしたが、普通に考えてみて大丈夫なわけがなかった。

善い人は仏頂面でリダを見つめつつ話しかけた。

「何だその顔は？この善人を挑発してるのか？」

今日の善い人はすこぶる機嫌が悪いらしい。

「落ち着いてくれ。そんな気はないんだ。俺たちやあんたに逆らう気はない。」

リダは必死に善い人を説得した。

おかげで善い人の表情は少し和らいだ。

「実は、この私を馬鹿にしたとんでもない黒幕がいるんだよ。

その黒幕は今もこの私を馬鹿にして笑いものにしてるの。

この善人たる善い人を馬鹿にするということがどういうことか思い知らせないといけない。

そう思わない？」

善い人の超理屈にリダはぽかんとしたが、

善い人の機嫌を損なわないように言葉を選んで対応した。

「それで・・・俺たちはなにをしたらいいんだ？」

善い人はすかさず答えた。

「君達は改心したのだから、善い事をしないといけない。

今までの人生を反省して、新しい人生を歩むんだよ。」

リダは自嘲気味に笑った。

「新しい人生ねえ・・・。」

「私は善い事をするのに忙しい。」

そういつて善い人はどこかへ去っていった。
リダは今後どうするか考えながら、彼もまた廃墟街の闇へ消えていった。

善い人は目を血眼にして、黒幕を探し回っていた。

善い人の善の直感は、廃墟街のゴミ捨て場が怪しいと告げた。

そのため、善い人は義憤に駆られ、ゴミ捨て場へと急遽向かった。

案の定、ゴミ捨て場には、不審な点があった。

なんと人が埋まっているのだ。

この人間が黒幕かどうかはさしもの善い人にも分からない。

そのため慎重に、その人間を引き抜いた。

引き抜いたその人間は長身の女性だった。

2 mくらいはあるだろうと思われた。ちびの善い人と比べるとまるで巨人だ。

善い人がその女性の心臓に手を当ててみると、動いてはいなかった。呼吸もしてなさそうだった。常人ならば死んでいるのだと思った。ただ、
ろっくが、

善い人は間違いなく彼女は生きていると判断し、

八工を呼んで、自分の家までこの女性を運ばせた。

善い人は、桶に水をため、湯を沸かした後、桶を蹴飛ばし、湯をその女性にぶちまけた。

女性は真っ赤になったが、やけどすることはなく、その衝撃のためかむくりと立ち上がった。

「あれれ？ここは……。」

女性は立ち上がって辺りを見渡す。

「どこなんだろう？ここは……どこか分かる？おちびちゃん。」

女性は善い人に話しかけた。おちびちゃんとはご挨拶な話だったが、その口調に嫌味も気取りも感じなかった。

「ここは私の家だよ、のっぽさん。」

善い人はこともなげに話し、座り込んだ。どうやら疲れたらしい。

「私の名前はタンクよ。おちびちゃん。」

「私の名前は善い人だよ。ところで本題に入るのだけど。」

善い人は、座布団を持ってきて、タンクに勧め、座らせた後、自分はコタツに入り、身を乗り出してタンクにたずねた。

「この事件の黒幕を私は探してる。きつとこの善人をあざ笑い馬鹿

にしているに違いない。」

タンクはなるほどとうなずいた。

「私を追ってきた人たちがいて、その人たちが黒幕なんじゃないかな。」

善い人は自分の直感が当たったと狂喜した。

小躍りした後、部屋を飛び出した。

飛び出した先には、妙な風体の男が二人突っ立っていたので、善い人はすわこそ！と思い、善の一撃を放った！

『吹き飛ばせ！トルネードチャージ！』

妙な風体の二人組みは、上空に吹き飛ばされた。地面に激突した二人組みを見て、

悪は滅したと思った善い人であったが、二人は体に傷一つなく何事も無かったかのようにむくりと立ち上がり、善い人に話しかけた。

「俺たち、ゲノム戦士にはそんな攻撃は効かん。」

お前がロボットを匿っているということは分かっている。悪いこと

は言わない。

俺たちに彼女を渡せば、お前は見逃してやろう。」

善い人は感激のあまりプルプル震えた。典型的な悪人の台詞に善い人は、歓喜した。

「お前、聞いてるか。はやくだせ。おれたち、つおい。」

片言で、腕が以上に長い男が善い人を挑発した。

善い人は、なら望み通りぼこぼこにしてやると思った矢先、問題となっているタンクが家からでてきたので、攻撃を一時中断した。

二人は、タンクのほうを見ると、怒りをあらわにして、叱責した。

「なにをしているか！これだから先行量産型は馬鹿ばかりだ！」

「はかせ、おこってる、こい。」

タンクは不思議に首をかしげている。

善い人は横からタンクに助言をした。

「どうやらタンクさんはロボットらしいね。」

その言葉に引き継いで、腕がカッターのようになっている男が、言った。

「そうだ。人型変形戦車だ。人にも戦車にも変身できる作業用の口

ポットさ。

だが、そいつは工場から脱出を図った。博士がお前を連れて来いのことだ。」

「びえ！」

タンクは二人の剣幕にビビッて、家にこもってしまった。タンクがそのまま家に突っ込んだので、扉が壊れてしまった。

「ええーい！手間をかけさせる！」

カッター腕の男が、善い人の横を通り過ぎ、家の中に入ろうとしたが、

善い人がそんな無礼を許すわけもなく、カッター腕の男は、善い人に蹴り上げられ上空に大きく吹き飛ばされた。

やがて地面に追突した、カッター腕の男はそのまま動かなくなった。

「ジャ、ジャックー！」

腕長の男は叫んだ。どうやらジャックという名前だったらしい。片言だったのは演技だったようだ。

ちなみに、腕長の男と善い人は、二人同時に、カッター腕の男が上空に飛ぶのを見つめ、
やがて地面に激突した後、今度は立ち上がるだろうかとお互い観察した後、
立ち上がらぬと判断して、ようやく腕長野男が反応したのであった。

その光景はシニールというほかなかったが、当の本人らは大まじめ

だった。

「やってくれたな。小娘。俺の名はインフィニットアームズ、こいつは相棒のジャックハンターだ。ジャックの敵は俺がとってやる。」

インフィニットは、咆哮した。

「覚醒解放！遺伝子の力！可能性の秘技！受ける！インフィニットアアアーム！」

善い人は驚愕した、なんとインフィニットの腕が伸び、善い人に向かって攻撃してきたのだ。

その攻撃は只のグーパンチだったが、腕が伸びること自体ただ事ではない。

善い人は必死にその様子をスケッチした。

「すごいね。どうやったら腕が伸びるの？」

善い人はインフィニットに尋ねた。彼女も腕を伸ばしたくて仕方ないらしい。

漫画のネタにしたいのだろう。

「くっ！猪口才な！」

インフィニットは必死に善い人に攻撃を当てようとしたが、スロースぎたので意味はなかった。

やがてインフィニットは、あまりにも攻撃が当たらないので絶望し、

攻撃をやめて座り込んでしまった。

「もうだめだ！」

しかし、彼らはタフだ。先ほど善い人に討伐されたと思われたジャックが起き上がり、善い人に再度攻撃を仕掛けた。

「ハッハー！ジャックハンター！」

キラン！と腕を光らせ、上空へとび、近くにあった木の枝を切り落とす。

その後、ジャックはにやりと善い人のほうを向いて笑い、善い人に向かって突っ込んだ。

善い人は、振りかぶって攻撃をしてくるジャックの腕を剣で受け止めた。

哀れジャックの腕は真つ二つになり、ジャックは痛みあまり地面にのた打ち回った。

なぜ、体に直撃した善い人の攻撃は全く平気で、軽く受け止めただけの腕が斬れるのか。

しかも、ジャックが自慢げにしていたので、さぞかし硬度があるうと思っただが、

どうもとんだ期待はずれだったようだ。

「ジャ、ジャックー！おのれ！」

インフィニットは、同胞がやられたのを見て切れた。

「うおおおおお！」

何の意味もない突進攻撃だが、自分の腕に絡まり、転がって善い人に向かっていく。

善い人は、サッカーボールを蹴るようにめんどくさそうにインフィニットを蹴飛ばした。

「ぐううう……。無念。むねんんー！」

近所迷惑なでかい声を発して、インフィニットは倒れた。俗に言う死んだ振りである。

どうも、インフィニットはすぐに物事を諦めてしまふ性質があるらしい。

死んだ振りをしているインフィニットと違い、ジャックは本当に痛いので、まだのたうちまわっていた。

「ぐおおおお。いつそころせー！」

悲痛な声が響き渡る。

善い人は、彼らを見無視して、タンクがどうなったか、家の中に入った。

その様子を見たインフィニットは、善い人に家に向かって怒鳴った。

「なんてやつだ！ジャックがこんなに苦しんでいるのに顔色一つ変

えないなんて！
やつは人間じゃねえ！モンスターだ！」

モンスターはお前らだろといいたくなるつつこみだったが、
どうやら善い人には聞こえなかったらしい。

最悪の事態にはならずすんだ。

しかし、インフィニットの失態はこの後すぐ去らなかったことだろう。

彼はそのことをこの後すぐに後悔することになる。

善い人は、当然その声は聞こえ、びくびくと反応したが、彼女は仮にも善人、タンクの様子も心配だった。

タンクはコタツを破壊し、その中に入って震えていた。

お気に入りのコタツを壊され、怒髪天をつくばかりに怒り狂った善い人であったが、
善人の寛大な心でそれを許した。

だが、この怒りは誰かをぼこぼこにしなければおさまらないだろうことは、
誰にでも容易に想像できる事柄だった。

インフィニットは調子乗って、家の中にまで入り込んで、善い人の間近で挑発をした。

まるで、善い人にぼこぼこにして下さいと言わんばかりのタイミングで、あきれ返るばかりだ。

「どうした？かかってこいよ！びびってるのか？」

善い人は、インフィニットをじろりと見るとあることを尋ねた。

「君達は雑魚だね。私は君達のボスに会いたいんだよ。」

インフィニットはその言葉を一笑した。

「はんっ！貴様が博士に会つたと？貴様ごときがか？いい加減にする！」

善い人は、怒声を発し、インフィニットを顎を蹴り上げ、空中に浮かべさせた後、
踵落として地面に激突させた。

「蹴鞠落とし！」

「ぎゃー！」

その後、剣を構え、インフィニットの体を切り裂いた。

「Z斬り！」

インフィニットは攻撃を受け、意気消沈した。

実際は、軽く傷を負っただけだが、先にも考察したように、インフィニットはすぐに諦めてしまうようなのだ。

それにどっちにしろ、善い人を倒すことなんて土台無理な話だろう。

善い人は改めて、黒幕に会わせてくれるかをインフィニットに尋ねた。

「この私の善行の手助けができるなんて素晴らしい事と思わない？だから貴方は私に協力すべきだよ。」

もしもそれができないなら、私は貴方を善の力で正さないといいない。」

善い人は、槍をインフィニットの体に向け、問うた。インフィニットはブルった。

彼は博士に忠誠心もありあるわけではないのでしぶしぶながらも、博士のところに案内することにした。

「仕方ない。俺たちを作った博士の名は・・・ななな・・・。」

善い人は、善の直感でインフィニットの体を蹴飛ばした。

インフィニットは家の外に飛び出し、そのまま爆発して溶けてしまった。

それと見た、ジャックは叫んだ。

「イ、インフィニットー！く、くそお・・・。」

善い人とタンクは家から出てきて、ジャックと対峙した。

ジャックは涙を浮かべながら、善い人たちをにらみつけた。

「貴様ら！これで勝ったと思うなよ！例えインフィニットを倒して

も、

第二第三のインフィニットが現れ貴様を倒す！」

善い人は明らかに調子に乗っているジャックを善の力で思い知らせないといけないと、

感じた。自分の使命は彼を正すことだろうと。

「どうやらぼこにされないと分からないみたいだね。」

だが、そんな善い人をタンクが止める。

「ダメだよ。善い人ちゃん。もうあの人片腕もとれてるし、戦えないよ。」

これ以上やると弱いものいじめになっちゃうよ。」

理路整然なタンクの助言に善い人はぐうの音も出さず認めた。

「私も今ちようどそのことを思っていたところだよ。」

いつの負け惜しみだった。

タンクは、ジャックの取れた腕をかごに入れて、ジャックの首にかけた。

ジャックは呆気にとられていたが、どうやら逃がしてくれる雰囲気だったため、

とりあえずこの場は退くことにした。

「今日のところは退いてやろう。ありがたく思うんだな。」

そういつてジャックは去っていった。

善い人は腹がたって仕方なかったのだ、タンクが目をそらしている隙に、

ジャックに石を投げてぶつけた。

「ぎゃー！」

ジャックはかごの中にある腕をぶちまけたので、おろおろしつつ必死にそれを拾った。

彼の手は両手がカッター状なので、うまく拾えない様子だ。

善い人はその光景を見て胸がすつとした。

ぼけているタンクは、善い人の悪行に気づかず、善い人の服を引っ張って家の中に入った。

「今日も善いことができた！」

善い人は満足げに微笑んだ。

第六幕 巨悪の予兆

あらすじ

黒幕は下つ端達は、討伐した……。が、そのボスはいまだ謎に包まれている。

果して、善い人は、善人を馬鹿にしあざ笑う、極悪非道の悪人のボスを倒すことが出来るのだろうか？

登場人物

善い人

白い帽子、白いコートに身を包んだ善人

穀潰し

善い人を付け狙う廃墟街の悪人の一人、地面に埋まるのが好きらしい

ガストラゲタ

重装備を信条とし、火や毒、薬といった攻撃を使いこなす、また極東の島国に伝わる剣術の達人でもある。商人

害児

ヒノキ村自治区（善い人達の住んでる場所一帯）の実質的な領主

タンク

善い人に拾われたペットロボット

ハエ

善い人に拾われた古代生物

「害児さん。なかなか順調ですな。しかし彼らの働きはいつも見事だ。

いや軽やかというべきであるか。」

害児と親しげに話すのは、よろず屋のガスである。

二人の仲は、一言で言い表せないほどの確執が今迄にある。

だが、今のところは、彼らは気の合う友人のようだ。

ただし、その腹の中では、どう思っているのか、その駆け引きは絶えない。

害児とガスは、商売敵でもある。とはいえ害児の商売とは、自治区の運営の事で、

ガスの商売は個人の趣味だ。それでも商売敵といえる。

私利私欲一杯のガスだが、ガスから言わせれば、害児の商法の方が海賊だ。

商人とはもともと海賊みたいなものだが、害児のそれはよほどひどい。

とガスは思っている。

まあ、客観的に見ればどっこいどっこいといったところか。

ガスは、車で城の材料を持って来て、それを黒服達が組み立ててい

るのだ。

前回善い人にぼこられた黒服達だったが、元々鍛えてあるので、体の回復は早かった。

害児は、工事中の城の中の、一回の応接間で、ワインを飲みながら、ガスと雑談をしていた。

「ふふ……。当然です。ところで、あなたの友人の穀潰しさんのことですが。」

ガスはびくりとしながら、害児の顔色を窺った。機嫌は悪くなさそうだが油断は禁物だ。

ガスの情報網は素晴らしいので、穀潰しが要らぬ事をした情報も全部知っていたのだ。

ガスは平静をよそ装いつつ尋ねた。

「ああ……。穀潰しか。そんなものもいた気もする。」

ガスはお茶を濁そうとしたが、害児に睨みつけられ、首をひっこめた。

「いや、明確にあなたの友人であったはずです。

それともあなたはこの私が嘘を言ってるつもりなのか。」

「あいやそういうわけでは……。」

ガスは、害児の恫喝に肝を冷やしつつも、本題に入ることにした。

「それで、その吾輩の友人である穀潰しとやらがなにか？」

害児は興がさめたらしく、仏頂面だ。

彼女は確かに穀潰しに一杯喰わされた形になったわけなのだが、その手際の鮮やかさと潔さ

そして誇り高さに一種の敬意を持っていたのだ。

ガスが穀潰しの友人であることには誇りを持っていい筈なのに、このような渋る態度を見て、

害児は自分の見識が馬鹿にされ侮辱されたように思えた。

「おいつ！」

突然、黒服に話しかける。

「ははっ！」

「客人がお帰りだ。」

そういつて、害児はガスを一瞥もせず、その場を去り、雑談の間に出来上がりつつあった、自分の部屋に登っていった。

ガスは、害児の侮辱に憤り、顔を真っ赤にしたが、何も言わなかった。

「よろず屋。帰れと言っている。」

黒服は高圧的にガスに言った。ガスは感情を押し殺して、黒服にあいさつした。

「では吾輩はこれで。害児さんによろしくいつておいてくれ。」

「ふんっ！商人が。」

黒服如きにまで侮辱され、ガスは体が震えたが耐えた。

その当の黒服は、害児を神の如きに信仰してるので、彼女の感情の通りに自分の感情も合わせるのだった。

そこまでガスが嫌いなわけでもない。彼らからするとそれが当たり前で普通なのだ。

黒服は、ガスに一言残すと、すぐに城を直す作業に戻った。

ガスは、のっそりとした動きで、城跡を去った後、振り返り一言言った。

「この吾輩にこのような仕打ちをしおって……。今に天罰が下るから見とれ……。」

結局、自らの手では何もできないガスであったが、一言恨みを言い放つことで、

多少の溜飲は下げられたようだ。

彼は一見下種な商人だが、内心のプライドは相当高いのだった。

それから数日がたった。

穀潰しは、善い人に地面に埋められたまま、今迄脱出できないでいた。

『この俺は不死身だ!』

ドカーン! 爆発音とともに、復活する穀潰し。

どうやら地面にめり込んで遊ぶのはもうやめにしたらしい。

「あの善い人の野郎。舐め腐りやがって、この俺が生きていたと知ったら、仰天するだろうぜ!

ひゃっは!」

その時、大地が大きく揺れた。

穀潰しが埋まっていた穴に亀裂が入って、危うくまた埋まりかけた穀潰しだったがすんでのところ、回避した。

穀潰しは、サイキックで空中に浮遊すると、町の様子を見渡した。

彼は害児の城付近にいたわけだが、まず害児の城は完成したのも束の間すぐにまた崩壊してしまったようだ。

以前尋ねた善い人の家も壊れている。ガスの店も壊れてしまっているようだ。

というより、町の大半が壊れている。

穀潰しは青ざめた。

「や、やべえぜ。これは。こうしちゃいられねえ。善い人の野郎に伝えねえと！」

穀潰しはなぜか善い人にこの惨状を伝えようと行動しようとしたが、誰かに袖を引っ張られたので、後ろを振り返った。

後ろにいたのは彼にとって予想外の人物だった。

「害児か。何の用だ？俺は忙しんだが。」

穀潰しは彼女に、ひどい目に合わされたので、警戒気味に対応した。

害児は、城が壊れたので、空中へ車いすのジェットで脱出した後、浮遊している穀潰しを見付けて寄ってきたのだった。

彼女は突然の事に呆然とし、若干混乱を起している顔つきだった。

「これはひどいことになりました。私たちはどうしたらいいのです
ようか？」

穀潰しは、こんな時に何をのんきなことを言っているのかとあきれ
た。

「てめえの勘違いには反吐が出るが、今そんなことを言ってる場合
か？

だから俺は今善い人の奴に知らせようとしてるんじゃないか。」

害児はその穀潰しの言葉を熟考した後、おもむろに口を開いた。

「いや……。善い人さんを探してる場合でもありません。恐らく彼女なら平気でしよう。」

私たちは、今動けるわけなのだから、私たち単独で動くべきです。」
穀潰しは、他力本願で善い人にさえ伝えれば、なんとかなると早合点していたが、

言われてみれば、確かに害児の言い分には、一理あった。

冷静になって考えてみると、確かにそちらの方がよさそうだと穀潰しにもわかった。

害児如きに、そんな指摘をされると思いもよらなかった彼は、若干気分を害したが、
自分でも妙案を出すことで、溜飲を下げることにした。

「てめえにしては、ましなことを言ったな。だがな、勘違いするなよ。」

俺だって馬鹿じゃねえぜ。いいか。俺たちだけで動くとしても拠点
は必要だ。

だが、地上はほぼ全壊しているし、今も定期的に揺れているみてえだ。

俺たちは空を飛んでるから、問題ねえが……。

ともかく、ガスの家の地下なら、例え爆弾が降ってきても壊れねえはずだ。

そこに行くぞ。」

害児は、思いがけずガスの家に行かねばならぬ事態になり閉口し、
自らの得意げを恥じたが、
もう今となつては後の祭りであった。

しぶしぶその事に同意し、さらに、何かと自分を侮りがちな穀潰しに、自分の有用性を主張した。

「いいでしょう。しかし仮にも私は王者。自負があります。この私は武術に通じ、その腕は達人の領域に達しております。」

「だからなんだ？」

「この腕は医術にも応用でき、この私は名医の領域にも達しているということですよ。」

例え、道具が何もなくても、この腕一本で治療が出来ます。

あのよろず屋も感謝するでしょう。この私がいたということに。皆が王者たるこの私を讃えることは間違いありません。」

害児は、恐れ入ったな？という顔で、穀潰しを見た。

穀潰しは、勇ましい害児を多少見直したが、彼の性格上素直にはめるということはしない。

せせら笑って、強がった。

「ふん。口では何とも言えるぜ。そういう口だけの奴ほどいざという時は役に立たないものだがな。」

まあせいぜい良い働きを期待してるぜ。じゃあいくぞ。」

穀潰しはあまり長く浮いていられないのだ。そろそろ念力が尽きてしまう。

そのこともあって、穀潰しと害児は、急いでガスの家へと向かった。

現場についてみると、ガスは、自分だけのうのと助かるために、地下の扉を締切っていたので、

穀潰しはランダムスフィアで、それをぶち破った。

ついでに、ガス本人と同じ位嚴重に保管されていたとみられる、ガスの愛車のプレオにも、
穀潰しは腹いせにランダムスフィアを放って、めこめこへこませ
ておいた。

「ひゃっはっは！ざまあみろ！」

「穀潰しさん。遊んでいる場合じゃありません。」

害児から注意を受けて穀潰しは正気に戻った。

「おおそうだった。怪我人をここに運び込むぞ」

「今既に黒服が動いています。時期にここにやって来るでしょう。」

「ふん。いい部下だな。」

穀潰しは害児がすごいのではなく、部下がすごいのだと皮肉ったの
だが、

害児は皮肉られたと気付かず、地下に下りて行った。

地下に降りてみると、その膨大なスペースに、害児は驚愕した。
どうやら来たのは初めてだったらしい。

「あのよろず屋め……。相当たんまり貯えこんだに見える。思い
知られないと分からないようだ。」

害児の眼光がきらりと光った。

穀潰しが、不審げな声を害児に向けた。

「どうもおかしい。人の気配がする。」

「なるほど。確かに、然も膨大な人の数です。もしや？」

既に黒服が仕事を終えたのだと、害児は勘付き胸をなでおろした。

「どうやら、もう心配ないでしょう。この分だと住民は全ているようです。」

「そうみてえだな。まあお前も部下だけは優秀だと分かったぜ。」

いけすかねえ野郎どもだが……。ともかく奥に行ってみようぜ。」

地下の奥に行ってみると、二人の思案通り、確かに住民が沢山居た。

害児は、住民に話しかけ慰労した。

穀潰しは、もう大丈夫だろうと気が抜け、悪人達が溜まっている場所に、自分もまぎれ、寝転んだ。

害児が上機嫌で住民と会話していると、突然大きな声が地下に響き渡った。

「おや！そこにいるのは害児さんではないか！

今頃のこのことなんのようできてきたのであるか？」

でかい声の主は、よろず屋・ガストラゲタだった。

ガスが人をもなげに、住民たちを見下すと、彼らはガスの為に道をあけた。

そうして、害児の方にはずかずかと近づいた。

「おのれ！よろず屋！よくもいった！」

害児は激昂したが、周りの住民Aが害児を諫めた。

「いや、害児さん。よろず屋さんは、自分の研究の結果で、地震が来ることを予測し、

事前に我々をこの地下都市に連れてきたのです。

ここだと、地中の揺れをほぼコントロールでき、地上程の影響はありません。

地上の映像は、その巨大モニターで見れます。」

害児は、ちらりと、住民Aに指を差された方を見た。

モニターは、今も大地震が起き、建物が崩壊している映像が流れているが、人一人いなかった。

ガスは、嫌味たっぷりに害児を侮辱した。

「お分かり頂けたか？害児さん。あなたにはこの住民は何の用もないのだ。

招きもしてないので、なぜきたのだ？害児さんは。

特に吾輩と害児さんは親しい間柄でもないのに！もういい！帰ってくれ！」

害児は、ヘルメットの影に隠れて暗くなった目を歪ませ、邪悪に笑い、

思いつきり害児に罵詈雑言を浴びせた。

害児は、逆にガスに質問した。

「よろず屋。先ほどの暴言は王者に対する反逆であるとして覚えておくが、しかし、なぜ、研究の成果で、地震が来ると分かったなら、この私に知らせなかったのだ？」

ガスは大げさに驚き、両手を挙げた。

「あいや！恐れ入った事である！どうして吾輩が、害児さんなんか、
に、
只で情報を与えないといけないのであるか？

吾輩は別に害児さんの奴隷でもなんでもないのであるが・・・？
どうしても、情報を聞きたいなら、今からでも大金を積めば教えな
いこともないが？

大体が、教えてほしいなら、事前に聞けばいい。」

あまりにも人を小馬鹿にした言葉であった。

大体が今から情報を聞いても遅いし、事前に聞けという発言にも無理がある。

害児が、押し黙っていると、いつの間にか、寄ってきた黒服達が、
声をあげて号泣した。

「すみません・・・すみません首領！我々が到らないばかりに！」

「こんなよろず屋如きに・・・。ちくしょう！」

ガスは、それらの塊にも侮蔑のまなざしを向けた。

「泣いても無駄である。」

非情な一言である。侮辱された黒服達は、ますます大きく声を張り上げ泣いた。

害児は、押し黙っていたが、黒服達を見て一喝した。

「このようなよろず屋如きに、泣いてても始まりません。それよりも、今他にやるべきことがあるはずです。こんなゴミ虫になど構ってられません。」

ガスは、ゴミ虫扱いされ、頭に来たが、やり返した。

「吾輩がゴミ虫なら、害児さんはなんですか？ゾウリムシですか？」

害児はその言葉を見せず、怪我した人を治しにいった。黒服達も同様だ。

その背後から、ガスが大喝した。

「思い知ったかー！」

その言葉に害児達はびくびくとうごめいたが、治療に集中することにした。

「ふん！張り合いの無い連中じゃわい！」

ガスはそういって、去っていきこうとしたところ、穀潰しに腕を掴まれた。

「ああ……、穀潰しか。」

「おい、善い人が居ねえみたいだが。お前なんか知らねえか？」

「ん？善い人……？ああ……、そんな人もいたか。知らんな。吾輩は。」

「あの野郎、この一大事に何やってやがる！とんだ善人だぜ！おい、ガス。」

俺は善い人の野郎をここに引きずってくるぜ！」

「穀潰し。実は、逃げ遅れた住民も結構いたのだ。もうすべての住民がいるはずだが、もれがあるかもしれない。いたらここに連れて来てくれ。」

後、当面は害児さんたちだけで、治療の方は充分と思うが、神の腕を持った彼にも、応援を頼まないとな。」

「おいおい……あいつかよ。」

穀潰しも知っている人物らしい。

露骨に嫌な顔をしたということは、腕は良くても性格は悪いということころなのだろう。

ちなみに、ガスは害児達にはれないように秘密裡に行動したということ、

ガスの情報を信じなかった住民も若干いたため、地震発生後に救助した住民もいたのだ。

ガスは、とんでもなく善人に見えるが、別にそういうわけではなく、

これも全て害児達に復讐したい一心であった。

全く執念深いやつであった。

大体穀潰しなどは、害児達にもっとひどい目にあわされているのに、こんな陰険な仕返しはせず、害児と協力しているのだから、彼の爪の垢でも煎じて飲ませたいくらいだ。

それと、どうやらガスにとって善い人は、ヒノキ村の住人という認識ではないようだった。

一体どういう見なのか、問い詰めたいくらいで、もしこの場に善い人がいたら、

問答無用で張り倒されていたであろうことを考えると残念でならない。

そうしたらさぞかし、害児達もすつとした思いであつただろうに。

さてところで、どうしてこんな地震が起つたのか。

自然発生的な偶発的なものではないことだけは確かだ。

善い人は前回の戦いで、インフィニットとジャックハンターを激闘の末、討伐したが、

しかしながら、彼らが前座で雑魚であることは、最早だれの目にも明らかな決定事項であった。

そもそも、いきなり降ってわいてきたタンクとは何者だったのか。彼女はちゃっかり善い人の家にいつき、一生そこにいるつもりらしい。

善人たる善い人は、タンクと共に黒幕のボスを討伐すべく、作戦を練っていた。

「善い人ちゃん。いくら善い人ちゃんでも、本部のバリアを突破するのは難しいと思うの。」

どうやら、タンクが言うには、悪人のボスの本部の周辺にはバリアが張っており、そのバリアのせいで、場所が感知できなくなっているらしい。

善い人の善人魂からすると、そんなもの問題ないが、問題は次那点だった。

バリアには電磁波が貼られており、近寄ると黒こげになってしまうのだ。

「なるほど。しかしそういう場合、狡賢い悪人のことだから、隠し通路があるはずだよ。」

善い人は手に持った自作漫画をタンクにみせた。

その漫画にはまんまと善い人らしき主人公が、悪人の隠し通路を見付けている絵が描かれていた。

「いや隠し通路はないよ。ただ一つだけ方法はある。」

タンクはガチャンと音を立てて、一瞬で戦車に変形した。

「私の中に、善い人ちゃんがあれば、バリアは越えられると思うよ。でもあんまりやりたくないんだよなあ……。」

タンクはちらりと善い人を見た。

善い人は義憤を發し、タンクを叱咤した。

「タンクさんも善い人になれるチャンスだよ。早く善い事をしなくちゃ！」

そういつて、善い人はタンクに乗り込んできたので、タンクは仕方なく出発することにした。

「それでは……しゅっぱー。」

カタカタカタとやる気なさげに、動くタンクに、善い人はいらいました。

「もう我慢ならん！」

ドカツ！

「びえ！」

善い人は一瞬で外に出て、タンクを蹴飛ばし、加速がついたところで、もう一度乗り込み、

タンクは吹き飛ばされ、大きく進んだ。

タンクはその衝撃で気絶したらしく、動かない。

「タンクさんはなんて役立たずなんだ！失望したよ。でも安心して私は絶対タンクさんを見捨てないからね。」

結局、缶けりの缶のようにあちこちに蹴飛ばされたタンクだった。

善い人が、悪人の本部らしきところに、到着したのは、次の日になつてからだった……。

真っ黒の工場のような、アジトだった。

そのアジトの前には、ずらりと悪人が待ち構えていたということではなく、

二名ほどこしか敵はいなかった。

その二名とは、インフィニットとジャックハンターだった。

ジャックは、善い人に向かって話しかけた。

「貴様に腕を折られたせいで、俺の腕の硬度レベルは0からやり直しだったぜ！

だがな。そのおかげで俺は地獄を見た。もう負ける気はしないぜ。」

どうやらリベンジのつもりようだ。悪人にしては意気込みよしと善い人は好感をもった。

インフィニットも善い人を挑発する。

「おれたち、もつとつよくなった、おまえ、勝てない。」

片言なのは、霧囲気を出す為で、実際はしゃべれるのだ。こんないかにもうすのろです。

と言わんばかりの霧囲気を出したところで、たかが知れてると思うが。

「そういえば、お前には俺たちの必殺技を見せてなかったな。見たいか？」

善い人は必殺技と聞き、目を輝かせた。

「見たい！」

あまりにも素直に対応されたので、ジャックは多少面食らったが、気を取り直して必殺技を披露するつもりのようなうだ。

「善い人ちゃん。大したことないからあまり期待しない方がよいよ。」

善い人の後ろに隠れたタンクは、善い人に耳打ちした。ちなみに今は人間形態に変形している。

大したことないと揶揄されて、顔を真っ赤にしたジャック達だったが、ジャック達がどなる前に、善い人がタンクを一喝した。

「やってみないと分からないじゃないか！」

善い人に怒られてタンクは反省した。

「そ、そうだね。確かにやってみないと分からないね。」

善い人が自分達の代わりに怒ってくれたので、ジャック達は面子がたった。

インフィニットはジャックに目配せして、攻撃を開始した。

「目覚める！ 遺伝子のパワー！ 可能性の力！ ぶちかませ！ インフィニットアームズ！」

決して速いとは言えない速度でによきによきと腕が伸びてくる。

その腕は、一つの石を掴み、ジャックの方に投げた。

「行ったぞ！ ジャック！」

「ハッハー！ ジャックハンター！」

ジャックは刃物状になっている腕を天に掲げ、ジャンプした後、インフィニットが投げた石ころを斬った。

石は、哀れ真つ二つ・・・とはならず、若干亀裂が入っただけだった。

ジャックは、腕を抱え痛そうにしている。

「ほら、みなよ、善い人ちゃん。きつと腕が痛いんだよ。あの人。」

タンクの空気の読めない発言に、ジャック達は猛烈な抗議をした。

「俺は痛くない！決め付けるな！」

「そうだ！どうして痛いなんてわかるんだ！だったらお前がやってみろ！」

タンクはびびって、善い人の方を見た。

善い人が頷いて一歩前にでたので、ジャック達は後ずさりした。

善い人は手ごろな石を見付けてタンクに向かって投げた。

「思い知れ！善の力！」

「お、おー！」

タンクは、きつとさっきのジャック達の真似をしたらいいのだろう
と思い、

背中からのこぎりカッターを取出した。

タンクが石を斬ろうと前に進んだが、何故か前に進まない。

何故かというと善い人が足を掴んでいるからだった。

「タンクさんアタック！」

タンクをそのまま善い人がぶんまわし、石にぶつかりと石は粉々吹き飛んだ。

その有様を見て、ジャックとインフィニットは顔を真っ青にした。

「ば、ばけものだー！」

「にげるー！」

二人は、善い人達に後ろを見せて見苦しく逃げようとした。

その時、どこからともかく、レーザーが飛んできて、二人の体を貫き、二人はとけて消えてしまった。

善い人は善の鉄槌が下ったに違いないと判断し勝利宣言をあげた。

「悪は去った！」

善い人は、ビビりまくって渋るタンクを、黙らせ、工場の中へと進んでいった。

工場の中は、既にもぬけの殻だった。

善い人はまたもやいっぱい喰わされたと、がっかりした。

その時、善い人の肩をちよんちよんと叩くものが居るので、タンクかと思つて振り向いたら、

そこにいたのはタンクではなく、見知らぬ青年だった。

「やあ、君は誰かな？もしかしてこのボス？そんな風には見えな
いけど。」

「ここから先は俺に任せて、君は引き返すんだ。素人が出る幕じゃない。」

善い人は、さては手柄を横取りにする積りだなと感付いた。

「この善人たる善い人が、そういわれて引き下がると思っているのか。」

「俺は忠告はしたぞ。どうしてももついてきたいならついてくればいい。」

青年は何を勘違いしたのか、善い人についてこいという。

善い人としては、悪人と対立してそんな人間をばこるわけもいかないので、

おとなしくついてくことにした。

ところでタンクはというと、善い人が目を離れた際にさっさととんずらしたのだった。

善い人は最早タンクの存在など忘れていたので、そんなことはどうでもよかった。

そんなことより、善行を他人に奪われやしないかと心配でならなかった。

「妙に思わないのか？俺の事を、なんでこんなところにいるのかってことをな……。」

「善いことをするためでしょ？」

「善い事？まあそうだな。俺は俺をこんな体にした、連中に復讐しているんだ。」

ははっ……笑っちゃまうぜ。連中は俺を強くしたばかりに俺に倒

されてるんだからな……。」

「ふーん。すごいね。」

「いざとなったら君は逃げる。私に全て任せておけばいい。」

「あっそう……。」

善い人は面白くない顔だったが、悪人にこのストレスをぶつけようと算段していた。

そのため、もしこの勘違い君が悪人のところに連れて行かなかったら、

適当な大義名分をこじつけて、ぼこぼこにしてやろうと思っていた。

「ちつ。連中勘付いてやがった。困まれてるぜ！」

「！」

善い人達に照明が照らされる。あたりは真っ暗だったが、そのおかげでフロアの様子がよく分かった。

あたりには、ジャックハンターが100体以上おり、善い人達を囲んでいた。

「いくらお前らが強くても俺たちには敵わないだろう！」

「ハッハー！俺たちはクローンだから、死を恐れていない！だから最強の兵士なのさ！」

ジャックハンターたちは不敵に笑った。

「くっ！ここは私に任せて君だけでも逃げるんだ！」

青年はまたもや、善い人に逃げることを進めている。

善い人はようやくの悪人に内心歓喜した。

「もう我慢ならん！」

『突き刺さる蹴り！』

善い人の必殺の蹴りがジャックに炸裂する。

ジャックは腕の部分にけりが当り、一人のジャックがうごめくと、それにつられたように、ジャック達が全員うごめいた。

「しまった！俺たちはクローンだから痛覚を共有してるんだった！」

これでは死を恐れないもなにもない。

危機が去り、青年は胸をなでおろした。

「どうやら助けられたようだな。でも油断は禁物だぞ。敵の組織はこんなものじゃない。」

「そうだね。まだ敵のボスがいるはずだよ。」

フォッフオッフオ・・・・。

謎の声がフロアに響き渡った。

天井に大きなスクリーンが映し出されたが、その映像は、ノイズが入っていて、誰がそこにいるのかよく分からなかった。

「なかなかいい見世物だったよ。特にそのジャックハンター共がうごめくところなんぞ、大爆笑ものだったわい。フォッフオッフオ！貴様らはいい働きをしてくれた。」

感謝するぞい。」

善い人は激憤した。

「なんてことだ！私たちは、悪人の手のひらの上で踊らされていただけだったなんて！」

「むう！貴様！卑怯だぞ！姿を現せ！」

スクリーンの人物は、善い人達をあざ笑った。

「フォッフオッフオ！もう貴様らに用なんぞない。消えるがいい！」

ゴゴゴゴゴ。

「しまった！いやみ博士のやつはここを爆破するつもりだ！ここから脱出するぞ！」

「でも、この悪人さん達はどうしようか。」

善い人は、ジャックハンター達を見た。

「うおおおお・・・！助けてくれー！」

「ぐおおお！いつそころせー！」

青年は善い人を諭した。

「かわいそうだが、見捨てるしかないだろう。彼らも覚悟が出来ていたはずだ。」

「いや・・・。善人たるこの私は、彼らを救う宿命がある。」

善い人は、今回あまり善行をできなかったので、ここらで一気に挽回しようと考えているようだ。

その善い人の姿に青年は感動した。

「君の事を誤解していた。私も手伝おう。」

そう話していると、善い人達の足元が爆発して、中からタンクと八工が飛び出してきた。

「びぎー！」

「はあい。善い人ちゃん。おまたせ！」

善い人はにっこり頷いた。

彼らは善い人のピンチを察して、やってきたのであった。

二体は、ジャックハンターたちを自分達が出てきた穴から外へ運ぶ作業を始めた。

「さすがはこの善人のペット達だね。さて、じゃあ私は悪人の親玉を叩きに行こう。」

もうこんなことはやめさせないといけない。」

青年は大きくうなずいた。

「その通りだ。悲劇を繰返してはならない。」

善い人は、青年がまだついてくる気満々なのを見てうんざりしたが、仕方ないと諦めた。

「こつちだ！ 奴の行動パターンは読んでいる！」

青年は、善い人を先導し、爆発しているビルを駆け抜けた。

「ぐっ……。熱い！ 変身！」

青年は、一瞬のうちに姿を変えた。

彼の容貌は、半獣人といった具合で、いかにも恐ろしげな井出達だった。

「まあこんなところさ。見るよ。この体。まるで悪魔みたいだろう？だから連中は俺をこう呼んだんだ。デビルってな……。」

善い人は、いい加減茶番に付き合っているのも馬鹿馬鹿しくなり、デビルを蹴飛ばした後、高速で駆けていった。

後ろから、私に構わず行くんだ……！とかいう声が聞こえたが、善い人は丸無視した。

善い人が奥に向かってみると、ちょうど車ほどの大きさの球状の物体が、どこかへ発進しようとしているところだった。

善い人は、問答無用でそれを蹴飛ばしたが、弾き飛ばされる。

その弾き飛ばされた反動を利用して、床を蹴って槍を構えた。

『貫け！トルネードチャージ！』

球状の物体は、飛び立ったが、善い人は追尾し、その物体に槍を突き立てた。

その後、その槍を足場にして、大剣を構え、球状の物体に向かって振り落とした。

『砕ける！エレファントクラッシュ！』

すさまじい衝撃に刃はぼろぼろになり、そのぼろぼろになった刃がまた、

球状の物体に突き刺さる二段構えの攻撃だ。

球状の物体は爆発したので、善い人は身をひるがえして、距離を取る。

既に空高かったが、途中で八工が、落下する善い人を拾い、地上へとおろした。

球状の物体が爆発するのを見て、善い人は安堵したが、彼女の善の直観はこれで終わりではないことを感じ取っていた。

「おのれ！逃さん！」

善い人が駆けていくその先に、先ほど爆発した筈の球状の物体が見えた。

どうやらさっきのはダミーでこっちが本命らしい。

かなりの速度が出ているらしく、善い人が全速を出しても、あまり距離は縮まらなかった。

あとちょっとで追いつけるといいうところで、

物体が突然姿をけし、後は何処を探しても見つからなかった。

その消えた場所は、なぜか害兎の城跡の近くだった。

善い人は思うところがあったが、とりあえず自分の家に戻って、タ
ンクの成果を確かめることにした。

第七幕 善人達の活躍

あらすじ

遂に黒幕を追い詰めた善い人であった……。が、すんでのところで逃げられてしまう。

今頃悪人のボスは善人をあざ笑っているだろう。

善い人は悔しい思いを押し殺し、更なる善行に励む

登場人物

善い人

白い帽子、白いコートに身を包んだ善人

穀潰し

善い人を目の仇にしている悪人

ガストラゲタ

常に何事かを企んでいる商人

害児

善い人が住むヒノキ村自治区の実質的な支配者

黒服

害児の腰巾着

ハエ・タンク

善い人のペット達

ジャックハンター100体
新しく善人になった同志

さて、地震が発生する時刻に善い人の時間が追い付くにはまだ間があった。

この後、起る大地震と善い人がここまでとつた行動は密接な関係があるのだが、その全容はまだ謎に包まれたままだ。

果して、いやみ博士とは？何故大地震が起きたのか？害兇との関係は？

タンクやデビル、ゲノム戦士達・・・分からないことだらけであったが、善の心を持って、一新に突き進んでいけば道は開けると善い人は確信していた。

家に戻った善い人は、ジャックハンター達がどうなったか、タンクに問うた。

「善い人ちゃん。ごめんね。私も頑張ったんだけど、半分しか連れて来れなかった。後の半分は溶けちゃったよ。」

「ぴ、びぎい・・・。」

タンクもハエも落ち込んでいた。善い人もそれは残念だと思い、大いに落ち込んだ。

「改心した善人達を助けられたなかつたのは、残念だったよ。でも私たちには使命があるのだから、いつまでも落ち込んでいては駄目だよ。」

タンクはそれを聞いて、それもそうだと思った。しかし、話はこれだけではないのだ。

「あの人たちは、全員一度は博士のところに戻ろうとしたけど、博士がどこに行ったか分からないから、ここに居ついてる人も何人かいるよ。でもほとんどの人は、廃墟街に居ついてるみたいだね。」

善い人は悪人共の巣窟である廃墟外に、折角助けた改心した善人がいると聞き、驚いたが、すぐに考え方を変えた。

「いや……。以前改心した善人さんが廃墟外にも居るから大丈夫だよ。」

私が話してみるから。」

善い人が言ってるのは、リダ達のことだろう。

「さすが善い人ちゃんだね。天才だね！」

善い人はあまりほめられたことが無いので、大いに図に乗った。

「まあね。この私に掛れば、どんな悪人でも善人にするのはたやすいよ。」

そういつて体をくるくる回転させながら、筆を走らせ漫画を描いた。

その漫画をタンクに渡した。

「どうかな？」

その絵は、善い人らしき主人公に後光が差し、悪人達が有難がってひれ伏しているところだった。

その中には、タンクからも混じっていた。

タンクは、善い人のあまりの態度のでかさに若干引きつった笑みを浮かべつつ、それでも善い人をほめた。

「ま、まあいいんじゃないかな。ところで、助けた人たちの様子を見に行く？」

「そうだね。そうしようか。」

善い人は、同じ絵を一生懸命書いて、沢山持ち、ジャックハンター達が居る場所に向かった。

ところで、配置として善い人の家は、先ず小高い丘の上にあり、赤い屋根の白い家に住んでいる。

さほど広くは無い。庭には八エの小屋と果物がる木がなっている。

そこをずっと下って、丘の麓付近に、ジャックハンター達が自分らで作った小屋があった。

中には、10数名のジャックハンター達が、訓練に励んでいる。

善い人は、彼等の居る小屋にずかずかと入り込んできて、彼等を慰
勞した。

「やあ、やってるね。今日は善いものを持ってきたよ。」

ジャックハンター達は突然の闖入者が善い人だと知ると、警戒の色
を見せた。

一人のジャックハンターが勇気を振り絞り、善い人に向かって発言
した。

「あんまり馴れ馴れしくして貰っても信用ならんな。

何しろ俺たちはお前にぼこぼこにされたんだからな。」

ジャックハンター達は頷いた。あまり恰好よくない台詞だが、確か
に感情として、

いくら助けられたとはいえ、彼らは面白くなかった。

「俺たちを拷問して、博士の居場所を吐かせようとしても無駄だぞ。
何しろ俺たちだって、

博士を探してるくらいなんだからな……。」

ジャックハンターは自嘲気味に言い放った。彼らはもしや博士に見
捨てられたのでは？

という思いが、どこかに皆持っているからだ。

善い人は大きく頷くと、ジャックハンター達に漫画を配った。

ジャックハンター達は手が刃物なので、それがうまく持てない。

特製の手袋をはめて、ようやく漫画をもてた。

「なんだこれは？俺たちに読んでくれってことか？」

「君たちは善い人によって選ばれた善人だよ！

誇りを自覚をもってこれから善行に励んでほしい！」

ジャックハンター達は怪訝げな顔をした。

「善行といつたか？具体的には何をしたらいいんだ？お前は俺たちに何をさせたいんだ？」

善い人はそんなことも分からないとは、あまりできのいい善人ではなさそうだと思いつつも、

彼らを育てるのも自分の役目だと思い直し、仕方なく善人の使命を教えることにした。

「善人魂の思うがままに、善行をなすのが善人の使命じゃないか。そうでしょ？何でこんなことも分からないの？」

ジャックハンターの一人が善い人を指さして叫んだ。

「こいつはクレイジーだ！」

ジャックハンター達は、善い人がクレイジーだという事は理解したが、

結局善い人が自分たちに何をさせたいのかは皆目見当もつかなかった。

別のジャックハンターが改めて質問した。

「それで、この漫画はなんだ？」

「それは私から君たちへのプレゼントだよ。面白いから読んでみて。」

善い人はニコニコ笑った。

クレイジー扱いされて多少むっとしたが、漫画に関心を示してくれたので、

途端に機嫌が治ったようだった。

横で一部始終を見ていたタンクはどうせろくなことにはならないと思ひ、はらはらどきどきしていた。

ジャックハンター達は、善い人に対する警戒を怠らずに、おもむるに各々漫画を読み始めた。

少したってジャックハンターの一人が善い人に近づき、文句を言った。

「おい！なんだこれは！絵が下手過ぎて何が描いてあるかわからないぞー！」

善い人は、善人の神聖な絵を汚す悪人に天誅を加えようと考えた。つまり彼の一言は善い人を激怒させるには充分すぎる一言だったのだ。

「もう我慢ならん！」

善い人は怒気を発し、ジャックハンターを蹴飛ばした。ジャックハ

ンターは小屋を突き抜け、
どこかに飛んで行った。

すわ！

といわんばかりに、ジャックハンター達はどよめいて、刃を構えた。
ちなみに蹴られたジャックハンターは、改造部分を蹴られたわけ
はないので、
痛覚は共有していない。

ゲノム戦士は一般に、遺伝子の可能性を追求する人体実験の訓練を
する人のことで、
別に戦闘要員ではない。

ただし、可能性を追求すべき部位以外は、強化措置を受けている。

彼らの改造部分以外が異様に耐久度があるのはそのためだ。

今回彼らが痛覚を共有している理由は、ただ単にいやみ博士が観て
いて面白いからだ

という理由に過ぎないが、彼らはそんなことは知る由もない。

ところで、彼らは刃を構えたが、
善い人相手に、硬度レベルが低い刃を当てたところでどうにもなら
ないことは気付いていた。

タンクはやはりろくなことにならなかったと思い、いきり立つ善い
人とジャックハンター達を止めた。

「や、やめようよ。喧嘩はよくないよ。」

善い人はタンクに反論した。

「タンクさん。この人達は善人に刃向うつもりのようなよ。これは正さないといけない悪だ。」

タンクは別に自分にメリットがあるわけではないが、殺伐とした雰囲気ややりきれなかったので、

人の言う事を聞かない善い人ではなく、ジャックハンター達を説得した。

「いいの？今戦っても善い人ちゃんにぼこられるだけだよ！ちゃんと実力を付けてから戦っても遅くは無いよ！」

戦いを止めるきっかけを探していたジャックハンター達はその言葉にすぐに飛びついた。

「なるほど、一理あるな。善い人とやら。今の俺たちをぼこるのはたやすいだろう。」

だが、少し時間をくれれば、俺たちはお前を圧倒するようになるだろう。

そうなつては、お前としてはまずい事態だな。

俺たちをぼこぼこにするなら、今やっっておいた方が良くぞ！」

ジャックハンターはにやりとした。こういえば強者ならば、反応し、「ふん！そこまでいうのなら、

時間をくれてやるう」などというはずだからだ。

しかし、善い人は強者ではなく善人だった。

「うるさい！」

善い人は一喝すると、得意げなジャックハンターを蹴飛ばし、蹴散らした。

「うわー！助けてくれー！」

「こ、ころされるー！」

辺り一面は阿鼻狂乱、周章狼狽の態、哀れむべしといったところで、無様に逃げようと背を向けたところを善い人に蹴散らされる有様だった。

これが誇り高きゲノム戦士の末路かと思うと、彼らは自分でも涙が出た。

程よいところで、タンクが善い人を止めに入り、善い人が最後にジャックハンター達に一喝した。

「これに懲りて善人になるように励むんだね！」

善い人がそういって、去った後、ジャックハンター達は地団駄踏んで悔しかった。

「くー！あんな奴如きに俺たちゲノム戦士が屈しないといけないとは！」

「いっそ殺せ！」

だが、喚いたところで現状は変わらない。
そもそもわざわざ善い人の家の近くで暮らしていたのが間違いだと
気付き、

次の日には、ジャックハンター達の小屋は取り壊され、
残っていた10数名のジャックハンター達はどこかに散ってしまった
たようだった。

次の日壊された小屋を発見したタンクは善い人に尋ねた。

「善い人ちゃん。折角助けた人たちがどこかにいってしまったよう
だけどいいの？」

善い人は、本当は悲しかったが強がった。

「大丈夫だよ。彼らはきっと真の善人になって戻って来てくれる。」

「そうかなあ？」

タンクはとてもそうは思えずいぶかったが、善い人は固く信じてい
る様子だったので、
何も言わないでおいた。

そして、数日後

善い人は、廃墟街へと向かった、要件は言わずとも知れている。

ジャックハンター達のことをリダ達に頼むためだ。

善い人が、機嫌よく軽快な足取りで廃墟街を歩いていると、善い人
の行き先を手を拡げ通せんぼする影がある。

大根切蔵であつた。

大根切蔵は、手に持った大根を得意げに食べ、にやりと善い方を見て笑つた。

善い人は猪口才な悪人を思い知らせてやらねばならぬと感じ、これに善の攻撃を加えることに決めた。

善い人が高速移動をし、切蔵に接近すると、何故か切蔵は慌てた。

彼からすると、これは只のあいさつで、別に挑発したつもりではなかつたらしい。

本の遊び心であつたが、だとしても善人の行先を阻む罪は許されるものではない。

善い人は、切蔵に危害を加えず、彼が貯えこんでいた大根ばかりを狙つて、滅多切りをした。

「この俺の大根が！」

切蔵は絶望してへたり込んだ。

善い人は一喝した。

「これが善の力だ！」

しよげ返つた大根（切蔵）は、善い人に脅されしぶしぶ善い人をリダの元に案内した。

「てめえは白服！害児の犬めが！」

リダは善い人を見るなりかみついた。

善い人は静かに諭した。

「まだ思い知らされが足りないのか？」

リダはその静かな剣幕にすぐさま身をわきまえた。

「いや、別に俺はお前と争いたいわけじゃねえ。」

そういつて、震える手でタバコを取だし、火をつけて煙を吐いた。

不快に思った善い人は、タバコを蹴り飛ばしたため、リダの口からタバコが吹き飛んでしまった。

リダは、恐れ入ったが、部下の手前、体裁を整え善い人に質問した。

「で？何の用なんだ？ええ？言つとくが俺たちや忙しんだぜ？」

善い人は微笑んでリダに朗報を知らせた。

「君たちが善の行いをするチャンスがやってきたんだよ。

改心した善人がこの街に紛れ込んでいて困ってるみたいなの。
だからその人たちを守ってあげてほしいの。」

悪人達はやがやと騒ぎ出した。

「手前でやれ！」

「そんな義理はねえ！」

その他がやがやと喚いたが、善い人がそちらの方を見ると押し黙った。

「やってくれるよね？君たちは誇り高き善人なんだから。」

リダは困惑した。とてもではないが、そんなあほなことやりたくなかった。

「やらなくはねえ……。やらなくはねえが……。」

切蔵は、リダの不甲斐ない態度を見て抗議をした。

「おい！それはねえだろ！俺たちの面子はどうなるんだ！」

リダはぼそりと呟いた。

「面子じゃ飯は食えねえよ。」

切蔵は、リダに大根を投げつけた。リダはそれを片手でキャッチした。

「手前はそれを喰って少しは性根を鍛えろ。」

リダはやれやれというポーズで、大根を部下に向かって放り投げた。悪人はそれをキャッチするとガッツ食いをした。

「うめえ！」

悪人はにかつと切蔵に向かって笑い、切蔵はぐつと親指を突出し、にやりと笑った。

「じゃあ頼んだよ。また来るからね。」

悪人達は大根宴会をしだし、善い人に向かってお前もどうだと誘ったが、

善い人は使命があるので、仕方なく断った。

恐らくあれだけ盛り上がっているならば、リダ達はやってくれるだろう。

善い人は勝算が立ったので胸をなでおろした。

善い人は家に帰ったが、未だに善人に屈しない悪人がいないことを嘆いた。

善い人の善の直感は確実に新たな巨悪の存在を捉え、善い人は更なる巨悪の備えのために、瞑想を行うことにした。

「じゃあいつてくるね。」

善い人は、タンクと八工を家に残して、どこともしれず、絶海の孤島に向かった。

孤島についた善い人は、空を見上げた。

空はたちまち曇り、剛雷が善い人に連続的に降り注いだ。

「これは大変なことになりそうだね。」

雷の中で、善い人は、巨悪の存在を感じ取り、更なる義憤に燃えた。

「良し行こう。私は善いことをしなければならぬ。」

善い人が去った後孤島の空は、瞬く間に晴れ渡っていた。
さっきまでの天気がつそのように。

善い人が、ヒノキ村自治区に近づくにつれ、揺れが大きくなっていく。

どうやらヒノキ村自治区中心に地震が起こっているらしい。

「善い人！ひやっは！きてやったぜ！」

「穀潰しか。何の用かな？」

どうやって発見したのか知らないが、穀潰しが駆ける善い人と平行しながら話しかけてきた。

彼も相当なスピードが出せるらしい。

「なにいつてやがる。うだつのあがらねえ手前の為に、
善いことができる情報を教えてやろうとっているんだぜ。」

「穀潰しが善人たるこの私にか？」

善い人は不安そうな顔だ。

穀潰し如き悪人に善い人に対して有意義なアドバイスができるとは到底思えないではないか。

「ああ……。俺たちが奮闘したおかげで、とりあえず住民はみんな無事だぜ。」

今は、みんなガスの家の地下にこもってるが、医者数が足りねえんだ。

お前には、俺たちと一緒に医者を探しに行ってもらおうということだ。」

「それって善い事なのかな？」

善い人はあまり頭が良くないので、結局穀潰しが何を言いたいのか良くわからなかった。

穀潰しは自信ありげに頷いた。

「そうなるはずだ。ほぼ間違いないだろうな。」

「穀潰しのいうことだから、あまり信用ならないけど、善人はどんな悪人のいうことでも、

信用してあげなければならぬからね。君のことも特別に信用してあげるよ。」

「そうかい。ありがたくて涙が出るぜ！じゃあさっさとガスの家に行くぞ。」

辺りは大体揺れが収まっているが、まだまだ予断を許さない状況だ。

ガスの家に向かってみると、ガスが泣きっ面でプレオを地震が激し

い中必死に修理していた。

「おい。ガス。善い人をつれてきてやったぜ！早速出発だ！」

ガスは、泣きながら叫んだ。

「まだ修理が終わってない！」

善い人は不服そうな顔で抗議をした。

「この車は壊れてるよ。」

「なに！おのれ！」

ガスはいきり立った。ガスはプレオを気に入っており、プレオを侮辱するものを激しく憎悪するのだ。

「プレオを侮辱するものは許さない！受ける必殺！」

ガスは、ライターを取り出し、自分の体に火をつけた。

『ガス・フェニックス！』

ガスは、あちちちといいなから、火達磨になって、善い人に突っ込んだ。

善い人は横にひよいとよけて、ガスはずざーと地面に転がった。

「た、助けてくれー！」

穀潰しが足で砂をけつてガスに駆けると、火は鎮火した。

「善い人。問題ねえぜ。俺がサイキックで動かすからな。」

そういつて、穀潰しは助手席に座った。

「よし行くぞ。わりいが、善い人。ガスをここに運んでくれねえか。そいつがいないと詳しい場所がわからねえんだ。これも善いことには必要だろ？」

姑息な穀潰しは、善い人に自分の言うことを聞かせるため、保険をかけた。

善い人は、善を成すには時には我慢も必要だところらえ、歩いたほうが早いのにプレオに乗ることにした。

ガスは蹴飛ばして、運転席に乗せ、自分は後部座席にのった。

「ガスは途中でおきるだろ。地下では害児達が奮闘しているが、急いだほうがいい。」

「確かに。」

善い人は素直に同意した。穀潰し達は時間がないので、ガスが起きる前に出発した。

穀潰しもある程度までは道は知っているが、詳しい道はガスに聞かないとわからないのだ。

穀潰しは、サイキックで車を動かしつつ、善い人に質問した。

「一つ聞くが、お前は どうして善いことをしてるんだ？何のメリックともねえだろう？」

穀潰しは落ち着いて善い人と対話する機会が一切なかったため、尋ねることができなかったが、
実のところ、そのことが非常な疑問として常に胸にあったのだ。

善い人という善は一見、自分勝手の偽善に見えるが、
自分では善だと信じ込んでいるのだから、よくいる類の善人ではない。

穀潰しはそう感じた。何事も中途半端で一生懸命になれない穀潰しが、

善い人に絡む理由は、善い人の意味不明な一生懸命さにあったのだ。

「善人が善いことをするのは当たり前だよ。君はもう少しものを良く考えたほうが善いね。」

善い人のような馬鹿に、馬鹿扱いされた穀潰しは、肝を潰した。

盗人猛々しいとはこのことだ。

穀潰しは、有益な情報が得れなかったため、さらに善い人に質問をした。

「なら、善いことをするようになったきっかけはなんだ？生まれたときから善人だったのか？」

善い人は少し考え込み、答えた。

「きっかけか。きっかけは・・・雷が・・・。」

そこで途切れてしまった。穀潰しは再度善い人にその部分を詳しく聞くため言葉を促した。

「雷が何だ？」

「私は善いことをしなければいけない。」

その言葉はどこか、空虚で、人間の発する言葉に思えなかった。まるで魂が抜けているような、それでいて神々しいような印象だ。穀潰しは、突然変容した善い人の言葉に背筋が凍る思いだった。

(この俺が恐怖を感じているのか?)

穀潰しは、何事も適当だ。自分も生死にもさほどこだわっていない。そんな自分が恐怖を感じたことがにわかには信じ難かった。

穀潰しが、押し黙っていると善い人が逆に質問してきた。

「私も質問するけど、君はいつからそんな穀を潰してばかり役立たずになったのかな？」

その口調は普通の善い人の口調に戻っていて、穀潰しはほっとした。穀潰しは善い人の質問にニヤニヤしながら答えた。

「おいおい。ずいぶんなことというじゃねえか。ならその役立たずの

力を見せてやるのか？」

「面白い！」

善い人は、車を降りて、大剣を構えた。

「ひゃっは！」

穀潰しは、車をサイキックで動かし、善い人のほうへ、押し出した。善い人は構え、それを真つ二つに切り裂こうとしたが、硬いものにあたり跳ね返される。

しかし、剣の衝撃波で、車は結局真つ二つになった。

善い人の剣にあたった硬いものとはガスで、剣にあたったせいで、ガスのよろいはだめになった。

その衝撃でガスは目を覚まし、プレオが斬られていく光景を見て、絶望の声を上げた。

「プ、プレオー！」

その後、善い人とガスの元に、穀潰しのランダムスフィアが落ちてきて、ちょうど、覆いかぶさるような位置にあった、プレオに全ての衝撃波が降り注いだ。

ドカーン！

プレイは空中で大爆発を起こした。

「う、うおおおおー！ー！ー！」

ガスは、叫んだ。ありたっけの声を出して叫んだ。

「邪魔だよ。」

ガスは善い人に蹴飛ばされ、転がった。

善い人はそのまま、穀潰しに向かって突進したが、穀潰しはそれを手で制した。

「どうしたの？今更怖気ついたのかな？」

「いや。こんなことしてる場合じゃねえな。おい。ガス！医者家に行くぞ。」

善い人は大剣を収めた。

「そうだね。穀潰しにしてはましなことをいう。」

善い人は、叫んでいるガスの頭をガスが持っていた棍棒で数回叩いた。

叩かれたガスのヘルメットは、その攻撃で駄目になった。

ガスは正気に戻り、駄目になったヘルメットと鎧を見て、苦笑いをした。

「見たまえ！我輩のヘルメットと鎧とがひしゃげてしまった！

これはずいぶんと滑稽な姿であるな！しかもプレオまで吹き飛ばしてしまった！」

穀潰しは、まだ残っていたプレオの破片をかき集めて、プレオの運転座席を再生させた。

「ガスはその上に乗れ。行くぞ。善い人。飛ばすぞ。」

ガスは、疲れきったようにどっかりと椅子に腰降ろした。あまりの理不尽に怒る気力すらなくなっただらしい。

「医者の家はあっちである……。」

力なくガスは指差した。

三人は、全速力で、医者の家を目指した。穀潰しの移動方法は、通常のテレポートではない。

というよりは、穀潰しはテレポートの類は使えない。

テレポートは、ある程度の修練がいるからだ。穀潰しはサイキックの訓練などほとんどしてないのだ。

彼の使っているそれは、肉体強化の高速移動に過ぎない。

その高速移動は、一瞬しか発動しないが、彼はそれを連続的に使っているのだ。

しかし、穀潰し自身はそれがテレポートだと信じきっている。

やがて、医者に着いたが、医者は庭先に出てきて、善い人達を

見るなり軽蔑の眼差しを
向けた。

「なんですか。ガストラゲタさん。この薄汚い子供たちは、
申し訳ないが、私の家に雑菌を入れるわけにはいかないのです。わ
かってもらえますな。」

あなたたちはそこで待っててもらおうか。話はガストラゲタさんか
ら聞きましょう。」

「何だとしてめえ！」

穀潰しはいきり立ったが、ガスに止められた。

善い人は自分が馬鹿にされていることに気づかなかつたが、
家に入れてもらえなかつたので怪訝げな顔をしていた。

「穀潰し。早く行かないと大変だよ。」

穀潰しは申し訳なさそうな顔をした。

「そりゃそうだが……。」

「あの人を連れて行くんでしょ？それが善いことなんだよね。」

「じゃあ行こう。ぐずぐずしてる時間はないよ。」

善い人は医者が言っていた言葉の半分もわからなかつたらしい。

穀潰しは頭で計算した。善い人のせいにして、この家をぶち壊して
あの医者をびびらせてやろうと。

穀潰しは、あの医者が顔をあわせるたびに自分を侮辱するので、

内心腸が煮えくり返っていたのだった。

「そうだな。ひゃっは！ぶち破れ！」

穀潰しは、衝撃波で、家を吹っ飛ばした。

中には、医者とガスがお茶を飲みながら話し合っていた。

さぞかし、医者がびびるだろうと思ひ、優越感に浸っていた穀潰しであつたが、

医者は慌てず騒がず、冷静に言葉を発した。

「君たちはおとなしく待っていることもできないのかな？」

穀潰しは計算が狂い錯乱したが、やけっぱちになつて、数の優位に訴えた。

「粹がるなよ！こつちは三人だぜ！」

医者はその言葉にカチンと来たので、穀潰しを無視して、ガスに話しかけた。

「どういうことだね？これは。このような有様では君たちに協力することなど、無理だと思わんかね？」

それと、ガストラゲタさん。付き合う友人は選んだほうがいい。」

ガスは慌てた。このままだと医者に来てもらえず、

害児にアドバンテージを取られてしまうことになるかもしれない。

ガスは家を提供したが、治療を担当しているのは専ら害児一派なので、

そこに、一つ釘を打っておく必要があるのだ。

「名医さん。彼は少し病気でして……。いやはや我輩も困ったことでありましてな……。」

そういつて、ガスは懐から、袋を取り出し、医者目の前に置いた。

「ほう……。」

ぎらりと医者目の色が変わった。ガスは再度尋ねた。

「きていただけますな。」

「ええ！それはもう！協力させてもらいます！」

善い人は、笛を吹いて、ハエを呼び、医者を運んでもらうことにした。

それが考える限りで一番早い方法だったからだ。

医者が完全に見えなくなったのを確認したのちに、穀潰しはガスにかみついた。

理由は先ほどの病気扱いの件であった。

「おいおい。ガス。てめえずいぶんなこと言うじゃねえか。ええ？ひゃっは！」

善い人さんよお！こいつは俺達を病気扱いした大悪人だぜ！」

善い人は、病気扱いというのがいまいちよく分からなかったが、ガスが悪人と聞いて、

黙ってはいられなくなった。

「ガスさんが悪人というのは本当かな？」

ガスは慌てず騒がず冷静に対応した。

「あの時はああ答えるのがベストであったことは、二人も認めるところだし、

あれは吾輩の策であったのだから、とやかくいうものではない。

吾輩らの目的は優秀な医者を現地に届けることであって、後の事は些細な事なのだ。」

穀潰しは、理路整然なガスの対応にぐうの音も出なかったが、それでも何かケチを付けてやろうと粘った。

「だったらためえの頭が病気ってことにすればいいじゃねえか！」

ガスは穀潰しのあまりの馬鹿さ加減に呆ける思いであった。

あの流れでガスの頭が病気だと医者に対して発言したら、

本当に冗談ではなく頭が病気な人扱いされかねない。

穀潰しの言い分は、只むしゃくしゃした八つ当たり以上の何物でもなかった。

穀潰しが尚もガスにかみつこうとすると、善い人がその言葉を遮った。

「用が済んだならさっさと行こう。次はどんな善いことをするのかな？」

その言葉にガスが対応した。

「出来る限り、優秀な医者がほしいところであるが……。
然しもう大体数は間に合っているだろう。」

吾輩は、一仕事しなければならぬから、ここで別れたいとならぬ
い。

後は二人で頑張つてほしい。」

ガスはそういつて、渋い顔をしている穀潰しに米袋を渡して、去つていった。

穀潰しは不機嫌そうに米をむしゃくしゃ喰つた。

「穀を潰すのはおもしれえなあ！うめえうめえ！」

「じゃあ穀潰し。他に善いことが無いなら、私は次の善いことを見付けないといけない。」

穀潰しは穀を潰すのを邪魔されたのでむすつとして答えた。

「なんだてめえは？俺にいつたい何の用なんだ？さつさと消えろ。
ぶつ飛ばされんうちにな！」

そういつて満面の笑みで穀を潰すのを再開しようとしたところ、後頭部に衝撃が走り、

哀れ穀潰しはまたもや、地中深く埋まつてしまった。

「彼もこれで反省してくれるといいんだけどね。まだまだ穀潰しは善人としては詰めが甘い。」

善い人は穀潰しを反省させるため、地面に埋め、とりあえず他に優秀な医者を探すために、

当てもなく彷徨い歩くことにした。

第八幕 サイキツカーの影

あらずじ

善い人率いる善人達の活躍で巨悪の試みはかろうじて阻止できた。後は街の復興だけであったが、善い人は今回の巨悪の企みに対し、直感的にこのままでは終わらないことを感じ取っていた。

登場人物

善い人

砥ぎすまれる善の直観により、全てを把握できる超人。善人。

穀潰し

善い人にぼこられ多少改心したが、いまだに悪の心にとらわれている小人物。

ガストラゲタ

悪徳商人

害児

武術に精通している車いすに座っている女性。

善い人は、医者を探していたが、これがなかなか難航した。というより、善い人には医者が誰だか分らなかったもので、片っ端から人を拉致して地下都市に押し込めた。

穀潰しは善い人のそういう修行をせせら笑った。

「おいおい。馬鹿の善い人さんよ！無駄に役立たずを増やしてどうするんだ！ひゃっは！」

お前は役立たずの王様にでもなりたいのかよ！」

穀潰しに便乗し、住民を治療して大得意になっていた害児は、侮蔑の笑みを込めて、

善い人にいやみを言った。

「まあ、善い人さんはこの程度のものでしょうか。あまり多くは期待しないほうがいい。」

にやにやしている害児に、ガスは舌打ちした。

「いや、穀潰し。彼らは医者だ。そこにいるゾウリムシなどよりよほど役に立つな。」

害児の笑みが引きつり、ガスに質問した。

「ガスさん。ゾウリムシとは誰のことなんです？ねえ？教えて下さいよ。」

ガスは、害児の言葉をぶいっと横を向いて無視した。

無視された害児は腸が煮えくり返る思いであったが、我慢した。

善い人に拉致された住民は、お互い顔を見合わせ、状況を把握した。どうやら悪い目には合わないらしいと判断し、住民の一人が弱弱しく抗議をした。

「俺達は医者じゃねえぞ……。」

今まで黙っていた善い人は、いい気になって笑っている無能どもに活を入れた。

「この私の善行を邪魔立てしようというのなら、考えがある！」

高らかな宣言であったが、穀潰しはあきれ返ってしまった。

「そうかい。じゃあ勝手にしろ。」

そういつて、悪人達のところに行き、米袋の米を喰いつつごろ寝した。

害児も、やれやれといったポーズをとって治療を再開した。

ガスは、ゴホンゴホンと咳をしつつ、善い人に接近し説教を喰らわせることにした。

「善い人君。あまりこんな無様をしてくれるな。一体善い人君は誰の味方なのだ。」

善い人君が無様なのはどうでもいいが、吾輩を巻き込まないでほしい。」

この男は何を言っているのだろう。とんちんかん過ぎて開いた口がふさがらないとはこのことだった。

勘違いも甚だしいガスの言い分だが、善い人は無頓着だ。

「さあ！みんな！怪我人を治療するよ！」

拉致された人達は善い人に急き立てられ、けが人を治療する作業に入った。

ガスはその様子を見て、ふんと鼻を鳴らし、善い人に話しかけた。

「吾輩はまだ、作業が残っているなら、この場は任せるが、そろそろ地下都市から、地上に出て復興作業を開始してほしい。

吾輩としてもいつまでもここを利用しては困るのだ。

コストがかかるのでな。商売にも支障が出る……。」

善い人は頷いた。

「わかったよ。じゃあ私はもう地上に移るよ。」

「そうしてくれたまえ。」

ガスは偉そうに善い人に命令した後、プレオに乗って何処かに繰り出していった。

役立たずの王様善い人は、大得意で、拉致した人間を増やし、復興作業に当らせた。

その中で、善い人は興味深い話を穀潰しから聞いた。

「どうやら、ガスの通知を無視した奴らがいてな。バイオ戦士のクローンだそうだ。

お前を探す途中で何人が拾って地下都市に運んできたんだが……。」

「それは、確か新しく善人になった人たちだ。」

「てめえの仲間か。悪いが、全員は回収できなかった。もう後10体程度しかいないぜ……。」

確か、ジャックハンターは30体いたわけで、残り20体はどこかにいつてしまったか、消えてしまったのだろう。

「その人たちは今どこに？」

「さあな。だが、両腕の無い男が一人だけ、ここにとどまっているみてえだ。」

「両腕がないの？」

「ああ。会ってみるか？」

「うん。」

穀潰しは、ジャックハンターのところに案内するべく、先導した。

辺りはどんどん薄暗くなり、遂に真っ暗になった。

善い人がそれはそれに関して、何にも関心が無かったが、

穀潰しは善い人が暗闇を気にしていると思っ、説明してあげた。

「あいつらは暗がりをおむみてえだな。理由は知らないが。」

「あっそう。」

やがて、倉庫の前に来て、穀潰しは衝撃波を放ち、倉庫の扉をぶち破った。

「ここだ。」

倉庫の隅から声が聞こえた。

「なんだ？」

穀潰しが答える。

「善い人を連れてきてやったぜ。」

「善い人だと？今更何しに来た！」

善い人は、ジャックハンターに近寄っていく。それを見てジャックハンターは怯えた。

「や、やめろ！見るな！見るんじゃないやねえ！」

善い人はその言葉を無視してずんずん近づく。

やがてジャックハンターの目の前まで到達すると、確かにこのジャックハンターには両腕がなかった。

「・・・はっ！笑っちゃまうよな。見るよ。この俺の姿を・・・。」

「君には善人として期待してたけど、なぜこんなところでさぼっているの？」

「なに？お前には見えないのか？俺には両腕が無いんだ。」

俺の両腕は、俺の命そのものだ。こんな俺に何の価値があるというんだ？」

善い人は、首を振った。

「言い訳は見苦しいだけだよ。それともまだ思い知らせが足りないのかな？」

穀潰しは、二人の後ろで黙って様子を見守っている。

ジャックハンターは肩を落とした。

「ははっ……。俺はもう駄目さ。放っておいてくれないか。」

善い人はジャックハンターが何に落ち込んでいるのかさっぱりわからなかった。

分かったのは、ジャックハンターがみんなが頑張っているのに、復興作業をさぼろうとしている事実だけだった。

善い人が善人と認めた人物が動かないとなると、善い人の善人としての面子が立たなくなる。

善い人はそれをひどく恐れ、言う事を聞かないジャックハンターに激怒した。

「この私を甘く見るとどういうことになるのか、まだ分からないのか？」

悪人の策謀はこの善人たる善い人には、通用しないといつになつたらわかる？」

善い人の冷徹な闘志を見て、ジャックハンターは怯えて後ずさった。

情に厚い穀潰しは善い人とは一味違い、ジャックハンターの方を叩き、ニヤツと笑った。

「大丈夫だ。腕は俺が何とかしてやる。」

ジャックハンターの目から怯えの色が消えて、希望にすぎた。

「本当か？」

「ああっ！俺たち仲間だろ？」

「へへっ！ありがとよ！おまえいいやつだな！」

ジャックハンターは、見る見るうちに明るくなり、生きる元気を取り戻した。

善い人はそれを見て、にこやかに笑った。

「どうやら、この私の善意が分かったようだね。」

穀潰しも善人としての分別が出て来てこの私としても心強いよ。」

それを聞いて、穀潰しはにやりと笑った。

「ひゃっは！潰れるランダムスフィア！」

内心穀潰しは腹が立ったらしい、善い人に向かってランダムスフィアを放った。

爆発性のある球状の複数の衝撃が辺りに散り舞う。

こういう狭い部屋でこのような大技を使われると、さしもの善い人も回避に精一杯だ。

善い人が、回避し、突撃を仕掛けようとした頃には、穀潰しとジャックハンターは消えていた。

善い人は、双剣をしまつと、無言でその場から去っていった。

善い人は、前回の巨悪の足取りに続き、今回の地震は人為的なものであると感付いていた。

その秘密がどこかに確かにあると。善い人は善の直観を頼りに、調査を進めることにした。

ところかわって。

しかしながら、今回の地震は、ガスにとっては、害兇に思い知らせる良い機会でもあったし、また大儲けする大チャンスでもあったのだ。

ガスは、住民が地下にいる間、いち早く崩壊した町の跡地に繰り出し、まだ使える家具などを全て回収した。

地震が起る直前や地震が起っている最中に実は、ある程度の回収はしていたが、全ては回収できなかったのだ。

ガスはプレオが破壊されたりと嫌な事も多かったが、これedyouやく元が取れると、ほくほく顔で商売をしようとした。。。

数日たって、ようやく地震も落ち着き、人々は復興に向けて動き始めた。

人々は恩知らずにも、ガスに対して、礼を尽さずに地下都市を去っていった。

それまで大威張りで人々を顎で使っていたガスは大いに不満を感じたが、
商売でまた取返せばいいと考えていた。

ガスの店が開くと、人々は、大勢ガスの店に集まった。

人々がその商品を見てみると、なんと自分たちが使っていた道具が売られているではないか。

これは、火事場泥棒に等しく、人々はガスに抗議した。

「よろず屋さん。これは私たちが使っていた道具類では？何故それをあなたが所持してて、
しかも売りに出しているのですか？これは泥棒ではないのですか？」
ガスはものの道理が分からぬ輩に一々真面目に受け答えする気力も起らなかったが、
仕方ないので簡潔に説明をした。

「吾輩は、地震の時にこれらの道具を回収し保管した。それだけで大変な労力であった。」

その働きの分の報酬が得れるのは当然である。」

それを聞いた住民Aはガスに抗議した。

「いや、よろず屋さん。それはおかしい。

なぜならその道具は私が自分で持っていていこうとしたら、自分が預るからいいといったではないか。」

ガスは、要求ばかりで礼も尽くさない、人々にはうんざりした。それでもガスは無視をせずに対応した。

「只で預かるとは言っていない。」

住民Aは、その情の欠片もない商人の言葉に怒りのあまり絶句した。

いかつい男の住民Bは、Aに代わってガスに抗議をした。

「このやかんは、俺が30年使って来たものだ！その付き合いは親子以上とっていいものだ！」

ガスは、だからどうしたという顔で答えた。

「なら買えばいい。」

住民Bは吠えた。

「金なんてねえ！」

ガスはぷいっとそっぽを向いて答えた。

「客じゃないなら去ね。」

「なんだと!?!」

ちなみにここで言うお金というのは、ヒノキ村自治区で通用できるGマネー（害児マネー）のことで、ガスが医者に渡したのは、そうではない、全世界に共通する硬貨であった。

この世界は、食糧は自動生産され、例えば地震が起きようが、この星に隕石でもぶつからない限り、あらゆる海底都市、地下都市から地上へ向かって食糧が運ばれてくる。

これは、コンピューターと念動力によって、自動的に行われるもので、

「SYSTEM」といわれている。

ヒノキ村自治区は、あえてそのシステムに頼らない地域（廃墟街）等あるが、基本的にはそのシステムの恩恵を受けており、別段お金など無くても暮らしていけるのだ。

家具などにしても、同じで自動生産させるが、愛着の問題はまた別であるし、新しいものは使い勝手も変わってくる。

特に、ヒノキ村自治区の人間は、システムに頼らず生活している人が主体となっているから、家具なども自分で作っていたりするのだ。

住民Bが言っていた親子以上の関係というのは、あながちおおげさな表現でもなかった。

激昂した住民Bに胸倉をつかまれたガスは、冷静にガスを吹きかけた。

住民Bは、すぐに崩れ落ちた。

それを見た人々は最早我慢がならなかった。

「こいつやりやがった！」

誰かが叫んだ。

人々に塊に向かって、ガスは大喝した。

「ただ眠らせたただけだ！一々騒ぐでない！
貴様らは吾輩の懐を儲けさせていればそれでいいのだ！」

あまりの言葉は、人々は一気に殺気立ち、しかしながらガスを食らわされてはたまらないので、
口論で、ガスを追い詰めようとした。

激論となり、ガスも口調激しく、主に人々の恩知らずっぷりを非難したが、突然後ろから殴られ、
ガスは後ろを振り返った。

「なにをするか！今吾輩の頭を殴ったものは誰であるか！」

そうだった、矢先また背後よりガスは頭を叩かれた。

ちなみにヘルメットをかぶっているから、そんなにダメージは無いが、敵もさるもので、

今度は棍棒でガスの頭をぶっ叩いたのだ。

ガスはガンと頭に響いたが、棍棒を持っている住民を発見できた。

「見たぞ！吾輩を攻撃するとはどういいう見であるのか？」

人々の勢いは止まらず、ガスの後ろから頭を叩きまくった。

「う、うわー！やめてくれー！」

ガスがうずくまって丸々と、人々は暴徒と化して、思い思いの棍棒で、ガスの体をぶっ叩いた。

ガスは、静まり返り、人々は気分悪そうに、ガスから品々を取っていった。

それを遠くで見ている、害児は、ガスが完全に無力化すると、黒服を連れて、ガスの側に移動をした。

「ゴミ虫にしては良くやった方だったが、こんなものだろう。おいっ！」

害児は黒服に合図をした。

「ははっ！」

黒服は、鎖でガスをぐるぐる巻きにして、人々によく見える様に、見せしめにしながら、城に連れて行った。

ガスを嚴重に監禁しておいて、害児達は、ガスの地下都市に出向き、その中にある、物資を根こそぎ奪っていった。

「首領。もうほとんどめぼしいものはありません！」

「なら、今回の震災で出た廃墟物でも詰め込んでおきなさい。ゴミ捨て場に最適でしょう。」

「なるほど。さすが首領。」

黒服は、町で出たゴミを地下都市に詰め込み、次の命令を害児に伺った。

「次はどうしましょうか？」

「これでよろず屋はもういいでしょう。彼が馬鹿で私としても助かりました。」

しかしながら、今回の地震については私たちでも腑に落ちない部分があります。諜報部からの情報はまだでしょうか。」

「はっ！」

黒服は無線でサイキック兵器（テレパシー）による電話。今後念電話と書きます。）で、

情報を確認した後、害児に報告した。

「どうやら、サイキック組織に新しい動きがみられました。」

害児は、それを聞き、果してと思った。

「ほう！やはり動きましたか！その辺りが怪しいと思ってました。あの組織が相手となると、私たちも只ではすみませんね。・・・まさかと思いますが、彼女が動いているのですか？」

害児は、例え誰が動こうと滅多負けない自信があったが、唯一この人物だけとは、正面切って戦えないという人物がいた。

それがサイキック組織と関わりある人物であることは言うまでもない。

黒服は害児の質問に答えた。

「今のところ動きは見られないようです。」

害児はむっとした。

「今のところとはなんですか？もっと確実な情報をよこさない。だがまあいいでしょう。恐らくこんな程度の事で彼女は動かないでしょうから、

私が自ら動くとしましょう。それが一番確実です。」

黒服は、害児が自ら動くというので、心配になった。害児は常に前線に出たがるのは、

昔からの付き合いで知っているが、今回の相手はちと分が悪いよう

に感じた。

「首領。首領の意見はごもつともですが、相手のサイキッカーは相当の手練れで、
どうもサイキック組織全体での戦闘能力で比較して、三番目に強い使い手みたいです。」

害児は軽く首を振ってこたえた。

「いや、その程度なら問題ありません。念の為善い人さんをつれていきましよう。」

この私が、彼女が軍事国家の武神以外に負けるはずがありません。」

害児は二人の名前を挙げたが、そうなると、

はったりでなければ、害児自身の戦闘能力もよほど高いことになる。

黒服は善い人を連れていくと聞いて安心した。

「善い人様なら、何の問題もなくやってくれるでしょう。」

害児はにんまりしてそれに答えた。

「まあ、この私に掛れば、ある程度の人物を操作することなど、兎戯に等しいことですよ。」

ふふふ……！」

不敵に笑った害児はそのあと、高らかに笑った。

「はーっはっはっはー！さて、では参りましようか。」

途端に冷静になり、害児達が城に戻ったところ、ガスはとつくの昔に抜け出していて、自分の店に戻っていた。

丁度害児達が去ったすぐ後くらいに、ガスは地下都市に到着した。

「あ、あ、あ、あ……。」

ガスは、自分の地下都市がゴミだらけになっていてしかも自分が長年研究してきた数々の成果、物資が全て奪われてるのを見て、絶句した。

「あああああー！ー！ー！」

ガスは髪をかきみしりゴロゴロと床に転がった。

「おのれおのれおのれえええー！ー！」

一頻り絶望した後、冷静になり、地図をぱつと広げた。

「ふん！害児のやつ！吾輩の拠点がここだけだとも思ったのか！まだまだ吾輩の地下都市は無数にある！とはいえ、一番の前線拠点が潰されるとは……！」

最新の技術が全てとられてしまったことは、ガスにとって大きな痛手であった。

ガスはこの世界では、随一の頭脳の持ち主で、いろいろなことに伝手があり、

ここヒノキ村自治区が、守られているのは、彼の頭脳によるところ

も大きかった。

元々ヒノキ村自治区とは、自然発生したものではなく、軍事国家に所属していた、

ルーファ・ルーファス（後の害児）が作ったものであり、軍事国家を裏切った害児は、

そのため、彼らに狙われていた。

この地域は、「SYSTEM」を拒絶し、闘争と欲望とに刺激され集った人間が多い。

この世界で最も過酷な地域だが、一部の人はそれを望み、ここヒノキ村自治区にやってきた。

ヒノキ村自治区は、「SYSTEM」と敵対している立ち位置なので、「SYSTEM」側としても、面白くは無い存在だろうと思う。

ヒノキ村自治区にてきは多かった。

しかも、こんな内部争いは絶えない。元々それが好きで集まった連中なのだから。

ともかく、ガスは、この地下都市を捨てるのはもつたいないと判断したので、

ゴミを外に出す作業を繰り返していた。

そんなガスの行為に、周囲の住民は迷惑した。

折角ごみが無くなったのに、よろず屋がまた、ゴミを地上に出して

いると。

「SYSTEM」に頼れば一発なのだが、彼らはあまりシステムに頼ろうという気持ちが無かった。

とはいえ、日常茶飯事に使ってはいるのだが。

しかし、ガスは例え正気を失っていても、

秘蔵の地図を人前で何の準備もなく出すような油断をするべきではなかった。

悪意のある黒い影がしっかりとその地図の写真をとっていたからであつた。

そして住民は結局、害児にガスの迷惑行為を何とかしてほしいと通報し、

害児達はまたもやガスの店にやってきて、文句を言った。

「ガスさん。困りますねえ。こんな風にゴミを巻き散らかせては！町の住民が迷惑しています。」

この町はあなただけのものではないのですよ？」

ガスは、全てお見通しであつたので、白々しい害児の横つ面を発飛ばそうかと思つたが、ぐっところえ、むっとして発言した。

「すぐに片づける！」

害児は、後ろの黒服達と視線を合わせて、やれやれといったポーズでガスに尋ねた。

「私たちも手伝いましょうか？何しろこんなスローペースではいつになるか分からないし、

このような薄汚い場所があつては、みんなが迷惑します。」

ガスは歯をむき出しにして、一喝した。

「いらん！」

害児はゴホンと一つ咳をして、落ち着いた様子で通告した。

「では、今日、日が沈むまでに片づけておくように。

そうでない場合は、このゴミはみんなあなたのため地下都市で保管して貰うこととなります。」

それを聞いたガスは、突然男泣きに泣いた。

「うおおおー！おのれいつか見ておれ！」

それを見た害児達は皆にやにやした。

「ふふふ……。自業自得でしょうに。」

そういつて、害児達は侮蔑の眼差しをガスに送りながら帰っていった。

調査を始めた善い人は、ハエとタンクに指示し、悪の根源を探すように命じた。

その後、廃墟街に赴き、主だった善人にも悪の根源を探すように依

頼した。

泣きつ面のガスにも頼んだが、ガスは地下都市の掃除が終わらないと逆に善い人に泣きついた。

善い人は仕方なく、一緒に作業をしてやり、おかげで、地下都市の掃除は終わった。

そんなおり、丁度掃除が終わったところ、今頃のこのこと、地下都市から穀潰しが現れ、善い人に話しかけた。

「よう！元気だったか？善い人さんよ。」

「穀潰しか。」

穀潰しの後ろには、両腕の無いジャックハンターも居た。

ジャックハンターは、しかし善い人の方は見ようとせず、逃げるようにして二人から距離を取り、様子を伺った。

「確かな情報がある。」

穀潰しはそう切り出した。

「俺はてめえの善行に散々付き合ってたな？」

だったらてめえは一つくらい俺の善行にもつきあってもいいはずだ。

「

「善い事ならそれをやるのが私の使命だけど、それを決めるのは穀

潰してはないよ。」

穀潰しは、そういわれてもにやつくだけで、気にも留めなかった。

「今回の地震は、十中八九サイキック組織が絡んでいるに違いねえ。俺はあいつらの思い上がりが我慢ならねえんだ。」

「君も多少は頭が回るようになったね。」

「まあな。俺だって馬鹿じゃねえ。場所も大体見当が付いている。」

突然、空間に亀裂に入り、その後ろから声が聞こえた。

「ほほう。ナンバーズにしてはやるな。」

「なに？」

穀潰しは慌てた。善い人は善の直観で、亀裂に悪を感じ、一瞬のうちに関合いを詰め、出てきた人物の顎を蹴り上げた。

「ふぐああー！」

出てきた人物は、蹴り上げられた後、善い人は浮かび上がり、踵落としを喰らわせ、地面にたたきつけ、槍を構えて狙いを定めた。

槍は、出てきた人物の片手を吹き飛ばし、出てきた人物は苦しみ、地面を転がる。

「ぐおおお……！！」

善い人は追い打ちをかけるべく、大剣を振りかぶったが、レポートによりその人物は逃げていった。

穀潰しは、ごくりと生唾を飲んだ。

「ア、アキラだ。ネーム「アキラ」！」

ガスは尋ねた。

「知っているのか？穀潰し。」

「ああ。善い人の奇襲で退いていったが、本来なら俺達4人掛りでも勝てる相手じゃねえ。

サイキッカー組織の凄腕だ。まさかあいつが絡んでいたとはな……」

穀潰しは暗い顔をした。ガスは努めて明るく言った。

「だが善い人君が追っ払ったじゃないか。きっとあいつは見かけ倒しで弱いだけだろう？」

とはいえ、ガスはその姿はほとんど見ていない。ここにいる誰もがそうだった。

当の善い人すら、何か居た程度で、顔すらもはっきりわからない。その中で、穀潰しがその人物の名前を決めつけられるのが不思議だった。

「おい。話してるところ悪いが。どうしてお前はあいつがそのアキラってやつだと思ったんだ？
一瞬しか出て来なかったぜ。」

両腕の無いジャックハンターが話に入る。穀潰しは答えた。

「あいつの服は特徴的だからな。あんな服はあいつしか着ねえよ……。

それよりこれからどうするかだ。いいか。みんな良く聞けよ。

やつは「催眠」に特化したサイキッカーだ。その攻撃は強力で、物理攻撃なんて話にならねえ。

何しろ脳波だからな。俺達の攻撃が届く前に、こっちがおだぶつだ。しかも上位のサイキッカーだからレポートも自由自在だ。

遠隔催眠なんてものもできる。奴がその気なら、俺達は既にみんな操られていることだろうぜ。」

「な……!」

両腕の無いジャックハンターは恐れた。

しかし彼はそれ以上に、いつの間にか自分が穀潰しの仲間扱いされていることに驚いた。

彼はこのままでは自分も危ないと思い逃げるそぶりをしたが、すぐに穀潰しはそれをとがめた。

「無駄だぜ！お前はもうアキラに敵対者として認識されちゃってるからな！

だったら俺達と一緒にいた方が良い。」

「うわああ!」

両腕の無いジャックハンターはうめいて、地面にころころ転がり出した。

ジャックハンターの錯乱をガスと穀潰しは冷静に見守っていたが、やがてガスが穀潰しに話しかけた。

「どうやら、善い人君は既に行ってしまったようだな。果して一人で大丈夫なのか？」

「まあ……。大勢で行っても仕方ねえぜ。善い人は当て馬になつてもらおう。」

わざわざ俺たちが出向く必要も無ければ、善い人の野郎を手助けする義理もねえ。」

「非情であるな。」

穀潰しを非難するガスであったが、

その割には自分も善い人を助けようとは露程も思わない様子だった。

蠢き喚き散らす両腕の無いジャックハンターをしり目に、

二人はのうのうと自分達のみが助かるような策を地下都市で考えることにしたのであった。

第九幕 討伐 サイキツカーアキラ

あらすじ

善い人ら率いる善人達の活躍で窮地は切り抜けた。が、それは一時しのぎに過ぎなかった。

巨悪の根源を叩かなければ、またいつでも同じことの繰り返しになってしまうだろう。

義憤に震えた善い人は、無謀を承知の上で、巨悪・サイキツカーアキラを打倒せんと心に誓った。

登場人物

善い人

白い帽子、白い服に身を包む真の善人

穀潰し

青いつバ付帽子に、青いジャケットを着こんでいる最下級の善人

ガストラゲタ

暴虐の限りを尽くした商人だが天罰が下った

害児

善い人の同志

腕の無いジャックハンター

下っ端善人

サイキツカーアキラ

サイキック組織の凄腕サイキッカー、実力は未知数

善い人は駆けた。全力で駆けた。巨悪のサイキッカーアキラを倒す為であった。

そんな善い人の前方に善い人の見知った人物が現れ、善い人は足を止めた。

害児であった。

害児は、大得意で善い人に教えてあげた。

「聞いて下さい！善い人さん！私はついにやりました！巨悪の情報をキャッチしたのです！」

善い人の眉毛がぴくんと動いた。

「邪魔だよ。」

大剣を振って害児をどかし、そのまま駆け抜けていく。

「うわっ！危ない！ああっ！善い人さん！待ってくださいあい！」

害児は車いすのジェットをふかしてしつこく善い人を追いかけた。

またもや善い人を囲むように人影が何も無い空間から突然現れる。

「くくふははは！どうやらお前がアキラ様に敵成す敵のようだな！」

計5人。テレポートで移動してきたことから、全てサイキッカーと思われた。

善い人は問答無用で斬りかかるが、テレポートで避けられてしまう。

「無駄だと言っておろうが！」

サイキッカーたちは、衝撃波を放つが、善い人は、素早く移動し、それを回避する。

「なに？メトリーが出来ない！まさかサイキッカーか？」

善い人は剣を構えた。

『斬る！Z斬り！』

「ちっ！」

善い人の不可思議な動きに翻弄され、

3人のサイキッカーがはずたずたに切り裂かれ戦闘不能になる。

驚きをあらわにする。残ったサイキッカー2人だが、目配せして、

テレパシーでの会話をする。

（メトリーが効かないみたいだ！上位のサイキッカーに違いない。ここは体術で一気に追いつめるぞ！フォーメーション だ！）

（おう！）

サイキッカー2名は、瞬時に念話をし、善い人が3人のサイキッカーを斬っている間、充分に距離を取った。

その後、多重のテレポートを繰り返し、まるで残像が幾重にも取り巻くように、展開した。

善い人は、剣を捨て、目をつぶり静かに槍を構えた。

（いまだ！）

サイキッカー達が善い人を挟むように、円の動きから突然善い人に接近した。

しかし、そこに善い人の姿は既になく、サイキッカーの攻撃は空振りした。

「なに？」

なんと、サイキッカーのうち一人は、攻撃の瞬間間合いを詰められ、善い人に蹴飛ばされた後だった。

そして、善い人を探すべく周囲を見渡していたサイキッカーの背後の善い人は出現した。

『ガトリングランス！』

「うおおおお！なんだこれはー！」

槍の突きの多連攻撃を、腕を交叉して、防御するサイキッカー。思うように、思念が動かず、翻弄される最後に残ったサイキッカー。もはや打つ手なしを観念をした。

「吹き飛べ！飛び槍！」

「うーわー！」

ガードごと貫き、槍が突き刺さったサイキッカーは天へと飛んで行った。

ようやく、善い人に追いついた害兇は、愕然とした。

「なんて強さだ……。まるで化け物……。はっ！善い人さん！大丈夫ですか！」

その声を無視して、更に駆けていく善い人。負けじと害児は善い人の後を追った。

「どうやらここが敵が拠点にしている町のようです。善い人さん。気を引き締めて行きましょう。」

あれから善い人と害児は協力して、サイキッカーを撃退した。

そして、ようやく敵の拠点の町に到着したのであった。

そんな善い人達の前に、新たな敵が現れる。

それは、町の住民らしき、連中で大人数でぞろぞろと出て来て、手には棍棒を持っている。

善い人達に対して敵対心丸出しで、今にも襲い掛かってくる気配だ。

害児は、善い人に耳打ちした。

「善い人さん。どうやら彼らはこの町の住民で操られているようです。」

サイキッカーアキラを倒せば、彼らの洗脳は解けるでしょう。」

善い人は害児の言葉を無視し、住民に向かって大喝した。

「この私の善行を邪魔するものは許さない！」

『蹴散らせ！旋槍！』

無表情な人々は果敢に善い人に挑んでいったが、それら全てが上空に吹き飛ばされる。

そのむごいありさまを見て害児は目を覆った。

「なんてむごい！まるで鬼だ！」

そんな害児の叫びも無視し、どんどん善い人に蹴散らされる町の人達。

しかし倒せど倒せど、町の人々は立ち上がってくる。

「まずい！肉体の許容量を超えて戦わされている！」

善い人もさすがに手加減してるが、あのままでは、住民を殺しかねない！」

善い人に限って殺しはしないと害児は思ったが、確定ではない。

「こうなれば私が幻術を使うしかないか……。」

害児が、車いすから立ち上がり、電動の義足を付ける。

この電動の義足はスーパーコンピューターが内蔵されており、かつての害児の動きの9割方を再現できるのだ。

これにより害児は、最も得意とする体術、「幻術」を扱うことが可能となる。

害児が、電動義足のスイッチを入れようとした直前に、住民の動きが全て止まり、眠ったように動かなくなった。

「なに？殺した・・・？いや気配はある。何が起こった？」

害児は、狼狽した。まだスイッチは入れていない。

善い人も、突然のことで、立ち尽くしている。害児は善い人の側によつて、質問した。

「善い人さん。あなたが何かしたのですか？・・・ともかくアキラを探しましょう。」

もしかしたらアキラが催眠を解いたのかもしれませんが。」

善い人は、無言のまま動かない。

「どうしたのです？今がチャンスですよ。さあ早くアキラを探しましょう。」

「悪い風が吹いている。」

「え？」

善い人が突然意味不明な事を言い出す。

「ふ……ふははは！わっはっはっはっはー！」

空間に電撃が走り、その裂け目から人影が現れる。

善い人は、ゆっくりと大剣を抜き、構える。

「アキラか。ようやくお出ましですね。」

害児も、銃を構えて、アキラの出現を待つ。しかし害児はここで疑問に思った。

電光石火、先手必勝の善い人にしては、珍しい立ち上がりだと。

その害児の疑問は悪い形で、具現化した。

出てきた相手はアキラではなく、もっとたちの悪い相手だったのだ。

実際のところ、当のアキラは今町を留守にしていた。

エリート意識があり自尊心が高いアキラはやられっぱなしで引き下がる男ではなかったのだ。

「久しぶりだな。ナンバー6。」

「ア、アキラ！てめえ！善い人とは会わなかったのか？」

穀潰しは冷や汗を垂らしながら、アキラと対面していた。傍らには、ガスと両腕の無いジャックハンターも居る。

「善い人？なんだそれは？知らんな。さっそくだが、催眠を使わせてもらおうか。」

そういつて、アキラは穀潰しに手をかざした。

穀潰しは、催眠にかかる前に、アキラを挑発して、自分達に向かっている矛先を
善い人に向けるべく頑張った。

「はっ！しらねえのかよ！善い人ってのはさっきお前がコテンパンにやられた相手の名前だぜ！
いいのか？俺達なんかに構っていたら善い人の奴に逃げれるぞ！」

穀潰しは生き残りに必死だった。

「それがどうした？だからといつて、俺が今お前に催眠をかけない理由にはならんぞ。」

穀潰しは、駄目かどがっかりしたが、最後に思い切って抗議をした。

「そりゃ暴力だぜ！俺達みたいな雑魚相手に、そんな手段で勝つてうれしいかよ！」

アキラはその言葉にむすつとした。

「俺がナンバーズ如きに後れを取るわけがない。俺はネームアキラだ。」

そこまでいうなら、催眠は使わないでやろつ。
だとしてもお前たちに勝ち目があるとは思えないがな。」

アキラは、まんまと挑発に乗り、穀潰しは内心ほくそ笑んだ。
催眠さえなければまだ勝機があるからだ。

穀潰しは腕を組んで事態を静観していたガスと、両腕の無いジャックハンターと作戦会議をした。

「まともによっても勝ち目はねえ！勝ち目があるとしたら、俺の
技だけだ。」

二人は、奴に接近して、ひっきりなしに攻撃を仕掛けてくれ！その
間に俺は力をためる。」

ガスはうなづいた。ジャックハンターは弱音を吐く。

「俺には武器がねえ……。これじゃ戦えねえよ！」

そこで、アキラが一堂に話しかけた。

「俺はいつまで待てばいいんだ？そろそろはじめてくれないか。」

どうやら俺の拠点としている町が騒がしくなってきたような
でな。」

ガスは、アキラに質問をした。

「一つ聞くが、地震を起こしたのは、諸君らであるのか？」

「いや……。俺達はただいやみ博士に雇われたただだ。本当の黒
幕はいやみ博士ぞ。」

だがそんなこと知ったところで大した意味はない。

お前たちは捉えられて、組織の研究材料として生きるのだからな・・・」

ジャックハンターはいやみ博士と聞いて驚いた。

その話が本当だとしたら、自分はアキラとは敵ではなくて、味方だからだ。

「おい！あんた！俺はいやみ博士の組織のものだ！嘘じゃねえ！だから見逃してくれねえか。」

そういつて、ジャックハンターはよたよたとアキラに近づいていった。

「見苦しい！」

そういつて、アキラに蹴飛ばされるジャックハンター。

「な、なんで・・・。」

蹴飛ばされて啞然とするジャックハンターにアキラは答えた。

「知った事か！俺は仕事でここにきているだけだ！貴様が誰かなど興味はない！」

『潰れる！サイココメット！』

隕石程の質量がある、衝撃波の塊が、アキラを中心に押しつぶす。突然の穀潰しの攻撃だが、アキラは騒がずテレポートをし、その攻撃を回避する。

「ちくしょう！」

「残念だったな。ナンバー6。俺とお前とではメトリー能力に圧倒的な差がある。」

お前の行動など手を取るようにわかるのだよ。だから言っただろう？ お前は俺には絶対勝たないよ。」

そういつて、アキラは穀潰しに接近し、手を高くあげると、穀潰しが宙に浮いていく。

そのまま、アキラは空中に飛翔し、アキラの周りに、穀潰しの体が回転する。

「うぐああ……。」

或る程度たつたところで、地面にたたきつけられる。穀潰しは虫の息だが、自己再生ですぐに復活する。

「相変わらず、頑丈さだけはあろうだな。」

「うおおおお！」

ガスが自分の体に火をつけ、突撃を仕掛ける。

「ガス・フェニックス！」

アキラは、体をひよいと横にずらし、その攻撃をかわす。ガスはずぎあぁーと地すべりしながら、動かなくなる。

アキラはその様子にあきれ果てた。

「なんだあれは？ナンバー6。あいつは頭がおかしいのか？それとも馬鹿なのか？」

穀潰しはにやりと笑った。

「サイキッカーは、自分を優れたものだと思い込みすぎるくらいがある。」

それが時に弱点となることもあるんだよ。」

「なに？どういうことだ？それは……。ぐっつっ！」

突然アキラが膝をついた。

「いけ！ジャックハンター！体当たりだ！」

「ハッハー！ジャックハンター！」

ジャックハンターは、弱っているアキラに、ジャンピング頭突きを喰らわせ、その後蹴飛ばし、アキラははじけ飛ぶ。

『潰れる！ランダムスファイア！』

「ぐおおおお！」

しかし、穀潰しのランダムスファイアは発動しなかった。

なぜならその前にアキラに催眠をかけていたからだ。最早約束もへたくれも無かったが、

約束を守って負けてしまつては本当にただの馬鹿に成り下がつていただろう。

「く……。毒か。やつてくれたな。鎧男。この代償は高くつくと思え。」

アキラは、ガスの方を振り返るが、既にガスの姿はなかった。

「逃げやがった！あの野郎！」

そういつて、怯えて縮こまっているジャックハンターの元にアキラはつかつかと歩み寄った。

「や、やめてくれ……。俺はあいつらに脅されて戦っていただけなんだ。」

なあ、いいだろ？見逃してくれよ……。」「

「貴様のような、小者一匹いなくなったところでどうということもない。」

「じゃあ見逃してくれるのか!」

ジャックハンターの顔色は一気によくなった。が、現実はそんなに甘いものではなかった。

「だがそれ以上に、貴様如きにこのアキラが蹴飛ばされたことが我慢ならん。

貴様はどうあっても、俺に捕まる運命だ。」

絶望に満ちたジャックハンターは一矢報いる為、大声を出してアキラに抗議をした。

「見逃してくれないなら紛らわしいことをいうな!」

「言いたいことはそれだけか?」

「ぐう!無念!むねん!ー!ー!」

ぱたりと倒れて、ジャックハンターは動かなくなった。俗にいう死んだふりだ。

このジャックハンターは最後まであきらめない精神力を持っていたから、

こういう状況でも活路を見出そうとした。

だからこそ、散っていったジャックハンター達の中で、最後まで生き残ったのだらう。

だが、しっかりとアキラにその後催眠をかけられたので何の意味も

無かった。

害児は、恐れ慄いた。

闇から出現した相手は、アキラなど比較にならない程の恐ろしい相手だったからだ。

その者は、害児が恐れているサイキック組織の長、テンマ・トキトだった。

姿格好は、害児よりはるかに年下どころか、善い人よりも年下に見える。

女性というよりは少女、いや女の子といった方が正しいだろう。

ただし、目は片方が義眼で妙な機械が取りついており、片手はやはり奇妙なギミックが付いている。

それだけで、ただの女の子ではない事が充分分かる。

そして、その圧力は、とても年相応のものではなかった。

「何やら楽しいことをやっているようだなあ！私も混ぜてくれないか？」

「く……！善い人さん！逃げましょう！彼女を刺激してはまずい。」

勿論善い人は聞き耳を持つわけがない。

「わ、私は忠告しましたからね。」

そういつて、害児は一人逃げようとするが、闇に包まれ元いた位置に戻されてしまう。

害児はたったそれだけで逃げることを諦め、意気消沈してしまった。

善い人はテンマに尋ねた。

「どうやら、あなたは悪人みたいだね。」

「お前が、善人伝説の試作品だな？私を愉しませてくれようか。」

善い人は問答無用で、テンマの体を横なぎに一閃する。

テンマの体は真っ二つになるが、すぐさまくつつき再生する。

「エレファントクラッシュ！」

善い人は大剣を体ごとぶつけるように、テンマに向かって大技を繰り出した。

大剣は、唸りをあげ、テンマに襲いかかる。

テンマの体は木端微塵になるが、やはり再生し、何事も無かったかのように元に戻る。

害児は、車いすに座りこんで戦いを観戦していた。

「穀潰しさん以上の再生力だ。しかし、善い人さんも善戦している。」

「

善い人は、再生能力におびえることなく、果敢に攻撃を加える。

「ガトリングランス！」

「ダークプラズマ！」

テンマが、ギミックを一閃すると、空間が歪み、電撃が辺りを散り場う。

善い人は、一度距離を取り、弓を構えた。

「ダブルボーガン！」

矢は、テンマの体に突き刺さるが、何にもならなかった。まるでゾンビだ。

「だめだ。やっぱり善い人さんでは、次元が低すぎてトキトにダメージを与えません。」

テンマは、平然として戦っている善い人の攻撃を丸無視して害見に話しかけてきた。

「ルーファよ。お前はこないのか？」

害見は狼狽した。ちなみにその間にもテンマは善い人から攻撃を受けている。

「私が？あなたに？なぜ？そんな理由はありませんよ。ふざけないでいただきたい。」

「理由が必要か？」

「ええ。そうでしょう。私がどうしてあなたなんかと戦わなければいけないのですか？
意味不明な事をおっしゃらないでほしいですね。」

害児は勝てる相手には強気だが、実力が拮抗してる相手には勝てる
かもしれないのに、
極力戦いを避ける傾向があった。
現役を離れた害児はそこが弱点だったのだ。

害児は何とか難を逃れようと口先でテンマを翻弄しようとした。

テンマは意に返さず、善い人に助言した。

「善い人。その程度では私に傷一つ与えられないぞ。もっと善行を
心がけることよな。」

「なに？この私が善人ではないと？」

「だから、私にダメージを与えないのだ。真の善人になれば、そ
んなこともなくなるだろう……。
ふっ……ふはっはっはっはー！ではさらばだ。」

そういつて消えていくテンマに善い人は追い打ちをかけるが、無論
効果はなかった。

善い人は、自分は果たして善人なのかとこの時初めて疑問を持ち、
彼女にしては珍しく弱気になってうなだれていた。

害児も声をかけようとしたが、何と声をかけていいか分からなかった。

それに、まだ問題も残っていた。テンマはとりあえず撃退したが、アキラを倒さないことには、

今回の騒動は解決しない。住民が突然眠ってしまったのは、恐らくアキラではなく、

テンマの仕業だろうことは想像ついたが、

それならば、アキラのほうは、テンマのような酔狂ではなく、完全なる悪意を持って自分達と対峙するはずだった。

とりあえず、善い人がでくの坊になってしまったので、害児は幻術で、アキラの催眠の上から、

上書きし、住民を安全な場所に移した。

後は、アキラをぶちのめすのみであったが、場所がどうにもわからなかった。

そこへ、のこのこと洗脳された穀潰しとジャックハンターがやってきた。

ジャックハンターの両腕には、刃物がくっ付いている。

アキラが持たせた武器なのだろう。今後彼のことをジャックハンター改と呼ぶことにする。

穀潰しはにやつきながら、善い人達を挑発した。

「いいのか？俺達はアキラに操られているだけなんだぜ？

俺達は操られてるから、てめえらをぶっ潰すが、

善良なお前たちは俺達に攻撃できないだろうな！
ひゃっは！何しろてめえらは善人だからな！」

その言葉に害兇はたじろいた。

「くっ！卑怯な！これでは攻撃できません！」

しかし、善い人は冷静だった。

「穀潰しが善人を語るな。私は善い人だ。」

先ほどのテンマからの侮辱を払しょくするため、善い人は、思い切り穀潰しを蹴飛ばし、
続いて、口を大きく開けて慌てふためくジャックハンター改を蹴飛ばした。

その様子を影からこっそり見ていた、アキラは驚愕した。

「おかしい。何故あいつらには催眠が効かないんだ？相当上位のサイキッカーなのか……。

先ほどテンマ様も居たらしいが、奴らはテンマ様を撃退できるくらいの実力者らしい。」

アキラは、穀潰し達と善い人が戦っている間、遠隔催眠を善い人と害兇にかけていたが、
全く効かなかった。

そして善い人は、人質も聞かぬ外道であるとアキラは考え、八方ふさがりであった。

自分がこのまま出ていっても、負けはしないだろうが、苦戦は必至だ。

アキラの胸に不安がよぎったが、それでもでていけないわけにはいかなかった。

なぜなら、ここででていかなければ、職務怠慢としてテンマに何をされるか分からなかったからだ。

テンマの性格上何もしないとしても、彼はテンマに見限られることが怖かった。

だから、万が一負けたとしても、精一杯やれることはやったというアピールもまた必要だった。

アキラは不意打ちを防ぐため、意識を集中させゆっくりと善い人達の前に移動した。

近距離で催眠を当てれば、さすがに問題ないだろうと思ったからだ。

善い人と害児はアキラが近付いてきているのは分かっていたが、あえて手出しせず見守った。

先に口を開いたのは善い人だった。

「あなたが悪人のボスのアキラだね？」

「ああ……。ところで、お前は本当に人間なのか？とてもそうは思えない。」

なにしろ、メトリーすらできないのだ。アキラがメトリーすら出来ない人間などいるはずもなかった。

ちなみにメトリーとは、相手の思考を読むことで、

サイキッカーなら強弱の差はあれど誰でも使っているものだった。

しかしながら、穀潰しは使えないのだった。

害兇は、車いすにのったあと、アキラを非難した。

「随分と卑怯な手を使ってくれますね。貴方はそんなことで恥ずかしくはないのですか？」

「使える手なら何でも使うまでだ。これは試合じゃない。ルールなどあってたまるか。」

お前のような温室育ちのお嬢様には分からないことだろうがな。」

「ほほう……。この私が誰か知らないと見える。」

「なに？……そういえばどこかで見た顔だ。」

アキラが誰だったろうかと思ひ出そうとしてると、善い人が剣を構えだしたので、思考を中断した。

「なんだ？やるのか？見たところサイキッカーではないようだが、いくら得体のしれない力を持っていても、ネーム持ちに勝てるとは思えないがな。」

「あなたが悪人ならば、私はあなたを成敗しなければならない。それが善い人の定めだからね。」

アキラはそれを聞いてふつと笑った。

「善人が仲間を蹴飛ばすのか？笑わせてくれる。住民を蹴散らしたのもお前だろう？」

それで自分は善い人だとは、ふてぶてしいにもほどがある。」

「この私を謀略にはめようとしても無駄だよ。君はここで終る運命だ。」

「終っているのはお前の頭だ。どうやらまともな会話ができないらしい。」

アキラは善い人と対話して、ただの馬鹿だと見抜いた。これなら難なく勝てるだろう。

問題は、車いすの女性だった。勿論先ほどから催眠をかけているが両者何の影響もない。

普通なら絶望的状况だが、何もアキラの能力は催眠だけではない。ネーム持ちはナンバーズに較べあらゆる点で能力に秀でているのだ。衝撃波ですら、穀潰しを軽く上回っている。

勝負は一瞬で終わった。

アキラは善い人が既に接近してることすら知覚できなかったのだ。

アキラが気付いた時には、既に善い人に切り刻まれた後で、何が起ったのか分からず、混乱した。

「う？うおおおお！」

ようやく事態を把握したアキラは、斬撃から逃れ、逃げようと後ろを向いたところを、

善い人に蹴飛ばされ、サッカーボールのように転がっていった。

転がっていった先には、穀潰しとジャックハンターが気絶していた。

アキラはしめたと思った。彼らを人質にとる。今度は殺すと脅しをかけてだ。いくら非道な善い人でもこれなら立ち止まる筈だとアキラは計算した。

「いいのか！俺を攻撃したらナンバー6は死んでしまうぞ！」

「。ぺちやくちやうるさい！」

問答無用で、善い人に蹴り上げられ宙を舞う、死の恐怖を感じるアキラ。

善い人がアキラに言葉を放つ。

「私に数字の知り合いは居ないよ！」

アキラはその言葉に愕然とした。善い人のあまりの馬鹿さ加減にだ。こんな馬鹿が居るとはアキラには想像できなかった。

その後、まだ戦う余力はあったが、あまりのショックで現実逃避の為に気絶してしまった。

最早どうにでもなれといった心境だった。

害児が善い人に尋ねた。

「どうでしょうか？この人は。」

善い人は無言で武器をしまい、どこかへ去ってしまふ。

害児は一人になりたいのだろうと思いつつとしておくことにした。

巨悪アキラは倒せたが、しこりが残った。

善い人が真の善人たる自信を取戻す為には、更なる善行が必要なことはいうまでもないことだった

第十幕 善人集会

あらすじ

アキラを倒し、一連の騒動に善の終止符を施した善い人であったが、テンマ・トキトとの一戦を経て、自分の善への疑い残った。真の善人となるため、善い人の求道は続く。

登場人物

善い人

真の善人になる為、善行を続ける善人

穀潰し

操られたふりをしていたため、善い人に成敗された愚人

ガストラゲタ

一時は暴虐の限りを尽くしていたが、最近では改心し、まじめに商売をしているらしい

害兇

前回善い人と共に戦った善い人の戦友

ジャックハンター改

穀潰しと共に、操られたふりをしていたため、善い人に成敗された愚人

サイキツカーアキラ

凄腕のサイキッカーだが、善人たる善い人に討伐され、今は害兇の城に監禁されている。

サイキックカートキト

善い人に前に立ちふさがり、善行を試してきた人物。
サイキック組織の長、テンマの称号を持っている。

いやみ博士

いやみをすることが生甲斐らしい。善い人とは対極の存在の巨悪。

用語解説

ナンバーズ

サイキック組織に所属しているサイキッカー達。数字の順列は能力とは関係がない。

ネーム持ち

秀でた能力を持つサイキッカーに与えられる称号。
過去のサイキッカーの英雄の名前を与えられる。

ゲノム戦士

いやみ博士の兵隊だが、戦闘用ではなく、遺伝子の可能性を追求している。

SYSTEM

意志のある超スーパーコンピュータを長とする集団。あらゆる物質・生物・エネルギーの情報を持っている、実質的なこの星の支配者。

善い人は、テンマから屈辱を受けて以来、一種、狂人となった。

今までも、充分そうであったが、活動に一層の狂振る舞いが目立った。

ある日、善い人は、集会を開いた。

名づけて「善人集会」という。

参加者は、
リダ中心の悪人グループ、大根切増、穀潰し、害児、ガス、タンク、
ハエ、黒服達、
ジャックハンター改、デビル、町の住民など、
錚々たる顔ぶれであった。

主に、害児によって収集させられた人であった。

切増は、悪人グループについてく感じで、
穀潰しとガスは、

テンマに叩きのめされた善い人がなにを言い出すのか気になりやってきたのであった。

ジャックハンター改はそのお供だ。

タンク、ハエ、害児、黒服達は言うも及ばず、善い人派の連中だった。

デビルも、お忍びでロープをつけてやってきたが、その実、善い人を心配していた。

善い人はこう切り出した。

「この私が、善人であることはぬぐいがたい事実だけど、私の教えを受けた善人たちが、うだつがあがらないものだから、この私にまで影響が出るようになってしまった。

みんなでもう一度善人とは何なのかについて考えてほしい。」

その善い人の近くでは、害児が辺りを睥睨していたので、穀潰しですら何も言うことはできなかった。

みな、思うところあり、思い思いに会場から去っていった。

デビルは、善い人にアドバイスをしようと、近づこうとしたが、害児に止められる。

「こらこら、なにを勝手に善い人さんに近づこうとしているのですか？

怪しい人ですね。善い人さんに用事があるなら私を通していただきたい。」

デビルは応答した。

「ふつ。なるほどな。だが、俺がロープを纏っているのは理由がある。

この俺の体はとても人が直視できるようなまともな体ではないのだから……。」

「そうと聞いて、この私がひるむとでも？
なにやら勘違いしているようですが、思い知らせたいのですか？」

デビルは、やれやれというポーズをとった。

「別にいいさ。ただ一言言いたかっただけだよ。他意はない。
それも適わないなら、俺はもう退散しよう。」

そういつて、デビルは踵を返した。

途中、黒服がデビルに問答を仕掛けた。

「おい。そこのお前。首領に対して恐れ入らなかったな？どこの国のものだ？」

「俺か？名もなき戦士といったところか。」

「ふざけるな！」

「ふざけてなどいない。ただ……ん？あれは善い人ではないか。」

「む？確かに善い人様だ。……貴様命拾いしたな。」

「ふっ。」

デビルは鼻で笑った。黒服達は気障で嫌な野郎だと思い、散っていった。

善い人はデビルが道端で待ち構えているのを見て、質問した。

「君は確か、デビルさんだったかな？」

「そうだ。最もそれは私ではなく、他のものがそう呼んでいるだけだかな。」

ところで私は、君に話しがあつたのだ。」

「なにかな？私は善い事をする事で忙しいのだけど。」

「君はこのあいだ、巨悪に敗れたそうだ。いや、善人にそういう試練はつき物だ。」

問題はその後どうするかだ。そうだろうか？」

「そうだね。君は中々の善人のようだね。」

「私の知り合いで、善人組織というものを結成しているグループがいる。」

もし興味があるのなら接触してみたまえ。

では私はこれで。また使命が同じならば出会うこともあるだろう。」

「とっ！」

そういつて、デビルは、空中に飛んで、消えていった。

「あの人空が飛べるのか。かっこいいな。」

そういつて、善い人はその姿をデッサンした。

デビルが助言した善人組織のことなどは、すっかりと忘れていた。

善い人が忘れても、善人組織のほうは、善い人のことを警戒していた。

自分達のほうが、先に善人としての集団を作っているのに、徐々に勢力を拡大している新興勢力が気にかかったのだ。

そして、その黒い噂も、勿論キャッチしており、もし、噂どおりだとしたら、善人全体の質まで疑われる由々しき自体だった。

そのため、善い人に対し刺客を放ち、噂が本当ならば、監禁すべし。という方針にまとまったところだったのだ。

デビルがそんなこと知るよりもないはずだが、そういう方針に決まった以上、

善人組織は必ず善い人と関わってくることになるだろう。

善人集会が終わった後、穀潰しは、アキラを解放するために、ガスなどに協力を仰いだが、芳しくなかった。

彼の目的は、サイキッカーの解放であった。

彼自身、無理やり能力を開発されて、憂き目にあっているのに、他の連中もそうに違いない。

と思えば、頼まれもしないのに、サイキック研究所を潰し回っているのであった。

穀潰しは、いたずらに日数を消化してしまっただが、最終的に、善い人に助力を請う事にし、家を訪ねた。

穀潰しは、家の前まで来て改めて考えた。

考えてみると、どうして穀潰しが善い人などに助力を請わなければならぬのだろうか。

しかし、彼は自分の使命を優先し私情を殺した。

ともかく、家をノックしてみると、家の中から、「は〜い。」という、善い人らしからぬ声が聞こえてきた。やがて、扉が開き、タンクが現れる。

見知らぬ人物の出現に、穀潰しは多少困惑した。

「何だお前は？ひゃっは！」

「ん？どなたかな？善い人ちゃんなら今いないよ。」

「なら待たせてもらおうじゃねえか。」

「どうぞ〜。私は用事があるからまた後でね。」

そういって、タンクはどこかに去っていった。

穀潰しは、しばらく、部屋で待っていたが、やがて、腹が減ったので、帰っていった。

次の日になって、穀潰しは早起きして、善い人の家に向かった。

今回は弁当持参だった。

家をノックしてみると、やっぱりタンクが出てきて、善い人はいないらしい。

「ところでめえは誰なんだ？まさかてめえが善い人ってわけじゃねえよな？

この俺を欺こうとしてもそうはいかねえぞ。」

「私はタンクだけど。善い人ちゃんに何か用事があるのなら、書置きしていったらどうか？」

「そうか。だが勘違いするなよ。てめえにいわれたからそうするわけじゃねえ。

俺だってそれくらい気づいていたんだからな。」

「じゃあまたね〜。」

そういつて、タンクはまたどこかへ出かけて行ってしまった。

「野郎。聞いてねえぜ。」

穀潰しは、善い人の仲間にはろくなやつがいねえな！とぶつくさいながら、

スプレーで部屋の壁に向かって、

穀潰し参上だぜ！ひゃっはだぜ！てめえに善い事をさせてやるついでことだぜ！

と書いて、去っていった。

家に帰ってきた善い人がそれを見て激怒したことは言うまでもなかった。

とはいえ、ここで怒鳴り散らしては人物の程度が知れているというもののので、
側にいて、あわわとかいっているタンクに向かって、静かに、話しかけた。

「タンクさん。どうも穀潰しは勘違いしてるみたいだね。
自分が善いことができるでも思ってるらしい。」

善い人は、ぎりつと唇をかんだ。

「どうも勘違いな輩が最近多いね！どうしても思い知らされたいと見えるよ。」

「そう思わない？タンクさん。」

タンクはビビッてへっぴり腰になりながら対応した。

「そ、そう思うよ。」

「これは試練だ！善人に対する挑戦だ！

穀潰しには一度、とことん思い知らされないと分からないのだろうね。」

そういつて、いらいらと善い人は、足踏みした。

「どこに住んでるか分かるの？」

「分かるよ。私の善の直感が正しい道を選んでくれる。よし……！
見ててね。タンクさん。私の善の力は正しい。」

テンマに負けて以来、狂ったように善行をし続けてきた善い人であったが、

そのアイデンティティを完全に取り戻すまでにはいたっていなかった。

どこか無意識に、やはり自分は善人ではないのでは？という意識があるのだ。

しかしこれも善人たるものの定めだ。

真の善人には、百難の試練があるものなのだ。

ともかく、善い人は、穀潰しの思い上がりをただし、これに天誅を加えるべく、

穀潰しの家に向かった。

穀潰しの家に向かう途中で、大根切蔵がによきつとわき道から出現し、

善い人のほうを見てにやりと笑って、大根をカブリを食べた。

「聞いてくれ。俺はお前の助言に従って、善の修行をした。」

「なに？」

善い人は猪口才な切蔵を問答無用で殴り飛ばす予定だったが、その

予定が狂った。

なぜなら、彼の口から善という言葉が出たからだった。

「おかげで、俺の殺人大根は芸術の域までいった。

お前にはいつも泥棒されて、参っていたが、今回の件があつて、帳消しにしてもいい。」

「なんだと？私は貴方を善人を認めた覚えはないが？」

そういわれると、切蔵はまたもやにやりと笑い大根をカプリと食べる。

「ククク……。俺が善人？俺は自分の技を極めること以外に興味などない。」

「つまり私に対する挑戦か？」

善い人はすかさずいった。切蔵が何のために善い人の目の前に現れたか知らないが、どうせ善人たる善い人を亡き者にしようとしてるに違いないのだった。

切蔵は、ばさりと、風呂敷のようなものを投げて、あたり一面中大根だらけにした。

「いいのかー！使わせちまってよオー。この俺の殺人大根をよオー。」

大根一つ一つに、切蔵の顔が彫つてある。これで目くらましをしよ

うということだろう。

善い人は、このような幻術など無視し、すぐさま切蔵に一撃を加えるべく、駆けた。

だが、大根の動きは単なる目くらましだけではなかったのだ。

「食らえ！ダイコメテオ！」

そう切蔵が言い放ち、風呂敷を一閃すると、宙に舞っていた大根は、善い人めがけて、一斉に、飛んでいく。

「貫け！ガトリングランス！」

善い人は四方八方から飛んでくる。大根全てを、貫き打ち落とす。槍にいくつか大根が刺さるがお構いなしだ。

「飛べ！飛び槍！」

その後、善い人は、小手調べに、力加減をして槍を切蔵に向かって投擲した。

切蔵は、くわつと目を見開くと、持っていた包丁で、槍を、微塵切りにしてしまった。

多少冷や汗が出たが、余裕の笑みをつくり善い人に向かってにやりと笑い、挑発した。

「どうした？ここまでか！善人！お前の最強の技でこい！」

「いいだろう！」

切蔵は、いつの間にか、地面に埋まっていた、巨大な大根を引き抜いた。

「これが俺の最後のダイコソードだ。この大根を超える大根を作る自信は俺にはねえ！」

善い人は、ゆつくりと大剣を構えた。

斬るというよりは叩くために作られたような、量産のきく鉄の塊だ。

「貴方の大根魂と私の善人魂。どちらが上回るか。勝負だよ！」

切蔵は、ゆつくりと、巨大な大根を振り上げた。

両者共に、上段より、切り落とす構えだ。

切蔵の頭の中に、この大根を作るまでの、苦労の日々が思い浮かんで消えていった。

先に動いたのは切蔵だった。小細工なしの一直線の直進だ。

「これが俺の・・・ラスト・ダイコ・ソードだ！」

振り落とす。同時に善い人も振り落とす。

「砕ける！エレファントクラッシュ！」

大根と大剣は、衝突する。

その勢いで、大剣は、ぎりぎりと言を立てながら削られていく。その勢いはすさまじく、切蔵の体は押される一方だったが、何とか踏ん張り大根を維持する。

削られた破片は、徐々に大根に突き刺さり、その耐久度を奪っていた。

やがて、大剣は、善い人の力に耐え切れず、ぽつきりと折れる。

切蔵は勝ったと思った。誰だってそう思うだろう。

自分の技が、善い人に届いたと知り歓喜した。

切蔵は、そのまま垂直に大根を振り落とす。そのまま振り落とせば、善い人に直撃だ。

だがそれは彼の妄想に過ぎなかった。

実際は、善い人は、大剣が折れた瞬間、瞬時にもう一本の大剣を構え、

今度は下から上へ振り上げたのだ。そのまま振り落とすのだ。

哀れ、ダイコソードは、二つ目の大剣の圧力に耐え切れず、

粉々になり、大剣はそのまま切蔵に直撃し、切蔵は声も上げずに、大根を撒き散らしながら、

上空へと飛んでいった。

「エレファントクラッシュ・ダブル！

これが……善い人の力だ！」

そういつて、善い人は、大剣を一閃し、大根のカスを吹き飛ばし、その後大剣を背中に収めて、その場を後にした。

一方そのころの穀潰しは、

「今日こそ、善い人の野郎に会わなきゃな。このままじゃ俺の立場がねえぜ。」

そういつて、家を出て行こうとする穀潰しを止める人物がいた。

「待て！」

「なんだ？」

ジャックハンター改だった。

「俺はいつまで、待ってればいいんだ？いつになったらこの俺の腕を直してくれるんだ？」

穀潰しは、その言葉を聞いて、大笑いした。

「ひゃっはっはっはっは……。はーっ！てめえは馬鹿か！わざわざ弱くなってどうするってんだ？あーん？ガ스에刀つけてもらったんだからそれでいいじゃねえか！」

「だがお前は俺の腕を何とかしてくれると約束したじゃないか！」

「ああそうだろうぜ。だからなんとかしてやっただろうが。そのど
こが気にいらねんだ？」

「お前にとつては、なんでもないことかもしれないが、俺にとつち
や一大事だ。

軽く考えないでくれ。一度約束した以上、どうあっても腕を何とか
してもらおうぞ！」

「てめえにそんな権利はねえ。」

「俺にくつついてる刀だって、錆びる一方だ。この錆が腕の部分ま
で来て、痛いんだ。

むしろ取ってほしいくらいだぜ。

それでも、お前が腕を何とかしてくれないというのなら、
恩人に向かって申し訳ないが、俺にも考えがある！」

「考え？」

にやりと穀潰しは笑った。

「お前にか？」

「ああそうだ。これ以上ケチるなら、容赦はしない。」

「ひゃっは！そうかよ！じゃあかかってこいよ！」

ジャキ！そういって、穀潰しはナイフを抜いて構えた。

「言ったな！後悔するなよ！ハッハージャックハンター！」

「潰れる！ランダムスファイア！」

ジャックハンター改が、腕をきらりと光らせ、近くにある木の枝を切ろうとしたところを、

卑怯にも穀潰しは狙い撃ちにした。

「ぐげえ……。」

哀れジャックハンター改は、一撃でノックダウンだ。

「なにがやりてえんだ？てめえは？ひゃっは！お気楽な頭だぜ。

土台、俺に勝とうつてのが無理があつたんだろうぜ！ひゃっはっはっはっは！

リベンジはいつでも受けるぜ！」

そういつて、穀潰しはひゃっはっはと笑いながら去っていった。

誇り高きゲノム戦士が、あんな小物に馬鹿にされるとは。ジャックハンター改は怒りのあまり涙した。

「うう……。いつそ殺せえ……。」

だがぼやいても現状が変わるわけでもない。

ジャックハンター改は、体が回復した後、何か決心した顔でどこかに去っていった。

善い人と穀潰しは、廃墟街で出会った。

「穀潰しだね？善の力受けてもらうよ。」

出合いがしらに開口一番、善い人は穀潰しにそう告げた。

「当たれ！ダブルボーガン！」

ボーガンから無数の矢が穀潰しに向かって飛んでくる。

完全に不意をつかれた、穀潰しは、ボーガンによる攻撃で蜂の巣になる。

やがて、穀潰しは、前のめりに倒れこんでしまった。

「・・・知ってるよ。そのくらいじゃ無駄なんですよ？」

善い人は倒れている穀潰しにそう尋ねる。

ああ・・・まあな。

風に声が乗り、そう聞こえた気がした。

「ひゃっは！この俺は不死身だ！」

ドカーンという派手な音を立て、爆発し、穀潰しが復活する。

善い人がさらに、槍を構え、突進する構えを見せるが、その前に、穀潰しの攻撃が発動する。

「潰れる！サイコグランド！」

地面から上空へ向かって、衝撃派の壁が、広がっていく。

だがこのサイコグランドの中心部には、穀潰しが立っている。

「見たか？これが完全なサイコグランドだ。中心部のみ空洞となり、安全地帯になっている。

俺は、お前に訓辞を受けてから、独自の修行をし、この技を体得するにいたったというわけだ。」

これでは善い人は近寄れない。まさしく、無敵の技だった。

しかもこのサイコグランドは、ゆっくりと展開しており、中々効力が消える気配がない。

試しに、善い人はボーガンを放ってみたが、一瞬のうちに矢は溶けてしまった。

「善い人。てめえに一つ言っておくが、俺にやつ当たるのは筋違いつて言うものだぜ？」

今てめえは、善い事をしないとイケないんじゃないのか？

俺がその善いことつてのを手伝ってやるうといってるんだぜ？」

「穀潰しが善を語るな。」

「まあ聞け。」

どうやら、このサイコグランドは善い人と話をするために、展開してるものらしい。

「お前が、この前戦ったサイキッカー。名前をアキラという。お前が負けたテンマの手下だ。」

だが、それが何だ？捕らわれて拷問を受けている、という事実に変わりはねえ。

俺だって、あいつにはひどい目に合わされたぜ？

だが、そんな私情を乗り越えて、

俺達はいいつを解放しに、害兇の城に向かおうとっているんだ。違うか？善い人。」

善い人は腕を組んで、考えた。

「私は確かに善い事をしないといけない。」

猪口才でレベルの低い穀潰しの言うことを聞くのは、癪に障るけど・・・。」

穀潰しはここぞとばかりに、正論を吐いた。

「だが俺も私情を押し殺して、善い事をしようとしているのだ。」

善人であるてめえが、私情を押し殺すのは当然だと俺は思うがな。」

「そうだね。確かにその通りだよ。穀潰しにしては、ましなことをいったね。」

「ああ。俺だっていつまでも馬鹿じゃねえ。お前の教訓を聞いて、目覚めたぜ。」

穀潰しがそういい終わるころには、すでに、サイコグランドは消失していた。

ずいぶん長い展開であったが、穀潰しがこのような調整ができるとは、正直驚きであった。

善い人は、衝撃波が消えたことで、反撃のチャンスができたが、最早反撃しようという気は起こらなかった。

「穀潰しが善人として、自覚ができてくれて、私としても助かるよ。」

私は善人として完璧なのに、周りの人がいつも私の足を引っ張るんだからね。」

穀潰しはそこでにやりと笑った。

「ああそつだな！まったくその通りだぜ！ひゃっは！潰れちまえ！」

穀潰しは大声で、吐き出すようにしていった。

こうして、二人は協力して、アキラを救出すべく、害兎の居城へと向かった。

第十一幕 善の教え

あらずじ

善い人は、狂乱した。その余波は、善い人の周囲にまで及んだ。周囲の人物達は、善い人の言葉により、着実に善人に目覚めていく中、善い人は未だ、自身に対する善の確信が得れなかった。

登場人物

善い人

善の確信を得るために、模索している最中

穀潰し

善人集会以降、善人に目覚めた。

ガストラゲタ

テナマに敗れた、善い人のことを心配しつつも、自身の商売に精を出しているらしい。

害兇

アキラを監禁している、悪の首領

大根切蔵

善人集会以降、善の修業を果たし、覚醒したが、善い人に敗れる。

ジャックハンター改

善人集会の教訓を活かせず、穀潰しに挑むが破れ、その後、猛省し、善い人の教訓を活かす努力している。

デビル

多少善の心得がある先輩として、善い人を指導した後、どこかへ消えていった。

サイキッカー・アキラ

催眠の使い手、ネーム持ち。サイキック組織ナンバー3の実力を持つ男。

今は、害児の居城に監禁されている。

善い人と穀潰しが手を組んだことは、勿論害児には筒抜けだった。

害児は、その情報を知ったとき、慌てふためき、一頻り阿鼻狂乱したあと、

部下の黒服達に向かって、わめき散らした。

その様子を怪訝に思った、アキラが、応接間に下りてきて、害児の様子を伺った。

隠れて、様子を伺うアキラを目ざとく見つけた害児は、ずかずか車椅子を転がして近づいてきて、アキラに文句を言った。

「やってくれましたね。アキラさん。どうやら貴方はとんだ疫病神だったらしい。

テンマに対する牽制になるかと思ったら、大して役に立たないし、貴方は本当に、あの組織の実力者なのですか？」

アキラは、本当に自分はサイキック組織の実力者なのかどうか、自分でも疑わしくなってきた。

ここでの、アキラの待遇は、まったく悪くないが、超能力は封じられているので、

彼はおとなしくしている。テンマがいずれ助けに来てくれるだろうと考えていたからだ。

だが、ここにきて、それが怪しくなり始めてると彼は感じていた。

アキラは、うなだれて答えた。

「確かに俺は、実力者のはずだ。俺の催眠は、高出力広範囲。世界を揺るがす能力なんだ。」

「……ともかく、どうするのですか？このままでは、狂人の善い人、穀潰しの輩が勘違いし、

私を悪者にでっち上げるに決まっていますでしょう？

まったく、ここは貴方に任せましたよ。いいですね。私は少し出かけてきます。」

アキラは、慌てた。

「おいおい。そりゃ困る。どこに行くんだ？逃げる気じゃないだらうな。」

「口の聞き方に気をつけたほうがいい。誰が逃げるですって？そこまでいうのなら、挑発に乗ってあげましょう。」

なあに、善い人や穀潰しなど、私と貴方、

そして、この精鋭の黒服達がいれば、何とでもなります。」

「俺はたいしたことはできないぞ。」

アキラはぼそりとつぶやいた。

アキラは、ここにきて、一応武術の訓練はしていたが、思うような成果は出ていなかった。

精鋭の黒服達は、城の門の前に立っていて、善い人たちを出迎えた。

「どけっ。」

穀潰しはのっけから挑発的に言った。

黒服達は慌てず騒がず対応した。

「首領は、今日はお休み中です。どうやら体調を崩されたようです。」

「俺はどけとあったが？」

も穀潰しは善い人と一緒なので、どこまでも強気に調子に乗っていた。

精鋭の黒服が10体いようと、いざとなれば、自分はずんずらすればいい。と考えていた。

善い人は、暴力ではなく、言葉で対応した。

「何故分かるうとしないの？私達は善の行いをしないといけないんだよ。」

こないだの集会で分かったことでしょう？

あなた達も善人の端くれなのなら、善に努めないといけないよ。」

黒服達は、顔を見合わせた。

「は、はあ……。」

穀潰しは善い人に向かっていった。

「おい善い人さんよ。こいつらお前のこと馬鹿だっと思ってるぜ！
もういいからさっさとぼこぼこにしちまおうぜ！それが善いことな
んだろ？」

「いや話せば分かるはずだよ。」

「そりゃねえよ！どうしちまったんだ？いつものお前らしくねえぞ
！」

黒服達も穀潰しと同様違和感を覚えたが、彼らにとって害見は絶対
だった。

「……首領にはここを通すなといわれています。」

「ほれみる！どうするんだ？引き返すのか？」

「……。」

「おい！善い人！無敵の善人様なんだろ？どうにかしろよ。」

善い人はゆっくりと口を開いた。

「もし、」

その言葉に一同は聞き入った。

「もし、ここを通さないというのなら、私には考えがある。」

以前の善い人と違い、馬鹿騒ぎではなく、静かな宣言だった。

黒服達は、その様子に気圧されたが、善い人は本気だということが分かった。

黒服達は、結局、ここで善い人と本気で敵対するよりは、害児に对应を任せるべきだと独断した。

それは、後から考えても、考える限りベストな判断であったろう。

とにかく、彼らは、善い人ら一行を城の応接間に通した。

害児は、黒服達が、善い人と穀潰しを囲んで、応接間に歩いてくるのを見て、

身を乗り出して、叱責しようとしたが、善い人の静かな怒りの炎を見て、その気持ちも萎えてしまい、手を額にあて、天を仰ぎ、もうどうにでもなれという気分で、どっかりと、車椅子に腰を下ろし、そのまま動かなくなってしまった。

二人は、そのまま応接間のソファに腰を下ろした。

害児の横にはアキラが立っていたが、穀潰しが腰を下ろすように進

めた。

「久しぶりだな。まあ座れ。」

アキラは、害児のほうをちらりと盗み見たが、害児は何も反応しなかったので、

ソファに腰掛けることにした。

「ナンバー6か。今日は、首領に何か用事でもあるのか？」

そういつて、アキラは、念動力で、カップを動かして、善い人と穀潰しの前に、紅茶を置いた。

「アキラ。俺は今、自分のことを穀潰しと呼んでいるんだ。今後そう呼んでくれ。」

「ふんつ。別に俺はお前の名など興味ないが、まあ呼べというのなら、呼んでやるうか。

俺にはどうだっという話だ。」

穀潰しは、その言葉を無視し、害児の悪行をいいあげた。

主にサイキッカーを監禁し、拷問にかけたことなどだ。

アキラは不審に思い、穀潰しに質問をした。

「俺がここにいた限りでは、そんなことはなかったようだが？」

「まあな。てめえは知らねえだろうが、俺は知ってるんだよ。文句があるか？」

「いや、特にはない。」

アキラは、そう答えた。穀潰しは、アキラの腕についている腕輪に目ざとく気づいた。

「アンチサイキック兵器だな。だがめえの力を抑えるほどの代物ではないみてえだが、どうしてここをでない？」

アキラは不機嫌そうに答えた。

「次の指令が来るまで、俺がどこにいようがどうだっていいだろうが。」

組織を裏切ったお前に話す筋合いではない。そんな事より一体、お前達は何しに来たんだ？雁首をそろえて。」

穀潰しは善い人に向かって、話した。

「善い人。すまねえが、アキラの腕についている腕輪を壊してやってくれねえか。」

「やつはあれのせいで操られているんだ。」

善い人は無言でうなづくと、立ち上がり、その場で回し蹴りをする。

蹴りは、アキラの顔の横を横切り、時間差で、アキラは冷や汗をかき、顔が青くなり、気絶してしまった。

以前にアキラは善い人にこてんぱんにされたことがあったので、平静を装いつつも内心おおびりだったようだ。

「根性のねえやろうだぜ。だが腕輪は取れたみたいだな。」

「これで、この人は助かったね。害児さんが話の分かる人でよかったです。」

「だとよ。おい。害児。なんとかいったらどうだ？」

言われた害児は何の反応もなく、カタカタと車椅子を引いて、自室に閉じこもるべく、階段を登っていった。

「なんだありや？まあいいか。とにかく助かったぜ！まったく人助けはいいものだな！」

「その通りだね。この調子でお互い善行に励もう。」

そうだ！廃墟街の善人たちも、集会のあと気持ち引き締まって、いろいろな善行をしているに違いない。

こうなれば、私が直接激励しにいったあげないといけなね。」

「ああそうかよ。ひゃっは！じゃあな、善い人。せいぜい頭の中お幸せにして頑張れや。」

そういつて帰ろうとする穀潰しを、善い人は止める。

「穀潰し。君は善人としての自覚が足りなすぎる。」

私と同行して、ありがたい善の教えを学ぶんだよ。」

「へえ。そうかい。そりゃ、ありがたすぎて涙が出ちまうな。暇だし付き合ってやるよ。」

だがこれは貸しだからな？」

善い人ら一行は、とりあえず、善人たちが更なる善の修行をしていることを期待し、
廃墟街に向かった。

善い人らを見つけた、悪人の一人はあわてて、ビルの奥に進んで引
っ込んでいった。

「どうやらここみたいだね。楽しみだよ。」

善い人は傍らにいる穀潰しに話しかけた。

「やつらがとんでもねえ善を身につけていることはまず間違あるま
い。」

穀潰しは大真面目にそう考察した。

善い人は、その通りといった風で、頷く。

二人がビルに入ろうとすると、その奥から、悪人達の代表格のリダ
がやってくる。

隣には、つい最近善い人に敗れた、大根切蔵がいた。

切蔵は、とりあえず二人に大根を渡した。

穀潰しはそれを半分に割って、半分は食べたが、もう半分は地面に

埋めた。

善い人は、無言で自分の大根を穀漬しに渡し、穀漬しはそれも地面に埋めておいた。

その作業を傍らで見つつ、善い人は尋ねた。

「それで成果は上がったのかな？」

なんのだ？とはリダは尋ねなかった。

どうせ善い人のいうようなことは、とんちんかんで、自分勝手な善行とやらに決まっているからだ。

リダは渋い顔で答えた。

「ああ……。あれからメンバーの人数が二人増えた。俺達の勢力は、地道に力をつけている。」

善い人は、微量であるが、善の成果が上がったことに関して、満足した。

微量であるところは、善人としてのレベルが足りないのだから仕方ないことだからだ。

ところで、善い人は疑問に感じたことがあつたのでたずねた。

「君達以外に善人の勢力があるのかな？」

「いや、そうだな。誰か地図を持ってきてくれ。」

「おっ！」

リダは、部下に廃墟街の地図を持ってこさせた。

「まあ、縄張りってやつだが、いうまでもなく、この廃墟街には、荒んだ闘争を求めてやってきている連中が多い。ちよつどいい機会だから、ここの仕組みを少し説明しておこうか。」

「それが善と関係あるの？」

「勿論さ。お前の・・・というより俺達の目的は、悪人を善人に改心させることだろう？」

「なら、俺の話聞いておいても損はないはずだ。」

リダは、地図を壁に張って、スティックで、地図をコンコンと打ちながら説明を始めた。

「例えば、そこにいるサイキッカーの穀潰しのように、一匹狼で、それなりにここで名が通っているやつもいる。」

「ここは、武術国家ほど、スポーツチックに闘争をしたくないやつが集まってくるということだから、」

「武術国家に比べ自由度は高い。」

「いろんなやつが集まってくるわけよ。」

「ふーん。ねえ。話がつまらないからもう帰っていいかな？」

「え？あ、ああ・・・。だがこれだけはいっておくと、俺達以上の勢力はまだまだたくさんあるんだぜ。」

「それとな。俺は現場のリーダーにすぎねえ。俺達のボスつというのがちゃんといるんだ。」

「てめえは、ボスにかかれれば一発でお陀仏だぜ。」

穀潰しはそれを聞いていきり立った。

「ひゃっは！お陀仏は手前らのほうだぜ！善い人さんよお！こいつらお陀仏にしちまおうぜい！」

善い人は、お陀仏とは何のことだろうと疑問に思った。

リダは、穀潰しのいきり立ちに驚き、逃げようとした。

「おい！逃げるのかよ！」

部下に叱咤され、リダは自分が逃げようとしていたことに始めて気づいたが、

素直にそれを認めては沽券に関わったのでごまかした。

「なあに。くしゃみがでそうになっただけのことよ。

おい。サイキッカーの穀潰しさんよ。俺達と遣り合おうっていうのなら、考え直したほうがいいぜ？」

他の悪人はリダの強気な発言に便乗した。

「おうよ！言っておくが俺たちや強いんだぜ！」

一発発射の雰囲気だったが、そんな穀潰しに善い人が話しかけた。

「どうやら、この人たちはまずまずやってくれているみたいだね。次の善人のところにいこうかな。」

穀潰しはそれを聞いて驚いた。

「こいつはクレイジーだぜ！善い人さんとあろうものが、侮辱されて黙っているのか！
お、おい！待てよ！」

善い人は、その言葉を無視して、歩き始めたので、穀潰しは慌てて後を追った。

その様子を見てリダたちは、小声で、部下達に言った。

「まあこんなものだろうぜ。さあ、アジトに戻った戻った！」

リダは、部下達が善い人達を挑発しないように、ビルの奥に押し込めていった。

穀潰しは、善い人がもっと大暴れすると期待したので、ついたきたのであったが、
案外そうでもなかったのがっかりした。

これでは、ガスの家で穀を潰していたほうがまだましであったかもしれない。

穀潰しは、やりきれない思いで、善い人に話しかけた。

「なあ、善い人さんよお。そろそろ善行を始めようぜ？もう巡回は充分にしただろう。」

早く、罪もない住民達を蹴散らそうぜ。」

善い人は、冷静になだめるように話した。

「これも一つの善だよ。善人に試練はつきものだからね。」

「はあ・・・そうですね。」

穀潰しが肩を落としていると、前方から、白い服を着た集団がやってくる。

「ふむ。」

「なんだありゃ？俺達のほうを見ているみてえだが。」

「穀潰しには分からないの？彼らはなかなかやるみたいだよ。」

「へえ・・・。じゃあようやくぶっ潰せる連中がやってきたっていうわけだ。」

穀潰しは、屈伸をしつつ、待ち構えて、善い人も歩みを止めて、集団がこちらに来るのを待った。

集団は、善い人たちからある程度離れた場所できまり、その集団の中から二人の人物がこちらに向かってきた。

「善い人様ですな？」

「君は？」

「私は善人組織の指揮官です。最近善の活躍されている善い人様をスカウトしてきました。」

「この私を差し置いて善？」

善い人は不快げに眉をせり上げた。

穀潰しは、すぐにいきりたった。

「善い人を差し置いて善だと？ 思い上がりも大概にしておかねえと、ただじゃおかねえぞ！」

指揮官の隣に居る人物は、穀潰しを指差して、隣に居る指揮官に話しかけた。

「なんだ？ あの小汚い小僧は？」

なに？ と穀潰しが唸る前に、指揮官は、彼を叱咤した。

「見くびるな！ 補佐官！ 彼も善い人様と一緒に居るといふことは善人だ。」

補佐官と呼ばれた人物は、肩をひよいとすくめた。

「いや、補佐官が見苦しいまねをしました。」

指揮官は、善い人に話した。

「気にしないでいいよ。穀潰しは善人としてはまだまだ程度が低いからね。」

それで私に話とは？」

「あの、ですから、スカウトしにきたわけです。」

「スカウト？ なにかなそれは。」

「は？いや言葉の通りですが・・・、あっ！いえ、私達は勿論善い人様のほうが、

善人として上だと思っています。」

指揮官は、スカウトしてやるという上から目線のやり方に、善い人が怒りを抱いていて、

あえて、スカウトとはなにか？と尋ねているのだと感づいた。

穀潰しは、いきり立って、指揮官に対し、どなった。

「おいおい！勘違いしねえでもらいてえところだぜ！ひゃっは！善い人だっていつまでも、馬鹿じゃねえんだ。それは無論、この俺にしたって同じことだ！」

「え、ええ・・・。分かっております。」

指揮官は、途方にくれた。

善い人は、まあ善と称する団体なら、あつてやってもいいかという気になりつつあった。

穀潰しに、痛罵されてうるたえている指揮官にも同情したのだ。

「そうだね。私が先輩として善の教えを君達に教えてもいいよ。」

「おお！ではきていただけるのですか。」

「行こうか。善は急げだよ。」

善い人は、指揮官達を置いて先に走っていった。穀潰しもその後を

追った。

「まずいぞ！早く善い人様の後を追うのだ！」

彼らは、用意していた車で、追いかけたが、結局二人の姿を見失ってしまった。

「うーむ。まずいことになった。これではなんと報告すればいいのか。」

「そのまま報告するしかないだろうぜ。さあ俺たちももう帰ろう。所詮やつらはその程度の実力だったってことだ。」

補佐官の勝手な言い分に、指揮官は怒った。

「分からののか！」

そういつつ、右手を振り上げ、補佐官の頬をパンチで打ち抜き、補佐官は、ずべべと、地面を滑った。

倒れこんだ、補佐官はそのままの姿勢で、指揮官をにらみつけ、怒鳴った。

「なにをする！」

「俺は仕事で仕方なくやっているわけじゃない！この世の中を善に導くためにやっているのだ！」

「なんだと！このことは報告させてもらっぞ！」

「なに！」

二人は大喧嘩になり、見苦しい言い争いをしたが、やがて、意味がないということに気づいた。

「過ぎてしまったことは仕方ない。今後の打開策を考えよう。」

「策も何もあるものか。任務は失敗で俺達は本部に戻るしかないじゃないか。」

「いや、まだチャンスはある。だが、確かに体制の立て直しは必要だな。一度本部に戻るぞ。」

「最初からそうしろよな……。」

しかし、善い人たちは、彼らが心配することなく、すでに善人組織の本部についていたのであった。

善人組織。ヒノキ村自治区の廃墟街のように、闘争を求める者たちも居れば、

この世をよくしようと、頑張るものたちも居る。

構成員は、民間人ばかりで、世界で最も大きい組織だ。

あらゆる所に支部があり、人々は、趣味の感覚で多く参加している。

廃墟街の連中や、軍事国家の連中は、世界の人口割合からすれば、本の一部に過ぎず、

人類の大部分は、この組織に属している。

世界の勢力図をざっと説明しよう。

その前に、世界の地理をおさらいしておく。

まずは、ヒノキ村自治区とサイキック組織がある、新大陸。

軍事国家がある、大陸。

謎に包まれている極東の島国。

そこらに点在する島々。

とがある。

北半球に大陸があり、南半球に新大陸がある。大陸と新大陸とは細い陸地で繋がっている。

次に勢力の説明をする。

まず、世界全体に散らばる、善人組織。

司令官という女性が頂点に君臨している。

この星で最も影響力が強い人物で、善人組織に人類の大半は属している。

本部は、大陸と新大陸の境目。世界の中心にある。

ただ、本部の場所は、組織の構成員ですら明確には分からない。

次に大きな組織で、軍事国家。

彼らは大陸全土に集まって、技を競わせている。いわば戦争をしている。

とはいえ、それは必要だからしているのではなく、単なる遊びだ。

といっても、命がけには違いないが。

SYSTEMにより、単純労働の供給がまかなわれるようになって、以来、人類のすべきことは遊びのみとなった。

後は、何に命をかけるかは、その人間の趣味のよるところとなる。

軍事国家は、七国あり、害児は元々ここの出身だ。

その軍事国家から逃れて、独立したのが、ヒノキ村自治区だ。

害児は軍事国家の日の国の重要な地位に居た人で、そこに拘束性があった。

そのため、軍事国家は今でも害児にこだわっており、自治区のことを、新しい軍事国家と見ている節もある。

害児の日々の奮闘により、それら外圧は押しつけており、軍事国家にも善人組織にも関われない半端者が多く住んでいる。

次に、サイキック組織だが、規模としては大きくはない。

代々、テンマという称号をグループの長としている。

現在は、現トキトがテンマだが、現トキトが、テンマになって以来、能力開発の推進に拍車がかかり、積極的な活動をしだすようになった。

大まかにはこれら四つの勢力がある。

それ以外に、嫌味博士だとか、地球の地下、中枢部にいるSYSTEMとか、もっと大きな流れを持った組織も存在する。

善い人らが今居るのは、その中で最も一般的である、善人組織だということだ。

二人とも訪れるのははじめてであった。

常人ではまず、幻覚に惑わされ、たどり着くことはできない。とされている。

ちょっとした手違いが大きな行き違いになることはある。

今回もそういうケースだった。

善い人と穀潰しは、善人組織の本部へと入った。

一見、幼稚園のような建物が、ところどころに連なっており、それが際限なく広がっている。

どこまでが、組織の本部で、どこに代表者が居るのか、ぱっと見た

だけでは分からなかった。

善人組織は、警備などなく、また善い人たちが、勝手に入ってきて、

何の警戒もなかった。

そこに穀潰しは疑問を覚えた。

「何か妙だな。連中、俺達のことなんか眼中にないみたいだぜ。

善い人といえば、ヒノキ村自治区で大分、善人としての名を上げたつてのに、

ここじゃ認知されていないのか？」

善い人は、腕を組んで下を向きながら考え、やがてつぶやいた。

「どちらにしても、この人たちには、真の善は何か。

ということを、思い知らせないといけないんじゃないかな。」

「なるほど。かもしれねえな。」

穀潰しは頷いた。

「それで、具体的にはどうするんだ？」

「こいつら全員、ぶっ潰すのか？」

「いや。……まずは、彼らのやり方を見てみよう。話はそれからだね。」

「ひゃっは！じゃあとっといこうぜい！連中に善い人の善を見せ付けてやるんだ！」

二人は、お互いに目的を確認し、激励しあつて、気合を入れた後、
ともかく、話が通じそうな人間を探すことにした。

第十二幕 善人組織

あらすじ

最近、偉大な善人である善い人に対し、教えを請いたいという人間が激増した。

その代表的な例が、善人組織だ。

善い人は、彼らに善の教えを広めるため、善人組織本部へと向かった。

登場人物

善い人

人々に善の教えを請われ、神格化している人物。

穀潰し

小物だが忠節はある、善い人の弟子。

ガストラゲタ

小物だが善い人に武器等与えることで忠節を示す、善い人の弟子。

害兎

善い人にしてやられたが、再起を狙っている。

リダと悪人達

善い人の一番弟子の連中で、最近活発に活動している。

サイキツカーアキラ

善い人らによって改心した。

指揮官と補佐官とその他大勢
善い人の善を見抜いた下級善人達

善人組織

善い人を差し置いてでかい顔をしているが、やがて善い人に思い知らされるだろう。

善い人と穀潰しは、ともかく周りの人たちに話を聞いてみることにした。

ちょうど近くに居て本を読んでいた青年に、善い人は話しかけてみた。

「この私がわざわざやってきた。というのに、歓迎のパレードがない。

ということはどういうことなのかな？

こういう分だと、私も考え直さないといけないよ？」

言われた青年は、馬鹿がやってきたといわんばかりの態度で、鼻で笑い、そっぽを向いて、本から目を離さない。

その態度に、善い人は激発を発しようとしたが、穀潰しに手で制される。

「任せておけ。」

そういつて、青年に向かって、表情を引き締め、詰問した。

「おう！おうおうおう！ビビッて声もでねえのか！あーん？ひゃっは！俺たちや偉大な善人だぜ！なんだったらてめえをぼこって証明したっていいんだぜい！」

青年は、穀潰しの馬鹿剣幕に啞然とした。

本から目を離し、啞然とした表情で、善い人と穀潰しを交互に見る。

「おい善い人さんよ。こいつビビッて声もでねえぜ。

つまらんねえやろうだ。善人組織つてのも案外こけおどしでたいしたことないんじゃないかねえのか？」

善い人は、得心のいった顔で、穀潰しの言葉に頷く。

「なるほど。それなら、私がやってきた。

というありがたさが分からないこの人たちの頭の悪さも納得がいくね。」

青年は、はつとして、正気に戻った。

どうやら善い人たちが外部で名をはせた善人らしいと気づき、ならばと、彼らが井の中の蛙であることを思いしらせようとした。

「ふっ。まあ君たちみたいのは時々現れるよ。

君たちなど善人のメツカであるこの善人組織本部の本試験を受ければ、

真っ先に落第するに違いない。」

穀潰しは、顔を真っ赤にして怒鳴った。

「なに！」

今にも殴りかかろうとする穀潰しを善い人は止めた。

「面白いね。この私に対して善の挑戦をするとは。

君たちの勇氣に答えて、私はその試験とかいいうのを受けてあげようじゃないか。」

その言葉を聴いて、穀潰しは追隨した。

「はん！そういうことだ！この善い人の善人レベルを見くびったことを泣いて後悔させてやるぜ！」

青年はめがねを光らせて、不適に微笑んだ。

「ふふつ。あまりに大言壮語だと、後で恥をかくことになるよ。まあいい。試験会場はこっちだ。ついてくるといい。」

「おう！」

穀潰しは、善い人のほうを向いて笑った。

「ひゃっははは！面白くなってきたぜい！

やつらこれから俺達にフルボッコにされるとも知らずとんだ阿呆どもだ。

なあ！善い人さんよお！ひゃっはっはっはっは！」

「彼らがどの程度の善人だか、ようやく分かりそうだ。

私をがっかりさせないでほしいところだね。」

ようやく、話が分かる人間を見つけ出し、二人は善の一步を進みだした。

善い人は、歩いて会場に行く最中、様々な不思議なオブジユに興味を示し、

それが何なのか青年に聞いた。

「あれはなにかな？」

善い人が指差したのは、巨大な人が地球を手で囲っているオブジユだった。

「あれかい。あの巨大な人間は、善の神と呼ばれる者で、地球を善で包み込もうとしてるんだよ。」

そのオブジユを見て、穀潰しは何か気づいたらしく、青年に向かってたずねた。

「おい。反対側に薄っすらと消えかかっている影みたいなのがいねえか？」

「ああ……。君たちは本当に何も知らないんだねえ……。」

青年は呆れ顔だ。

「うるせえよ。ぶっ潰されたいのか。質問に答える。」

「あれは、悪の神だよ。善の神に敗れて消えかかっているんだ。」

それを聞いて善い人は考え込んだ。

「善の神か……。」

その様子を見て、穀潰しは心配した。

「おい、善い人。馬鹿なこと考えてるんじゃないぞ。ためえがいくら善人でも、神になろうなんて。」

「いや、この私の善は神も遠く及ばないよ。」

「そうか。ひゃっは！それはそうだな。」

「なにをいうのやら。」

青年はまたもや呆れた。穀潰しはすかさずフォローを入れる。

「俗人には、善い人の偉大さは所詮分からん。」

「そうだね。ところであれはなにかな？」

善い人が指差したのは、先ほどの善の神と悪の神らしきものが、二人で地球に雷を落としているオブジユだった。

「あれか……。」

青年は、そのオブジユを見て沈黙した。

「どうしたんだ？よくしらねえのか？」

「いや、まあ確かによくは知らない。もしかしたら、司令官なら何

か知っているかもしれないね。」

三人は、立ち止まって、そのオブジユをじっと見ていた。

穀潰しはまたもや何かに気づき青年に尋ねた。

「おい。雷の先に何か見えねえか。こう人間みたいなものが。」

「なんだ。やけに目がきく人だね。もしかしてサイキッカーかなにかなのかい？」

「はあ？サイキックなんか迷信だろ？そんなことより……。」

「すまないが、よく知らないんだ。」

そろそろ試験会場だよ。さあ、大言壮語の実力見せてもらおうか。」

「あ、ああ……。おい。善い人。どうしたんだ？さっさと連中を思い知らせようぜ。」

「……。」

善い人は、オブジユを見たまま動かない。

「どうした？お、おい！何か妙だぞ。」

「雷……。」

「雷？雷がどうしたんだ？」

「行こうか。善い事をしないと。」

「え？あ、ああ……。そうだな！いくか！」

穀潰しは明らかにおかしい善い人の様子を訝しがったが、どうでもいいことなので、スルーすることにした。

青年は、会場に着くと、試験の受付係と対応した。

「やあ。こちらの二人が試験を受けたらしい。地方で名をはせた善人みたいなんだ。」

「地方で名をはせた善人？はて、どこかで聞いたような……。」

「時々居るじゃないか。彼らも招待されたんだろう？」

あれ？そういえば招待されたなら、組織の人が誰か知っているはずでは？」

「ふーむ。なにやら手違いが？」

「おい！なにしてるんだ！いまさらびびったって遅いぞ！」

穀潰しが腕を組みつついらしながら後ろから怒鳴った。

善い人は、座り込んで漫画を描き始めてしまっている。

穀潰しを見た試験管は渋い顔をした。

「どうも、善人とは思えない人相ですね。態度も悪い。」

「て、てめえ！なんだと！もういっぺんいってみろ！」

穀潰しは、衝撃波を放って、受付室のドアを吹き飛ばし、試験管の胸倉をつかむ。

「ぐ、ぐるしい〜！ギブアップ！ギブアップ！」

「あ、あわわわ。やっぱりサイキッカーだった！きっと凶悪なネー
ム持ちだ！」

「僕らみんな殺されるぞ！」

ヒートアップする穀潰しの肩を善い人が叩く。

「穀潰し。それでは善は示せない。」

「あつ……。」「

穀潰しは、試験管を下ろすと、謝る。

「す、すまねえ。善い人。」

「天使だ！凶暴な悪人をたった一声で！」

試験管は、善い人を讃えた。

青年は、試験管の浅はかさを哀れんだ。

「馬鹿な！彼女だって凶暴な悪人の仲間なんだぞ！もうここはダメだ。」

青年は、そっぴい残し、この場から姿を消していった。

試験管は、青年の無礼を善い人に謝った。

「すみません。彼は少し錯乱してるのです。」

「いいよ。それより試験とかいっつのは？」

「分かりました。すぐに用意します。」

試験管は、興奮して、念電話で他の試験管と話した。

「ええ。サイキッカーの護衛を持つ、高尚な善人様です。

白服、白帽子の……。え？いやそんなわけありません。

その人とは別人でしょう。え？いやまあ年恰好は同じですが、
だってその人、暴力行為にでるお弟子さんを止めたんですよ。
……………そうですよ。じゃあ早速お願いします。」

試験管はニコニコ笑って、二人に対応した。

「さて、準備ができましたよ。まずはお弟子さんからどうぞ。」

「……………」

「あ、あの？」

「穀潰し。君からだよ。」

「ああ弟子って俺かよ。ひゃっは！じゃあいつちよやってやるぜ！」

穀潰しは、キランとナイフを光らせて、上空にほおり投げる。

ナイフは回転し、穀潰しの手に再び収まる。

穀潰しは、ナイフを収めた後、練りこみ（念力をとりこむこと）の動作をし、

オーラを漂わせ、ポーズをとる。

「さあきやがれ！」

「はあ……。じゃ、じゃあいきます。」

辺り一面は、荒野となった。遠くに荷物を持ったおばあさんが居る。

「ははん。なるほどな。」

穀潰しは合点がいった。ようするに、あのおばあさんの荷物を持って
ばいということだ。

真に単純で、穀潰しは笑いがこみ上げてきた。

「ひゃっはははは！ 散々威張っておいて、この有様かよ！
善人組織って言うのも大したことねえなあ！」

試験管は、突然ぼこられないように、慎重に対応した。

「これは基本レベルです。やはり基本は大事ですから。」

「そうかよ。まああまり俺達をがっかりさせないことだな。
どういう態度に出るかわからねえぜ？」

「は、はい。」

「さて、じゃあ軽くパスしてくるぜ。善い人さんよ。」

穀潰しが後ろを振り向くと、善い人が居ない。さては逃げた！と穀潰しは思った。

穀潰しの試験管の驚いた顔が見える。

穀潰しは、しまった！と思い、試験管の視線を先を見た。

「おのれ！この私を騙すとはゆるさーん！」

見ると、善い人が、おばあさんを蹴飛ばし、おばあさんはかつらと衣装がとれ、空中分解しながら、サッカーボールとなって、穀潰しの足元へ転がってきた。

「い、善い人！お前は一体なにをやってるんだ！」

穀潰しは唸った。試験管も蹴られたおばあさん役の人も同じ気持ちであった。

「何で穀潰しには分からないの？この人は、おばあさんじゃない。私達を騙すために、おばあさんの格好をして油断させようとした悪人の手先なんだよ。」

「は、はあ？」

穀潰しは啞然とした。

蹴られた人は我慢ならんという面持ちで叫んだ。

「こいつはクレイジーだ！」

「お、お弟子さん！あの人を止めてください！」

「はあ？俺じゃ無理だ！」

「だって、サイキッカーなんでしょう？あの人もそうなんですか？」

「俺はしらねえ。第一やつとは会ったばかりでそこまでの認識もない。」

「あわわ。こっちにやってくる。」

「ちっ！やっぱりこうなったか。こうなったら俺も善い人と一緒に大暴れしてやるぜ！」

そうこうやっているうちに、のしのと善い人がやってきた。

「この悪人め！」

「いいぞやつちまえ！」

ばっかーんと蹴り上げられたのは、しかし穀潰しだった。

「妙だと思ったんだ。穀潰しは私をこの場所に誘導させた悪人だったんだね。」

「う、うわー！お弟子さんがやられた！誰でもいい！四天王を呼んでくれー！」

「ひんてんこー！」

善い人が無害な試験官を蹴飛ばそうとするそのとき、善い人の攻撃をさえぎったものがある。

「上か！」

善い人が上を見上げると、上空に四つの影が漂っていた。

「例の四天王か！私の善と君たちの善どちらが上か勝負だよ！」

「くくく……。」

「ふふふ……。」

そんな風に余裕げに笑っているのは、善い人の前では命取りだということに彼らは気づかなかった。

彼が気づく間もなく、あつという間に、善い人は彼らの側まで移動しており、

影は三つ蹴飛ばされ、天へと吹き飛んでいき、影は一つだけとなった。

残った影は、善い人の攻撃を受け流し、後ろに飛びながら、黒い口ローブを取った。

「貴方は確か……。」

「こういつ日に来るだろうとは思っていた。君が善人を名乗っていた時からな。」

黒いローブの正体は、かつて善い人と共闘したデビルだった。

「君は悪人だったのか。そう思ってたんだよ。」

「言葉で誰かにとっての真実を覆すのは難しいものだ。私もこういう見た目だから経験上それはよく分かる。ならば、拳で証明するのみ。」

デビルは、体を炎で燃やした。

「変身！とう！」

空中で回転し、半化物かするデビル。

特に戦闘能力が上昇するわけでもなく、単に普段力モフラージュしている人間部分をはいだけだ。

彼は醜い容姿を気にしている割には、その姿をよくさらすのは、なぜだろう。

変身中、善い人が槍で突っ込んできたので、空中へ飛びその攻撃をかわす。

「このデビルウィングは全ての攻撃を無効化できる。そしてこれが、デビルパンチだ！」

そういつて、空中から片手を突き出し、善い人めがけて突っ込むデビル。

善い人は、その攻撃を鉄の塊のような大剣で叩いて、打ち落とし、槍で掬い上げ、空中へ浮かせ、自分の体よりもだいぶ

大きい弩を持ち出し、
自らの体をセットする。

『受ける！善人砲！』

善い人は、一つの弾丸となり、デビルめがけて、蹴りを繰り出し、
蹴り上げる。

反対側の壁に到達した善い人は、同じような弩をそこにもセットし
て、さらにデビルめがけて飛ぶ。

デビルはまだ空中に浮いたままだ。

『止め！善人砲！返し！』

「潰れる！ランダムスフィア！」

どこからともかく、巨大な炸裂する衝撃波が無数に、試験会場に降り注ぐ、
落ちてくる瓦礫と衝撃波を避けるのが精一杯な善い人はデビルに止めを刺すことはできなかった。

さしもの善人、善い人も、下敷きになつては適わない。

ここから脱出するべく、外に出ようとしたところ、誰かに見られている感覚に気づき、
その方角を見る。

「……。」

鋭い眼光を放ち、端正な顔立ちの銀髪の女性が、こちらを見ていた。
目の前には、チェス版が置いてある。

女性は逃げる素振りもなく、瓦礫に埋まろうとしていた。

（あの人は善い人だ。私には分かる。助けないと。）

善い人がそう思ったとき、ちょうどその女性も立ち上がった。

善い人はすぐに動くかと思つたが、体が金縛りにあつたように動かない。

女性は、まだこちらを見つめている。その目はとても人のものとは思えなかった。

まるで、先ほど見た善の神のような、そんな存在を匂わせる目だった。

心なしか、体から何かもやのような神々しい気配がにじみ出ている。善い人はそれを見て、何かを思い出しそうになっていた。

やがて、女性は、崩れていく瓦礫に埋まっていき、見えなくなった。

善い人は我に振り返れるようになったのに気づくと、一足飛びに建物から脱出した。

着地した先には、穀潰しが構えを取って待ち構えていた。

第十三幕 四天王の畏

あらずじ

善人組織に格の違いを見せつけ、善たる聖戦に終止符を打った善い人であったが、
穀潰しの突然の裏切りにより、最後の詰めを誤る。
善を示す聖戦の最後の戦いが今始まった。

登場人物

善い人

神をも凌駕する善人

穀潰し

善い人にだまし討ちを仕掛けた裏切り者

ガストラゲタ

穀潰しと結託し何かを企んでいる様子

害兇

善い人の様子を虎視眈々を伺うヒノキ村自治区の統治者

司令官

おそらくは善人と思われる謎の女性

善い人が命からがら崩壊する建物から逃れると、そこには穀潰しの

魔の手が迫っていた。

『潰れる！ランダムボール！』

穀潰しの手から、善い人をめがけて巨大な丸い玉が放たれる。

油断した善い人だったが、すぐさま体制を建て直し、地面を蹴ってその攻撃を避ける。

玉はあらぬ方向に飛んでいき、滅茶苦茶に動き回っていた。

「おっと！」

穀潰しのほうにすら玉は飛んでいき、穀潰しは練りこんだ手で、その玉を善い人のほうに弾く。効率のいい技ではないらしい。

完全なランダムな動きをする攻撃は、さしもの善い人も避けるのは至難である。

穀潰しはそう目論んだのだろう。

善い人も最初は、穀潰しが玉をコントロールしていると思って警戒したが、

実はそうではないと気づき、穀潰しに向かって直進してきた。

穀潰しはすでに両手に新しい玉を作っており、

善い人に対して、後ろに飛びながら距離をとり二つの球を投げる。善い人は、予め玉の軌道が分かっていたかのように、三つの玉を避けつつ、穀潰しに接近する。

対する穀潰しは、接近されないように距離を置く一方だ。

しかし、穀潰しは対善い人戦に置いて一種の天才だ。

いや、戦うことに関しての善い人とは違った意味での天才とっていいかもしれない。

彼は、技量は伴わず、かといってプライドを捨て勝利を得る執着心もなかったが、善い人打倒という目的だけは本物だ。

この技も実のところ、対善い人用に開発した技で、ちょっとした仕掛けがある。

今回の戦いは、穀潰しにとって実験的な意味合いがあった。つまり穀潰しの仕掛けが善い人に対して機能するかどうかだ。

実は、彼の投げた球は一つはランダムボールだが、一つはサイコスファイアなのだ。

サイコスファイアは、威力は小さいが、自分である程度動かせる。そして、ランダムボールと形状が酷似している。

本来サイコスファイアも、そんなに動かせる技ではないが、彼は修練によりそれを可能にした。

ダミーのランダムボールに混ぜて、本命のサイコスファイアを同時に

はなつたのだ。

善い人は、穀潰しすら感知できないランダムボールの動きを完全に見切っていた。

（確かにてめえは戦うことに関して野生の勘というか神がかり的な天才性がある。

が、いつてしまえばそれは精密機械のようなものだ。

てめえの性質をしらねえやつは、それですぐにやられちまうが。

俺もまた一種の天才。ガスほどじゃねえが、知恵でやつを凌駕することは可能だ。

それを今証明してやる。）

「ひゃつは！お陀仏だぜい！善い人さんよお！俺の忠告を聞かなかつたからだ！」

忠告とはなにを指しているのかはなぞだが、

そういつて、穀潰しは、無規則に動く玉の一つに、いきなり規則性を持たせ、

善い人のほうに誘導させた。

穀潰しに直進することに必死で、虚をつかれた善い人は、それでも慌てずに、

大剣を繰り出し、玉を一つ防いだ。

（だが動きは止まった。隙はできたな。）

「タイムオーバーだ。潰れるー！ランダムスフィア！」

サイコスファイアの威力は案外あり、善い人は足を止められ、その上からランダムスファイアが降り注ぐ。

予め攻撃がどこに来るのか分かっていたかのように、善い人はその攻撃を避けるが、

物事にはリズムがあり、複数のリズムを同時に処理するのは、中々難しいものだ。

それは天才たる善い人でも、あまりにも瞬間的にリズムを狂わされ
ては、修正が効かない。

失念していた、ランダムボールの一つが、善い人の体にまともに当たり、

善い人の体は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた先に、穀潰しのランダムスファイアが降り注がれ、

善い人は、大剣を構えて、ガードしていくが、どんどんランダムスファイアに飲み込まれていく。

「正直言って、運の要素のほうがかかったぜ。

てめえは運すら支配する能力を持っているが、今回の運は俺に傾いたか。」

正確には、穀潰しの執念が運という戦いの流を無理やり引き寄せた

のだった。

善い人は、半死半生でよろよりに立ち上がった。

穀潰しは、善い人が立ち上がるまで待った。

詰めのいい穀潰しにしては珍しいが、一つに彼はこれだけで満足したからだった。

とはいえ、決着はつける。それが二人のルールだからだ。

善い人は、薄れ行く視界の中で、穀潰しのほうを見た。

「善は負けるわけにはいかない。私は善い人だ。」

(そう、貴方が負けるはずはない。貴方が負けるとしたならば、それは私の死も意味する。

貴方は最高傑作。負けるはずがない。)

「だれ？」

「私だ。」

「？」

善い人の視線の先に、穀潰しだけではなく、

その遙か後ろに、逃げ惑う善人組織の会員達にまぎれて、

銀髪の女性が善い人を見つめているのを発見した。

「あの人も善人か。私も善人だ。ならやるべきことは一つ。」

「受ける！突き刺さる蹴り！」

渾身の突き刺さる蹴りを穀潰しはバックステップして避けるが、二つのランダムボールが、背後から、穀潰しをぶちかます。

「なに？」

穀潰しは戸惑った。

（おかしい。玉の動きはすでに制御したはず、制御をのつとられた？）

善い人の突き刺さる蹴りが変化し、突き上げる蹴りに変わる。弱つていても威力充分な突き上げる蹴りが、穀潰しに炸裂し、穀潰しは宙に舞った。

「いけ！飛び槍！」

槍は穀潰しの体を突きぬけ、穀潰しの体と共に遙かかなたへと吹き飛ぶ。

善は勝ち、悪は去った。

善い人は力が抜けその場でへたり込んだ。

その善い人に対し、手が差し伸べられる。

先ほどの銀髪の女性だった。

銀髪の女性は、しかし善い人のほうを見ずに、あらぬ方向を見ている。

善い人は尋ねた。

「なにを見ているの？」

「宇宙だ。」

そついい終えて、善い人のほうを見た。

「よくやった。立てるか？」

善い人は、女性の手を握り立ち上がった。

立ち上がったときには、すでに力は五体にみなぎっていた。

「善人魂がある限り、私が倒れることはない！」

「そつだ。貴方が倒れることは決してない。貴方は善人なのだから。そしてこれでチェスの局面は私に有利となった。」

「貴方も善人なんですよ？」

女性は頷く。

「私は、ここの組織の司令官だ。」

「ああ貴方が司令官か。ちよつと尋ねたいことがあるんだよ。」

「……何も考える必要はない。ただ善いことをすることだけ、そのことだけ考えればいい。」

善い人は道理だと思つた。

「私もそう考えていたところだよ。」

「話は済んだようだな。」

善い人が振り返ると、そこにはデビルがいた。

「君か。またこの私に挑戦したいのか？」

「いや、今回は私の負けだ。司令官。俺のやるべきことはもう終了だ。」

後は好きにさせてもらおう。」

「よかるう。」

「ではまたな。・・・善い人よ。」

「なになかな？」

「答えは見つかったか？」

「私は善い人だ。私の使命は善い事をする事だよ。」

「そうか、ならば何もいうまい。次に会うときは敵か味方か。ふっ、そのときが楽しみだな。ではさらばだ！とう！」

そういって、空中に飛び去り、デビルは去っていった。

去っていったデビルを見ていると後ろから司令官の声が聞こえた。

「ようこそ、善人組織へ。今日は善い人歓迎のパレードをしよう。」

司令官がそういうと、あたり一面が突然騒がしくなった。

逃げ回っていたはずの会員達が楽器を取り出し演奏しだしたからだ。

それと共に、踊ったり、食事を運んできたり、酒盛りをしたりする人たちが現れた。

「これは善いことだね。」

「ここが善人組織だ。ゆっくりしていつてくれ。」

「分かったよ。」

善い人は、人ごみの中に溶け込んでいき、司令官はいつの間にか姿を消した。

その騒ぎの中で、善い人は自作の漫画をみなに配ったり、歌ったり踊ったりした。

彼らは特に善い人を接客するといったような態度は取らず、むしろぞんざいに扱っていた。

いや、実際すでに善い人は善人組織の一員として認定されていたのだ。

最悪ランクのFランク善人としてだ。これはテストの結果ともいえる。

善い人がその事実を知ったら、すぐにでもここを潰しかねないが、幸い善い人はそれを知らなかった。

しばらく善い人が遊んでいると、指揮官、補佐官が善い人を見つけ話しかけてきた。

「ああ善い人様！無事ここにたどり着けてよかった！私達は心配していたのです！」

「君たちは確かこの人たちだね。私をここに連れてこようとしていた。」

「ずいぶん遅かったけど、今までなにをしていたの？」

補佐官はそれを聞いてびつくりした。

「いやいや、善い人様達を探していたに決まっているじゃありませんか。」

「なにをしていたとは、ずいぶんなことをいってくれます。」

「こら、補佐官。」

「だって事実じゃないか。」

「すみません。善い人様。」

「君たちももう少し善人としての自覚を持ってくれると善い人だけだ。」

「まあゆつくりと私を目標に目指したらいいよ。」

「君たちでは私のようには到底なれないけど、目指すくらいなら許してあげるよ。」

「はい！及ばずながら全力で目指させていただきました！」

「指揮官。そこまで卑屈になる必要ないだろ。」

「俺は本気で善い人様を尊敬しているのだ。貴様の目こそ節穴ではないか？」

「マジかよ……。あつそうだ。善い人様。」

「なにかな？」

「一緒に居たお弟子さん？ですが、先ほどあちらで見かけましたよ。あの人護衛でしょ？一緒に居なくていいんですか？」

「なに？ふてぶてしくも穀潰しがきている？」

善い人の目がキラリと光った。

「何かたくらんでいるに違いない。もう我慢ならん！」

善い人は、爆発し、駆け出した。

穀潰しは、ガスと共に、酒盛りをしていた。

善い人が寄ってくるのに気づくと慌てて手で制した。

「お、おい！待て！酒でも飲め！」

「おのれ許さん！」

善い人の全力キックで、穀潰しは言い訳も許されず、再びかなたへと吹き飛んでいった。

しかし、ガスは残されたので、会話にはあまり問題がなかった。

善い人の善の直感で、彼らが何かを善い人に伝えようとしてきたのは、とうに分かっていたのだ。

「それで、私に話があるんでしょう？ なにかな？」

ガスもガスで、善い人に突然話を振られても、当然のように対応した。

「実は、害児さんの件なのであるが……。」

「害児さんがどうかしたの？」

「どうも善い人君が誘拐されたと早合点したようで、ここに攻めてくるらしい。」

「いやはや、我輩とて再三説明したのであるが、分かってくれなかったのだ。」

「察してくれい！ 善い人君！」

「なるほど。やはり害児さんが動いたか。」

「やはりというと気づいていたのか。」

「勿論だよ。あの人が動かないはずはない。」

「ほう。善い人君。どうやらあるべき姿を取り戻したと見えるな。善いことである。我輩としてもある程度心配しておったのだ。」

「ガスさん。」

善い人は何かを促すようにガスを見る。

「これであるな？」

ガスは、善い人に、武具の数々を渡す。

「今回もまた優れものである。」

「害児さんはまたもや操られている。悪の根源は絶たなければならぬ。」

善い人は、ガスがくれた武具の数々をしまいこみ、ガスに礼もいわず駆けていった。

「まあ害児さんもとんだとばっちりであるが、・・・連絡くらいはしておいてやるか。」

ガスから連絡は受けた害児は善い人が激怒していると聞き驚いた。

とはいえもうどうすることもできない。

彼女としては残念な限りだったが、早々に引き返すしかなかった。

「よろず屋がこれくらいで王者たるこの私に貸しを作ったと思うのは癪ですが、仕方ありません。」

「善い人様は私たちが足止めしておきます。」

黒服達は害児にそういい、早速駆けていった。

「ふーむ、しかし猪口才な一地方の組織ごときが大仰なパレードを開くとは、

どうも立場というものが分かっていただけないようですね。

おとなしくしていれば痛い目にあわずにすんだものを、

こうまで挑発を繰り返されては王者たる私としても放っておくわけにもいかなくなるでしょうに。」

害児はそういつて天を仰いだ。

「帰って策を練りましょう。」

害児が率いる軍隊は、ぞろぞろと来た道を引き返した。

しばらく進んでいると、善い人が黒服達と共に追いついてきた。

どうやら黒服は善い人の誤解を解くことに成功したようだ。

「やあ、害児さん。」

トラックに乗っていた害児は、窓を開けて顔を出した。

「ああ善い人さん。おはようございます。今日はいい天気ですね。」

「どうやら私のことを助けてくれようとしてたみたいだね。」

「ええ。まあ取り越し苦労だったようですが。ともかく無事でよかったです。」

しかし、これは一つ考え物じゃないですかね？」

「なにが？」

「とにかく乗ってください。」

そういつて、扉を開け善い人をトラックの中に招き入れる。

「いや、あの善人組織という連中、どうもきな臭い。」

そもそも善い人さんを差し置いて善と抜かす根性はいかなものでしょうか。」

「私も最初そう思ったけど、別に善い人は何人居ても善い人なんじゃないかな。」

害児は、都合の通り行かないので閉口した。

少し額に手を当て考えた後、こういった。

「ならばこの私も善い人でしょうか？」

「善い人は私だよ。」

「それはそうですが……。」

ここに来て害児は、善い人は使い物にならないかもしれないと思い

始めてきた。

「まあお互い気をつけないといけませんよ。どうも怪しい。実にね。」

「そうかな？」

「ええ。私の情報によると、何か企んでいるようです。善い人さん考えてもみてください。」

この私が貴方に対して一度でも嘘を言ったことがありましたか？ありませんよね。

「ということは、やはりあそこは何かあるんですよ。」

善い人はそうかもしれないと思い始めてきた。

「私も今そう考えていたところだよ。」

「今からでも遅くない。二人で攻め込みましょう。」

ククク……。フフフ……。

「ん？何か声が聞こえませんでした？」

「四天王だ。善人組織四天王！おのれまだやられたりないか！」

善い人たちがすぐさまトラックを降りると、一つの影が後方に揺らめいている。

「善い人さんやられました。トラックのタイヤがパンクしています。相当の使い手ですね相手は。」

黒い影はすばやく姿を消した。

「善い人さん追ってください。私には他にやる事ができました。」

害兇が言うまでもなく、善い人は影を追いかけていた。

しかし追っても追っても距離が縮まらない。

(私よりも早い?)

相手も自分に追いついてくるのが多少驚いた様子だった。

「ここは廃墟街……。こんな町もあったのか。」

着いてみた先は、ヒノキ村自治区の廃墟街だった。

善い人が普段行かない地域だ。

善い人は歩きながら前方をふと見ると、悪人風の男が新聞を読んでいた。

「おお！またしても義賊のアツチラ様がやってくれたぜ！」

大仰に手を振り、隣に居た悪人風の男に話しかけた。

「さすが義賊のアツチラ様だ！偉大な善人！自治区の英雄だ！」

(ふーん。義賊か。)

善い人は、横を通り過ぎようとすると、悪人風の男が新聞を善い人に投げつけてきたので、
善い人はさてこそ！とばかりに、その新聞を避けて、悪人を蹴り上げた。

「こ、こいつなにしゃがる！」

残った悪人風の男が善い人に殴りかかろうとしたが、やはり善い人に蹴飛ばされた。

「悪は去った！」

善い人が新聞を拾い上げてみると、英雄アッチラまたしても！という見出しが見えた。

「私の漫画のほうが面白いみたいだね。」

何の参考にもならぬ紙くずをゴミ箱に捨て、また歩いていると人だかりが見えた。

何の騒ぎだろうと善い人が近づいてみると、なにやら演説している人物が居るようだ。

その人物こそ、噂の英雄、義賊のアッチラであった。

第十四幕 VS 四天王

あらすじ

真の善人としての自覚を取り戻した善い人に対し、新たな挑戦者が現れた。

それが善人組織四天王であった。

どちらが本当の善人か。

善をかけた戦いが今始まった。

登場人物

善い人

ヒノキ村自治区の著名な善人

穀潰し

現在空中遊泳の旅に出ている

ガストラゲタ

善人組織の祭りに参加しつつ、周りの情勢を伺う商人

害児

善い人と和解した後、別行動を取っている

善人組織四天王

善い人を付けねらう偽善人達

善い人が自分のところにたどり着いたのを目視したアッチラは、

手を挙げて、人々に合図をした。

人々は、散会していき、残ったのは舞台上に居るアツチラとそれに対面する善い人であった。

どうやら取り巻きの人々は、場を盛り上げるためにアツチラが雇ったサクラだったようだ。

「貴方が義賊のアツチラだね？」

「そうさ！ここらじゃちよつとした英雄なんだぜ！」

その言葉に呼応して、二人を取り巻く人々は、アツチラ様は英雄だー！などと叫んでいた。

アツチラはその声にいちいちこたえ、手で制して人々の声を静めた。

「善人組織の四天王なんですよ？」

その言葉にアツチラはぎくりとしたがさもありなんと思い直しそれに答えることにした。

「まあな！よく分かったな。

さすがは善人といったところみたいだが、あまり調子に乗るんじゃない。

英雄のこのアツチラ様には敵うわけではない。」

「私を付けねらうのは何故かな？私の教えに善人組織は従ったはず。」

「教え？お前のは善ではない。ただの暴力だよ。」

「ならば善を証明するのみ！」

「言ったな。言っておくがこの俺を敵に回すってことは善人組織全体を敵に回すことになる。」

アッチラはにやりとした。

「では証明してもらおう。善人対決だ！」

周りからワーワーという喝采が起る。

アッチラはそれをあえて制せず静まるのを待った。

人々はやがて疲れ静まった。

善い人はそれを見計らい答えた。

「受けてたとう。」

「詳しい話は場所を移そう。こっちだ。」

アッチラは軽快な足取りで、台上からジャンプし、一人で勝手に酒場へと向かってしまった。

ついてこつて意味だなと分かった善い人は、慎重な足取りでアッチラの後を追った。

善い人が遅れて酒場にやってくると、アッチラはすでにヒートアップしていた。

「ああそうだ！この俺義賊のアッチラが、偽善人の善い人をへこませてやったのさ！」

あいつは俺に屈服した！」

「すげえじゃねえか。さすが義賊だな。おい！マスター！こっちにも酒をくれ。」

「つけはアツチラにつけてくれ。」

「どうやら、酒場の人々はアツチラに酒をおごってもらおう変わりに、アツチラの馬鹿騒ぎに付き合っているようだ。」

「俺はみんなのためを考えて行動してるんだ！」

「義賊だからな。いつだって俺はみんなのためを考えている。」

「今回のことにしたって同じさ。あの偽善野郎が……。」

「おい！」

酒場の客の一人が真っ青になってアツチラを制止する。

アツチラがその方向を見ると、善い人が冷徹にアツチラを見つめている顔があった。

それを見るとアツチラは今までの善い人へのやりと笑った。

この瞬間まで善い人の悪口を言いまくっていたのに、

何もなかったような顔をしているのは、さすが面の皮が厚い四天王の面目躍如といったところだ。

「きたか。まあ座れ。」

アツチラはグレムリンのようにびよんびよん飛び跳ねていたが、

善い人が来たのと知ると、椅子にどっかりと腰を下ろし、

善い人に対面の席につくように顎で指示をした。

善い人も席に着き、アツチラは酒場のマスターに目で合図をした。

「注文は？」

「いらないよ。」

「は、はい。」

マスターは、ビビッて退散して言った。その後ろからアッチラが声をかける。

「こいつには水でも食らわせておけ！」

その陽気な声に酒場で青くなっていた客はどっと笑いの声を起こし、顔色がよくなる。

「さて、じゃあ計画についてだが。」

「君よりこの私の善が勝っているのはいうまでもないことだよ。この挑戦に付き合っただけでこの私に対して感謝の言葉がないのはどういふことかな？」

「どうやらお前は自分自身のことをまったく分かつちや居ない。そしてこの世界のことについても同じことだ。」

「なに？この私にものを教えるつもりか？」

険悪な雰囲気客は蛇に睨まれた蛙のように動くこともできずに制止している。

善い人は冷静に席を蹴って立ち上がったが、アッチラも慌てず騒がずそれに対処し、善い人の席を元に戻し、自

分も席についた。

（はい？）

善い人が目視できるスピードであったが早かった。

ただ、見たところ自分よりは若干遅いだろうと思った。

それにしても、さすが善人と称するだけあって、善い人と速さで肩を並べるとはさすがだ。

善い人は少しアツチラを見直した。

「まあまで。その善事態はいい。俺が言っているのはそれを振るうべき対象のことだ・・・。」

俺はあらゆる情報に通じている情報屋。

お前のこともよく知っている。世界の敵についてもな。」

「うん。」

善い人は席にもう一度座る。

はつとしたように我に返ったマスターが、善い人の目の前に水を置いた。

「世界の敵、すなわち、サイキック組織の現テンマであるトキト。」

「あの人か。」

なるほど、善い人にも思い当たる節はあった。

ただ、よくよく考えてみると、今善い人が善人としての洞察が深くなったのは、

彼女の指摘があったからだ。

純粹な悪であるのか。世界の敵であるのか。

闇雲には今の時点では判断できなかった。

「あの人は確かに悪かもしれないね。」

そういうしかなかった。

「俺の情報に間違いはない。ただ問題はここからだ。お前の仕えて
いる害児。」

やつもトキトに連なる悪。これは明確だ。」

「害児さんが悪人か。」

「そうさ。やつら結託して俺らを敵視してやがる。だから退治しな
ければならない。」

真の善を実現するためには、俺達は戦い続けないといけないんだ。」

「やはり裏切りか……。残念だったよ。害児さん。」

「そうだ！やつは俺達を裏切ったんだ！俺達の善意を踏みにじった。
だから俺達はやつに復讐をしなければならぬ。」

アツチラはしきりに俺達を強調し、善い人に仲間意識を植え付けよ
うとしていた。

実際、アツチラは善人ランクAの善人組織認定の善人の会員であり、
善い人は最低のランク善人として認定された会員であるので、
仲間といえば仲間であった。

が、それはアツチラが一方的に知ってることで、善い人は知らない。
繰り返すが、それを知れば善い人は善人組織を壊滅するに違いない。

善い人は少し考えた後こういった。

「善人対決は？勝負の方法はどうするの？」

「今から害兇の城に侵入し、大儀を果たす。

つまりは、やつが蓄えこんでいるお宝を俺達が分捕ってやるっていう話よ。」

「それが善いことなのかな？」

「そうさ！当然じゃないか。いや何も俺は自分で蓄えこもうなんてこれっぽっちも考えちゃいねえ。

俺は常にみんなのことを考えているんだ。

そのお宝にしたってそうさ。俺はみんなに残さず配りきってしまうつもりなんだ。」

「そうか。私は君の対決方法としてはその善行の出来がよかったほうが勝ちということだね。」

「そういうことだ。審判が居ないと心配か？」

善い人は心外だった。

「いや、善は魂に宿る。お互いの善人魂をかけて戦うならば、嘘はないはずだよ。」

「よし。」

アツチラはうなづいて、金の入った袋を机におき、酒場から出て行った。

「首領！善人組織本部らしき場所を発見しました！」

「ほう。あれですか。」

「はい。」

害兇達一行は、四天王アツチラに車をパンクさせられた弁償を善人組織にさせるべく、その地に向かい、ただいまそこに到達した。

善い人と穀潰しはすんなりと本部にたどり着いたが、それは善い人の特性によるものだった。

今彼らの目の前にあるのは、巨大な竜巻だった。

その竜巻の中には、様々な種類の花が舞っていた。

その竜巻の周りには、テントが見える。中に入らず困っている善人組織の人たちなのだろう。

「幻術のようですね。どうやら薬品に頼った類で質はあまりよくないようですが、規模が大きい。ここまでの技が使えるなら多少の腕はあるのでしよう。」

「ははっ！」

「しかし言うまでもなく王者の威光に勝てるわけありません。」

害児は、木製の義足をつけ車椅子から降り指をくるくると回した。

そうすると、みるみるうちに花の竜巻は勢いを消し、やがて消えていった。

「おおー・・・。」

「やった！これで中に入れるぞ！」

竜巻が収まり、善人組織本部が丸見えになった。

中に入りたがっていた善人会員達は喜び勇んで我先に中に入っていた。

彼らは幻術の解き方を忘れて待機していた会員達であったのだが、中でお祭りが行われている情報は入手していたからだ。

「さて、私達もいきましようか。」

害児はトラックにもう一度乗り込み、軍団を率いて善人組織本部に乗り込んだ。

その有様に善人組織本部は大混乱を起こした。

「う、うわー！攻め込んできたぞ！」

「い、ごろされるー！」

お祭りで楽しんでいた会員達は、突然のトラックの集団に驚き慌て

ふためいて散っていく。

「なんと張り合いのない。いやこれは私の王者としての力が強すぎるだけなのか。」

強すぎる力は結果として不幸を招いてしまった。

害児は猛省し詠嘆したが、いまさらどうにもならず、ぶれずに初志を貫くことにした。

一方、ガスと空中遊泳から戻ってきた穀潰しは、突然の害児軍団の大騒ぎを見て、困惑した。

「なんだありゃ？あいつは一体なにがやりてえんだ？」

「さあ、馬鹿の考えることは我輩にはよく分からん。」

二人はせつかくのお祭りを邪魔されて機嫌が悪くなった。

害児軍団は地に降りた。

何事かと思い、武装した男が害児に近づいた。

善人組織の腕利きなのだろう。

「何か御用で？ここが善人組織と知つての狼藉かな？」

「なんですか。あなたは。この害児に向かってその口の聞き方は何です？」

「何？ヒノキ村自治区の害児だと？嘘を言つな。彼女がここに来るわけではない。」

害児は突然後ろを振り返った。

「？」

武装した男は害児が突然後ろをむき出したので不審に思った。

害児は、鋭く遠くまで届くが、そこまで大きくはない声で号令をかけた。

「連れて行け。」

「ははっ！」

突然現れた黒服に左右から抱えられる武装した男。

「な、なにをするか！」

「さあ！来い！こっちにくるんだ！」

男は引きずられて消えていった。

皆が逃げ惑う中、冷静にその様子を見ていたガスと穀潰しは、あまりの害児の横暴さに呆れ果てた。

「あいつ、やりたい放題だぜ。ガス、こんなこと許しておけるか？」

「しかし、馬鹿に関わって痛い目にあつのもあほらしい話であるが。」

「

「とりあえずもう少し様子を見ようぜ。善人組織だって馬鹿じゃねえ。」

次はそれなりに話せるやつが出てくるはずだ。」

その穀潰しの言葉に呼応するように、辺りに花の風の竜巻が発生する。

その竜巻は徐々に収束されていき、一人の女性があられた。

「ほう、幻術ですか。」

害児は感嘆の声を上げた。

害児も幻術使いであり、その扱いの難しさは知っている。

なので、害児からすれば小者だが、ある程度の幻術を使う人間に対しては、

素直に感心するのだった。

しかし、出てきた女性のいきなりの爆弾発現に害児は度肝を抜かれた。

「さて、ここに何の御用でしょうか？」

あまりおばかさんが過ぎると痛い目にあうのはそちらのほうでございませよ?。」

害児はあまりの罵詈雑言に言葉を失った。

我に返り、ふりしぼるように言葉を吐く。

「どつちらずいぶんな態度ですが、覚悟はできているのですか?。」

「あはは。まあおかしい。早速暴力に訴えるおつもりで?。」

貴方にも何か言い分があるのでしょぅ?」

「ふふ……。多少寿命が長くなるだけしょぅに。おいっ!」

この馬鹿に説明してやれ!」

「ははっ!」

黒服は心得て、自分達がいかに善人組織に損害を受けてか説明し始めた。

「四天王のマリー様ですね?私が説明させていただきます。」

害児は黒服の言葉を聞いてしめたと思った。

花植えのマリーは、四天王の中でも重要なポストについていると聞いたからだ。

つまりは責任能力がある。先ほどの雑魚とは違ってまともに話ができそうだ。

害児は「ふふふ……。」と不気味に笑いながら、成り行きを見守った。

「つまり、四天王義賊のアッチラからタイヤをパンクさせられ、我々は非常な損害を受け、その賠償を払っていただきたいと、そう申すわけです。」

そういわれてもマリーはすました顔で答えるのみだった。

「アッチラなど知りません。」

「義賊のアツチラは善人組織の四天王でしょう？」

「過去そういう人はいたかもしれませんが、今は除籍されております。」

つまり、もうその方は私達の組織の一員ではないということですから賠償なら直接そのアツチラさんとかいう方から取ってくださいな。」

害児は、おのれと思ったが、ここで怒りを爆発させては全て水の泡となってしまうので耐えた。

害児は黒服に眼で合図をした。

黒服は面目なさげに下がり、害児が後を引き継いだ。

「ならば話は変わりますが。」

「今度は貴方ですか……。どうぞ。」

「この馬鹿騒ぎは私に対するあてつけでしょう？」

返答の次第によっては私もどう出るか分かりませんが……。？」

どうやら善人組織の善い人歓迎パレードのことを言っているらしい。マリーは、はっ！と驚いたが、どうせ馬鹿なんだろうと思いい人納得した。

「あー……。このおばかさんは一体なんなんでしょうか？」

まともにお話できる方と話したいのですが……。先ほどの黒服の方と代わったらどうです？

貴方の上司なのでしょう？」

黒服達はその言葉に青ざめた。
そして恐る恐る害児の顔色を伺った。
予想に反して害児は冷静だった。

「お話になりませんね。貴方の眼力程度では所詮王者の足元にも及ばない。」

貴方のような小者では私とは釣り合いません。
とっとと引っ込んで司令官を連れてきなさい。」

マリーはなに？と思いつ頭に血が上ったが、ここで怒れば思いつ壺と思
い、
頭を冷やして冷静に嫌味を言い返した。

「まったく興ざめですこと。」

貴方のような無粋な方のせいでせつかくのパレードが台無しです。」

313

害児はそろそろ埒が明かないと思いつ始めた。

こんな小者相手にいくら言い合ったところで仕方がないのだ。

害児はそう思い突然態度を豹変させた。

「思い知らされないと分からないのか？」

「思い知らされるのは果たしてどちらのことやら。」

マリーは少し図に乗りすぎた。そのため王者の裁きが下されることに決定した。

どうやらマリーの言葉が合図になったらしい。

害児は車椅子に深く腰掛け眠るような目でマリーを見た。

すわっ！とばかりに黒服達はいきり立ち、鼓舞の太鼓を打ち鳴らし

ながら、
マリーを捕獲しようとしたが、
マリーの体は様々な種類の花となって散っていった。

害児は、目をかっと思開いた。

虚像の世界にひびが入り、崩壊し、マリーが姿を現す。

黒服は、幻術が解かれたことに気づき、すぐさまマリーの本体に標準を定めた。

「潰れる！ランダムスフィア！」

そこへ穀潰しが見るに見かね、突然の攻撃に出た。

炸裂する衝撃波が場を荒らし、害児は手で合図をして、黒服達を下がらせる。

「説明してもらいましょうか。穀潰しさん。何か考えがあるのでしょっつ。」

害児は最初から彼らが居たのが分かっていた様子だ。

そして、穀潰しが妨害するであろうことも分かっていたらしい。

マリーもそれは同じで、だからこそあれほど強気な態度に出たのだろっつ。

さすが四天王。馬鹿ではない。その証拠にマリーの姿はすでにここにはなかった。

言われて穀潰しとガスは害児の前に姿を現す。穀潰しは早速害児に文句を言った。

「おう！害児さんよ！

てめえ俺達が楽しく宴会していたのに邪魔をしてくれるとはどうい
う了見なんだ？」

「はて？私が何かしましたか？」

害児には身に覚えのないことだった。

散々暴れまわっておいて何かしたとは随分な言い様だ。

「それにその言い方だとまるであなた達は私と敵対しているように
聞こえますか？」

あなたは私の仲間でしょう？

なら同じ敵を討つのは当然ではないでしょうか？

私の言い分は何か間違っていますか？」

害児は、さらに穀潰しを非難した。

思わぬ反撃に出た害児の攻勢に穀潰しはたじろいだ。

「あ、ああ……。別に祭りを邪魔しないのなら何も文句はねえん
だ。

ただ、考えちゃくれねえか。

俺達だつてむやみやたらにつっかつかつてるわけじゃあねえんだ。

それなりに理由があるんだ。

それとも俺達は楽しく祭りをする権利もねえつてののか？」

と、例によって竜頭蛇尾の勢いで泣き落しにかかった。

その思いは害児にも通じ、哀れに思った王者は下民に言葉をかけてやることに決めた。

「もちろん、あなた達が楽しくお祭りに参加するのは喜ばしいことであるし、

私も別段、賠償金さえこの人たちが払ってくれさえすれば、共に楽しく祭りに参加することはできるでしょう。ただ・・・。」

「害児さん。お話の途中であるが。」

害児は突然しゃしゃり出てきたガスにびっくりし、不機嫌そうに眉を寄せた。

「よろず屋か。何の用か？」

「どうやら芳しくない事態であるぞ。

善い人君と義賊のアツチラが、害児さんの城に侵入し、お宝を根こそぎ奪おうとしている動きが出ている。」

「なに？こうしちゃいられない。」

ガスの言葉を聞いた害児は、お礼も言わず二人のことなどガン無視で打ち捨てて、

慌ててトラックに乗り込み。黒服達もそれに続いた。

彼女らが去った後、ガスは穀潰しに相談をした。

「これからのことについてだが、ここで害児さんに恩を売れば、

我輩の商売が一気にはかどる事は言つまでもないことなのだ。」

「具体的には？」

「つまりは、害児さんたちに先回りし、善い人君らを一掃すればよい。」

「ふつなるほどな。だが勘違いするなよ。俺だってそれくらい気づいていたぜ。」

穀潰しは馬鹿丸出しであったが、ガスはあえてそこは無視をした。

「では我輩らも急ごう。早く行かないと間に合わなくなってしまふのだ。」

「いやちよつと待てよ。こいつあ考えものじゃねえかあ？」

ガスは、不機嫌そうな顔をした。

「何が考えものであるか？我輩らは急がないといけないのであるが？」

「だってよ。どうして俺がお前に指図されなきゃなんねえんだ？」

「協力してくれないなら我輩一人で行くが？」

「そうは言つてねえよ。だがな。礼を尽くすべきじゃないのか？」

「……。」

ガスは無言でプレオに乗り込む。

「ぶおんぶおん！ぶおんぶおん？」

車を発信させようとするが、動かない。

不審に思い車を降りてみると、タイヤがパンクしていた。

どうせ穀潰しの仕業だろう。

ガスが穀潰しのほうを見ると、穀潰しは米袋から米をしきりに口に運び込んでいた。

ガスはしばらく考えたが、結局穀潰しに礼を尽くすことにした。

「穀潰し。改めて頼むが、一緒に善い人君らを討伐するのに参加してくれないか？」

「ああ！俺達は仲間だからな！当然だろ？」

ガスは内心めんどくさいと思わないでもなかったが、
ともかく結果が出てくれれば後のことなどどうでもよかった。

ともあれ、害兇に恩を売る一世一段のチャンスだ。

ただし相手は狂犬善い人、一筋縄にはいかないのは火を見るより明らかであることは
言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587u/>

善人伝説

2012年1月10日08時47分発行